
【全年齡版】好きです、付き合ってください。

透風真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

【Nコード】

N1799Z

【作者名】

透風真白

【あらすじ】

可愛い顔立ちでふわふわの茶髪、猫っ毛の彼は、学校でちょっとした有名人。そんな彼から告白をされました。どうしてだろう。だって私は、女なのに。同性愛の言葉が作中出てきますが、直接的な描写はありません。当作品はボーイズラブではございません。ご了承ください。ムーンライトノベルズにて連載中の同タイトル作品の全年齢版になっております。同じ作者の作品なので無断転載はございません。

第1話（前書き）

こちらだけ読まれていた方は、お久しぶりでございます。お待ちせ
致しました。楽しんでいただけましたら幸いです。

第1話

「好きです、付き合ってください」

お決まりの文句を言われ、はあ、と短く反射で声を発した。

どうしたものだろうか。目の前の光景は実に信じ難い。というよりも、信じなくて良い。と、誰かが告げている。いや、私の頭には特に何も住んではないが、いわゆるあれだ、自分会議というか。そのようなものだ。

昼休みに呼び出され赴いたのは人気のない校舎裏。ここまでくれば大抵の人間はどんな用向きか察しはつくのだが、目の前の人間を前にして、それはありえないだろう、と結論を下した。

それは私自身が異性に好意を示された事が皆無であるからだとか、容姿、人格共にごくごく一般的かそれより多少下ではないかと自負しているからであるとか、高校2年生にもなって発した言葉の意味を正しく理解していないほど純情であるとか、そういった私自身の問題で結論を下したわけではないとどうかご理解いただきたい。

緊張した面持ちで私を見つめる彼、在籍クラスはどこか忘れたけれど、同学年の佐藤昂君。^{さとう けいくん}

接点は恐らくほとんどないだろう。同じクラスになったこともなければ、何かの係で同席した覚えもない。どういうきっかけで私を知ったか。そういった細かい事はひとまず置いておこう。

何故、私が彼を知っているか。

それは、彼が学校内の有名人であるからだ。

「……じゃあ、帰りはいつしょにかえろう」
「へっ」

頭の中で色々と整理していたら、目の前の彼が満面の笑みでそ

んなことを発言してきた。

おや、どうしたことだろう。なんだか彼がひどく輝いて見える。頬を染め瞳を潤ませ、まるで乙女のようににはにかんでいる。この瞬間を写真に収めたならば、男女問わず買ってくれそうだ。佐藤ブロマイド、一枚いくらだろう。儲かるだろうか。

「それじゃあ、またあとでね！」

嬉しそうに手を振って去って行く彼に慌てて声をかけようとしたが、驚きのが勝って、これは最初の返答で男女交際を承諾したととられているなとわかつてはいたのだが、私はそれほど真剣に呼び止める事をしなかった。そもそも、彼も本気なわけではないのだから誤解をといてあげようと親切心を発揮してやる気にもあまりなれなかった。

だって彼は、男性しか愛せない人間であるはずなのだから。

ふうむ、と顎に手をやりながら私は校舎へと戻る。あまりぼんやりしていると、昼食を喰いっぱぐれる可能性がある。正直、空腹をほっておいてまで挑むべき疑問ではない。

図書室へと戻れば、すでに弁当を広げている友人が興味があるのか、戻って来た私に話しかけてきた。

「佐藤君、なんだって？」

当然くるであろう質問に、私は困った顔でお弁当を広げつつ、首を傾げた。

「うーん……わかんない」

期待はずれな私の答えが不満だったらしく、ぴくり、と片眉を上

げ、ふうん、と声をあげる友人に、付き合ってくださいとは言われたんだけど、と正直に話した。すると友人はよほど驚いたのか、口をあぐりと開けて固まった。なんとも珍しい姿である。

数秒待ってもそのままなので、食欲旺盛な私は友人の弁当箱にあるウインナーへ手をつけた。律儀にタコ型になっているそれを見て、友人の母はちよつとした所で芸が細かいな、と感心する。全体的に女の子のお弁当といった風情でとても可愛らしい。自作している私の今日の内容はのり弁当だ。弁当屋に並んでいたら美味しそううつるだろうが、女子高生のそれとしては少々彩りが少ないかもしれない。

戦利品を口に含んで咀嚼した所で、やっと我に返った友人は私を無言で睨みつけると一気に冷気をあびせてきたがさもありません。絶対そうだとは言わないが、所詮この世は弱肉強食、と断言してしまった人もいたではないか。

とはいえ好奇心が勝つてやらかしてしまった悪戯。さらに怒らせたくはない相手を怒らせてしまったのは事実。私が無言で卵焼きをさしだせば、友人はころりと機嫌を直した。

「……でも、それってありえないでしょ？」

まだおかずが入った状態のまま喋るのは少々行儀が悪いが、話の流れを切つてまで今それを指摘する必要性を感じなかったので私は心に留め素直に頷いた。

「まあね」

ちえこ

「千絵子はなんて返事したの」

「そこ」

友人の質問に、私はか、と目を開く。

そう、つまりはそれが問題だ。先程たいした問題じゃないと一蹴

したがそこはそれ。空腹の前には瑣末な事柄であつたがもりもりと腹を満たしていけば冷静な思考も戻るというものだ。相手が本気でないにせよ、承諾してしまった以上面倒な方向へ転がる可能性は高い。

難しい顔をして弁当を貪りつつ説明すれば、なるほど、と友人が頷いた。

「つまり、なんとなく声出したらそれがイエスという意味にとらえられた、と」

「そう、それ」

「変なところで抜けてるのよね、あんた」

苦笑して私の頭をやんわり叩く友人の大人びた表情に一瞬見惚れながら、この友人はとても美人なのである、私はぼんやりと考える。とにかく、告白がまがいものであるのは間違いがない。だからそこを指摘すればいい。そうすれば私は解放されるはずだから。

解放。はて、私は一体全体何にとらわれたというのだろうか。首を傾げながら物思いに耽る私は、とりあえず食べちゃえば、という友人の声に反応して食事を再開した。

先程の友人との会話でわかるとおり、佐藤昴氏のそういつた恋愛観は、実は学校中に知れ渡っている。なぜかといえば、ある日ある女子から告白をされた佐藤君が、につこりと微笑んで「僕は男性しか愛せないからごめんね」というお断りの返事をしたのである。

それから新たな噂が流れ、どうやら佐藤君は同じクラスの幼なじみである男にずっと懸想しているらしい、と知ってから、一部すきものの女子はそれに興奮を覚え、その他の人間も変に面白がって学校全体がそのふたりを応援する図が成立してしまっている。

「……あれ、てことは私は邪魔者になるのか？」

昼食を終え歩く廊下で、腕を組みつつ眉間に皺を寄せる。

学校全体の敵にも成り得てしまう状況に、私はちよつと心穏やかではない。ひよつとするとこれは思った以上に深刻なのだろうか。

これはあくまでも仮定だが、たとえば、たとえば何か、私に声をかけねばならぬ事情があった。私ではなくても良かったのかもしれない。とにかく、異性に告白せねばならない窮地に佐藤君が立たされてしまったでしょう。そうして、告白された私が、「いいよ」と誤解にせよそうやって返答してしまったという事実が今はある。当然、佐藤君はお付き合いをするしかない。みずから告白したのに、了承されて手の平を返すのはおかしい話だからだ。

そもそも、断られる前提だったのかもしれない。全校生徒が噂を知っているのだから、断られると思うか、疑問を呈すだろうと予想するのが普通だ。ひよつとすると、想定外の結果に私以上に彼が狼狽しているかもしれない。

そこまで思い至つて、なんとなく悪い事をしてしまったか、と氣になった。

いや、多分この場合、悪いのは佐藤君になるのだが、のつぴきならない事情があるのなら私はそれを聞くくらいの見は持ち合わせている。気はそうそう短いほうでもないし、今現在私に想い人がいないのも一因だ。誤解されて困る相手がいなければ、焦る必要もない。

ひよつとすると、好きな男性に何か言われたのかもしれない。へんな賭け事でもしたのかもしれない。あるいは。

とにかく、現段階ではあれこれと思考を広げすぎても仕方がない。ある程度の想定をして準備をし、彼の話を聞くのではないか。

教室に戻って席に着いた私は、そういった方向性で話を纏めていた。

「野田^のさん」

放課後の教室にわざわざ迎えに来てくれたらしい佐藤君を見て、クラスメイトが不思議そうな顔をそれぞれ私に向けてくる。今まで接点など何もなかったのだからそれはそうだ。

佐藤君は、とても可愛らしい顔立ちと茶髪の柔らかい猫っ毛から、どこかなにかの動物を連想させる。背はそれほど低くもないが、見た目通り性格もひとなつこい雰囲気があるからか、皆に愛でられている傾向がある。

恐らく、彼が同性愛者であると公言しなければ、もっと頻繁に告白をされていただろうし、女性をちぎってはなげ、なんてことも出来ただろう。本人がそれを望むのかはわからないが。いや、男性だって、付き合いを了承するひとはたくさんいるかもしれない。

そんなしょうもないことを考えつつ、名前を呼ばれ無言で彼の前まで歩いていくと、佐藤君は微笑みながら私の手を取った。

少し驚いて身体を強張らせると、目の前の佐藤君が表情を曇らせた。

彼に動物のような尻尾が付いていたならば、きっとしょぼん、と萎れていたに違いない。泣き出しそうな顔をしつつ、弱弱い声で私に問いかける。

「嫌だった……？」

哀しそうなその声に、私は無言で首を振る。そもそも、強く拒絶する理由も見当たらない。別に私は彼を嫌いではないし、手を握るくらいで頬を染めるほど男性を意識してしまうわけでもない。

それにしても、解せないのはこの行動だ。

嫌々付き合っているのなら、こんなことするのだろうか。私の言動に一喜一憂するのだろうか。それとも、これもなにかの条件で、演技をしなければならぬ理由があるのだろうか。

考えつつ辿り着いた昇降口で、靴を履き替える。つながれていた手が離れて安堵の息を吐き出したということは、なんだかんだ多少

緊張していたということだろうか。心に余裕が出来た所で、私は口を開いた。

「佐藤君」

「なあに？」

相変わらず微笑んだまま、靴を履き替えた私の手を再度取る佐藤君。こうやって異性に触るのは、彼は嫌ではないのだろうか。

「まずちよつと謝罪しておきたいんだけど。私はあなたのお付き合いを了承したつもりはないの」

「え？」

「そもそも、佐藤君は私が女性だと知ってるはずでしょう？あなたは異性を恋愛対象として見れないんじゃないの？」

無言で固まる佐藤君の前に、私はとりあえず頭の中であれこれ考えていたことを口にしてみる。

「私、佐藤君が言ったことにびっくりして思わず声あげちゃったんだけど、それを勘違いして了承の返事にとっちゃったんだよね？それは謝罪させて、ごめんなさい。ただ、何か事情があるんなら、聞くのはかまわない。罰ゲームとかで告白しなきゃいけなかったとかそういうのなら、今すぐこの場で終わらせよう。好きでもないのに付き合ったりするのは苦痛だろうし、佐藤君が好意を寄せてる人に色々と誤解されたら嫌でしょう？」

伝えたいことをとりあえず伝えて、彼の反応を待つ。すると何かを思案しているように顎に手をやり黙り込んだ佐藤君は、しかし一分もかからないうちに顔を正面に戻した。真剣な表情で私をみつめる。

「わかった。本当は……何も言わないでおこうと思っていたんだけど、それは卑怯だね、ごめん。覚悟して事情を全部話すよ」

真剣な表情になった彼につられて、私はごくり、と唾を飲み込んだ。

「でも、ここでは話せないから……場所を変えよう」

頷きながら私は彼にひかれ歩き出す。しかし、やっぱり手は離さなくていいのかな。私は気になって訊ねると、そのままでもいいんだと微笑んで答えられた。

ひよっとして、事情とやらにこれの理由も含まれているのだろうか。少しうずく好奇心が、多少彼の言葉を急かすけれど、話してもらせることにかわりはないのだから、と無言で彼と帰り道を歩いていた。

第2話

季節は初冬だけれど、今日は春のように暖かい。小春日和というのは、一体いつからいつの言葉であったかわからないから、心の中でも使ったらいけないわかないし、なんて思っていたら、目的地に着いたらしい。少し前を歩く佐藤君の足がぴたりと止まった。

見れば、なんの変哲もない公園だった。遊具もそんなには多くないからか、夕日がぽっかりと浮かぶ空のこの時間帯にはもう子どもはいなかった。カップルが訪れるにしてはまだ早いかもしれない時間で、つまりは誰も居ない空間のベンチに、すすめられるまま私は隣りあわせて腰かけた。

離された手を一瞬視界に留めてから、佐藤君へと視線を向ける。

佐藤君は、正面を向いてなにやら考え込んでいた。

恐らく今は声をあげないほうがいい。彼の言葉をじっと待った。

「……知ってた、んだね」

「？ は」

ぽつ、と呟かれたその意味が一瞬わからなくて、思わず短い返事のような声を発してしまう。そんな私の曖昧な音に困ったのだろう。疑問符を浮かべた顔でこちらを見てくる佐藤君に少し慌ててごめん、と返した。

「意味がわからなくてだね。ええと、知ってたとは？」

「あ、そういう喋り方が素なんだね。そっちのほうがくだけた感じで僕は嬉しいな」

いや、今そんな話じゃなかったはずですけど！？と、思わず脳内でつつこんでしまったが、口に出していないから問題はなからう。

確かに、先程は少々気取った話し方ではあつたろう。けれどもほぼ初対面でありながら巻き込んだ責任感からなのか、彼は私に重大な何かを話そうとしてくれている。それならば、私も本来の姿で臨むのが礼儀であろう。と、思わなくもない。

いいや、単に勝手に素うどんな私が出ただけである。言つててうどんてなんなのだろうか、とやはり自身に問いかけたが、所謂その場の勢いであつて、深い意味はないよ、と回答された。そうですか、わかりました。

夕日に照らされる空を一瞬見上げ、美味しそうな色である、と食欲ばかりに結び付けたがる思考を少々叱りつつ、私は佐藤君へと向き直った。

「素とか素でないとか、今は置いとかんかね？とりあえず、さっきの。どういう意味なの？知つてたんだねって何が？」

私の言い様にしょぼんとしながらも、再度の質問に佐藤君はああ、と頷く。

いや別に、本当の私なんて知らないくせに、とか素とか素でないとかそんなの知らないよ、とかそんな風に思つていたわけでは決してないんだ。そんなに情けない顔をしないでくれまいか。悪い事をしてしまつたみたいだ。ただ、目の前にぶらさがつたままの疑問を優先させてしまつただけなのに。言い方が少しきつかつたろうか。

ああ、と言つてから、彼の言葉がどうにも続かないので、私はぱたぱたと左手を上下に振つた。あらいやだ奥さん、とかおばちゃんがやつてる仕草そのものだ。それにたいして別に若人である私はなんら抵抗を感じない。ちなみになぜ左手なのかと言つたら私が右、佐藤君が左側に座つたからだ。

「あのさ、佐藤君。別に私は言われて憤慨したわけではないのだよ？ただ、さっきの言葉が氣になつちゃつただけでさ。この喋り方が

お気に召してくれたんなら私としても気が楽だよ。かしこまんなく
ていいってことなんだし」

わはは、と笑い声も付けながら言えば、佐藤君は萎れたしつぽを
ぶんぶんと振り出した、ように見えた、実際に彼の尻から尻尾が生
え出したわけではない、ので、私は安堵の息を吐く。

というわけで、仕切りなおした。なんだかなかなか先に進まない
ではないか。

「知ってたんだって言うのは、僕の恋愛対象が、その」

言い淀む佐藤君の言葉を引き継いで、私は声をあげる。

「同性愛者？」

「……知らないんだと思ってた」

「学校内で知らないひとはいないと思うけど」

苦笑する彼に、私は頬をかく。どうしてそんなに、まいったなあ、
って顔をしているんだろう。でもそうか。ということは、彼は私が
佐藤君が男性が恋愛対象であるってことを知らないと思ってたわけ
だ。そして今、彼はその事実直面してどうやら困っている。何か
を隠したまま、私とお付き合いを継続させたかったんだろうか。そ
れは一体なんだろう。きっと、その理由はこれから話してくれるの
だろうけれど。

そんな事を思っていたからだろうか。佐藤君が意を決したかのよ
うに正面に向いていた顔をこちらにぐるり、とまわしてきた。

近くで見ると、やはり整った顔をしている。その整った顔は今、
私を真剣に見つめているのだと思うと、妙な緊張感が生まれてきた。
口元を注意深く見つめていれば、元々ゆっくりとだったからなの
か私の目の錯覚だったのかはわからないけれど、佐藤君が唇を開く

瞬間がまるでスローモーション映像のように私の瞳にはうつった。

唇の形すら、綺麗だ。

そう思ったのと、彼の声が耳に届いたのは同時だった。

「わからないんだ」

「え？」

反射的に聞き返すと、佐藤君はまた正面を向いてしまった。ああ、私は彼の可愛らしい顔を真正面から見たいとどこかで思っていたようだ。無意識下の自分に少し驚く。

「僕は、本当は女性が苦手なだけなんじゃないのかなって。ひよつとすると、男性が好きなんじゃなくて、ある種の恐怖症のようになってるのかもしれない」

佐藤君の告白に私は目を丸くする。ええと、それはつまり。

私は頭の中で考えを整理していく。

女性不信、女性恐怖症。女性に嫌悪感を抱く。まあ、とりあえずなんでもいいが、そういった感情を女性に抱きがちな男性がいたでしょう。しかしそれじゃあ、その男性が同性愛者なのかといったらそれはまるで違う話になるだろう。それは、女性に当てはめれば何かのきっかけ、たとえば某かの行為、痴漢であるとか、で、男性全般が恐怖の対象になってしまった。として、その女性は同性愛者か？やはり違うと言えるだろう。

私たちは、まだ16、7そこそこの小坊主、小娘、俗っぽく言えばガキ、である。と同時にとても多感なお年頃だ。不安定で、思い込みも激しいところがあるし、まだまだ自分の考えに確固たる何かを見出せる年齢とはとてもではないが言い難い。そんな我々が、そういう感情を勘違いしてしまう事は、決して有り得ない話ではなからう、とこの時私は結論を下した。

でも、とここで私は疑問を抱いた。

「あの、気分を害さないで聞いてほしいんだけど。今現在の想い人って、あくまでも噂だけれど、同性の幼なじみなんですよ？その人の事は、どうなの？佐藤君は好きじゃないの？そうじゃなくとも今まで好きになった相手は？」

私の質問に、佐藤君は特に不快感を抱かなかったようだ。顎に手をやり、そこなんだ、と声をあげる。

「僕は、ずっとそう思い込んでいたから、幼なじみの事もそういう対象としてみていると思ってた。でもね、少し前に言われた一言で、僕は何もかもわからなくなった」

ほほう。その一言とは一体なんぞや。
心で呟いたすぐあと、彼から答えが返ってくる。

「お前が俺に抱く感情は、友情とどう違うんだ、って」
「！　ほう、それはそれは」
「……とっさに、言い返せなくて。思えば、恋人同士でするような事を今まで好きになった人たちとしたいと思ってたかったかもなっ
て」

恋人同士でするような事。

その一文を聞いて頭の中を流れたあれやこれやは、まあ外れてはいないんだろう。そういうことを、佐藤君は今までしていないということがあるか。

私も誰かと交際した経験がないからわからないけれど、きっと好きな人とはそういった行為もしたくなるのだろう。自然と、求める心も生まれてくる、はずだ、恐らく。

物質的な何かを求めるのは、そもそも若ければ若いほどそういう衝動は大きいんじゃないのだろうか。男性側は特に。わからないけれど。さっきからわからないけど言い過ぎているけれど。

戸惑いつつも、好奇心からなのか。私は気付けば口を開いていた。「キスとかもあまりしたいと思わないっていうこと？ またはしたことがない？」

さすがにこれには答え辛かったんだろう。一拍置いてから、佐藤君が見る見る頬を染めていった。瞳を潤ませて戸惑うその表情は、そんなつもりがなくともなんだか変な気分になる。別に私はどこぞの中年ではないのであるが。可愛すぎる君がいけないんだ、という男前なセリフが私の脳を突き抜けていった。もちろん、声に出して言うほどハッピーな人間ではない。

「その、したことは……」

「！ あるんですな」

なんか若干変な言葉遣いだけど気にしてはいけない。動揺が隠しきれなかったのかもしれないし、単に興味津々になってしまったのかもしれない。案外私も野次馬根性が盛んであったのか。

真っ赤になっつてうつむく可愛い男の子にどうしたらいいかわからずしばらく無言でいたが、やがて佐藤君はぽつぽつと呟くように話し出してくれた。

「その、なんていうか、僕からというよりも向こうから半ば無理やりっていうか。その時も、気持ち悪いまではいかなかったけど、かといって良くもなく。手を繋ぐくらいで十分だと思えたし、それまたまにじゃれあいみたいのがあればそれでいいな、って」

「ああ……なんか男子ってたまにアグレッシブな遊びをやったのけ

てますのう、そういえば」

なるほどなるほど、と頷きつつ、彼の言葉を聞く。そうか、それならば確かに……微妙、といえるかもしれない。いや、男性を愛する気持ちはあるが、ひよっとすると女性も特別に無理、というわけではないのかもしれないという可能性もある。つまりはどちらも、という人々。そこらへんは詳しくわからないけれど、いずれにせよ、佐藤君が言いたかった真実を大体把握できた。出来た、けれども、はて。

「……私は、なぜあなたと付き合わなければならんの？」

首をこてん、と傾げつつ佐藤君の方を向く。

私の言葉に佐藤君がば、と俯いていた顔をあげる。興奮状態なのか、立ち上がって何かを言おうとした、矢先。

私のお腹が、暴君の如く痙攣を起こした。

「……とても元気な腹の虫だね」

佐藤君が気を遣って言葉を選んでくれる。でも、その綺麗な顔は引き攣っていた。私は気にせず自然に微笑んでみせる。

「優しい言葉をありがとう。……ふむ、現在時刻は17時。暗くなってきたしそろそろ帰るか場所を移動するのがよろしかろうて」

「？ 移動」

「腹が減ると人間それを最優先させる傾向にあるから、どうにも思考が短絡的になっていけない。であるから、空腹は満たすべき。真剣な話し合いをする前ならば尚更。というわけで佐藤君、この後のご予約は？」

とくとくと語る私に、面食らったのだろう。
目を丸くした佐藤君は、立った状態のまま勢いを失って戸惑いの表情を見せた。

「いや、特にありません」

多少情けない声音になっている。なんだか申し訳ないが、目下、最優先事項はこの腹減りをどうにかすることである。

「お家で誰かがご飯を用意していたりは」

「いや、僕の家、両親共働きで、母親がけっこう作り置きしてくれてはいるんだけど、今日は外食用のお金をもらってるんだ」

「それはそれは。ではおいでませ」

「？ おいでませ、ってどこに」

佐藤君の問いかけに、私は微笑んだ。

野田という表札が出ている一軒家。所謂住宅街にあるそれは、ごくごく平凡なものだ。しかし私の隣に立つ男の子は、それをとても珍しい何かのようにまじまじと口を開いてみつめていた。

なんだかその反応がおかしくて、笑った。

「佐藤君、固まってないで入りなよ」

「……えっ、いやでも」

「別に遠慮しないでどうぞ。誰もいないから」

「ええっ！？」

私の返答に更に驚く佐藤君。なんなのだろう。とにかく私は早くこの空腹をどうにかしたいのだ。

「いいからほら。タダメシ食らうからには手伝ってもらうからそう気にしなさんな。早くはやく」

「お、おじゃま、します」

私の言葉に観念したのか、観念という言葉もなにやらおかしいが、佐藤君は戸惑いつつも玄関へと足を踏み入れた。

リビングに通して、少しだけ待つように告げれば、私は二階の自室へと足を運ぶ。

少し急いで着替える。いつもの部屋着だ。料理するのに格好を気にするのは良くない。佐藤君はもう私の中でお客様っていう立ち位置でもないから、外見を気にかけても仕方がない。

少し早足で階段を駆け下りて、ごめんね、と佐藤君に一声かけると、佐藤君が固まった。予想はしていたけれども。

「……それ」

「中学校時代のジャージ。便利だよ、汚れても気にならないから。ほれ、これをお使い。ブレザーは脱ぎんしゃい、動き辛いだろうから」

四人がけのダイニングテーブルの上にあったエプロンを佐藤君に投げてよこせば、彼は慌ててそれを受け取った。よしよし、言うとおり装着しましたね。

「佐藤君、料理の経験は」

「ごめんなさい、ほとんど……」

「謝らんでよろし。覚えておくと便利よー、今は男も料理作れるとポイントが高い！らしい」

「……………野田さんは、料理作れる男のが好き？」

佐藤君の質問に私は腕をまくりつつ手を洗ってうーん、と声を上

げる。特にそうだからってわけではないけれど、まったくしない人や、家事労働に抵抗のある人よりもやってくれる人のが良いのは確かだ。特に偏見かもしれないけれど、男のするものではない、と言っている種類の方は、日々のお礼を怠る傾向がある気がする。ならない。たとえ全く手伝ってくれずとも、美味しいよ、ありがとう、という言葉の威力ははかりしれない。私は、物心ついた時から毎日当たり前のように家事をこなしているけれども、正直、両親の感謝の言葉がなければ、もっとひねくれていたと思うのだな。

そんな事を頭の中で反芻する家事労働と交えつつ考えながら、私は頷く。

「そうだね、私はいつしよにやってくればかなり嬉しいな」

「！ 僕でも出来ることってなにか、なにしたらいい？」

佐藤君がブレザーだけでなくネクタイも脱ぎ捨てて腕まくりをした。急にやる気を出してどうしたことだろうか。でも非協力的よりずっと嬉しい。私は微笑んでそれじゃあ、と口を開いた。

「あーあー、そんなに正確じゃなくていいんだよ、要は食べやすきやいいんだから」

「そういうもののなの？」

「そうそう。こうやって一回切るごとにくるつとまわして」

「そうやって切るんだあ！」

見本に横でにんじんを切ってみせるだけで、佐藤君は感嘆の声をあげる。なかなかどうして良い生徒だ。微笑ましい思いで私は佐藤君の手元を見やる。

「うん、うまいうまい。あ、にんにくは苦手？」

「！ ううん、むしろ好き」

「よかった。じゃああとは、サラダ作ってもらおうかな？」
「はい！」

大変良いお返事ですね。

「ごめんねー、ぜんっぜん凝った料理でもなんでもなくて。でもご飯はガーリックライスにしたから一手間かかってますよ！」

「いや、十分だよ！カレーって久しぶりかも」

「サラダは個人的な趣向でミモザサラダにしました、召し上がれ」
「へー、これってミモザサラダって言うんだ。いただきます！」

ミモザサラダ。本当は黄身だけ使っただけど、私はもったいないので白身もいっしょに使います。美味しいよ。

サラダとカレー。なんてことない食卓だけれど、やっぱり誰かと向き合って食べるのは美味しい。両親は別に子どもに無関心な親っていうのでは全然なくて、いつも私を気にかけてくれるし時間を少しでも作ってくれようとはするけれど、出張も多いし夜は遅い事がほとんどだ。だからせめて健康的な食生活を、とふたりのぶんのお弁当も作っているし、それが苦痛ではないけれど、それでもやっぱり寂しいって感情はどこかしらあるもので。

「佐藤君の家も、ご両親忙しいんだ？」

「うん。最近は家政婦を雇おうかみたいなのも言ってたかなあ」

「へえ……」

「なんとかやってくれようとはしてたけどそろそろ限界みたい。僕もかまわないよって言ったから、近々そという人が来るんじゃないのかな」

「そうなんだ。じゃあお母さんの料理食べなくなるのちょっと寂しいね」

「うーん、そうだね。でも、両親にそこまで無理もさせたくはない

から、そう我儘も言っていてられないし。僕は野田さんみたいに家事を一手に引き受けるとか、そういうことも出来なかったんだから、やっぱりしょうがないかな」

口ぶりから、どうやら佐藤君の家も特に「両親と険悪な状態」というわけではないみたいだ。それでもやはり、仕事が忙しければどこかしら心に空間は出来るもので、なんとなく、私たちは空気でそれを感じ取った。お互いにどこか照れ臭くて、誤魔化すように微笑みあう。

「片付けは僕がやるね。ごちそうになった御礼に」

「あー、そらありがたい。悪いねえ。なんなら明日のお弁当とか作ろっかい？」

「それじゃあきらかに僕のが御礼が足りないんじゃないかな」

「そうかねえ？食器を洗った上に拭いて棚にしまってくれたらほんとになるんじゃないかな」

「それはそこまですたら作ってくれるってこと？」

「別にかまわんけども。ただかわゆらしいのは作れんよ。ザ・弁当みたいなのか作れんよ」

「なにそれ」

笑う佐藤君につられて私も笑う。ひとしきり久しぶりの人と食べる晩ごはんを楽しんだ。

それから私はお弁当作りを、佐藤君は後片付けをそれぞれやって、無事佐藤君に完成品を渡し、お茶でも飲むかー、とふたつマグカップを用意した、ところで何かを忘れているような気がした。

「……千絵子さん」
「ほっ！？」

マグカップに牛乳を注いでいたところで背後から呼びかけられ、とても間抜けな声をあげてしまった。ああこれお茶ではないけれどもお気になさらず、とか口に出しつつも、なんだか少し動揺している自分がいる。

一体全体なんだというのだろう。どこか圧力のようなものを感じなくもない。冷たいシンクに手をついた彼は、背後から私を囲うようにしている。これでは牛乳が温められない。レンジの前に移動させてくれ。

しかし私の願いもむなしく、佐藤君はそのままの態勢でそう呼んでいい？と訊ねてきたので、お好きになさってくださいえ、と私は返答した。

「ねえ、千絵子さんは、さ。こんな簡単に誰も居ない家に男の子を上げちゃうの？」

「ん？んや。そんなあばずれみたいな真似はしないよ？」

「あばずれって」

私の言いようがおかしかったのか、背後でくつくつと笑い声が聞こえる。

「さっきの話を聞いてはいたけどもさ、でもふたりきりになったところで別に佐藤君が私をどうこうすると思えなかったし。だって女の子が苦手なんですよ？」

「問題は、そこなんだ」

「？　そこ」

佐藤君がシンクから手をどかしてくれたので、私は背後にいる彼へと向き直った。振り向けば思った以上に近かったその距離に多少狼狽する。顔、けっこう近いんですね。

「どうして付き合う必要があるのか。千絵子さんはそう訊いたね」

佐藤君の言葉に、私は頷く。

それを見届けたからか、佐藤君はいつかいまばたきをすると、すつと口を開いた。

「僕の女性への苦手意識を、払拭する手助けをしてくれないかな。その為にも、僕と交際をしてほしい」

「……ほほう」

「名ばかりの恋人、というわけじゃない。つまりは、公園で話していたように、恋人同士がするようなことを、僕としてほしいんだ」

「それは、ええと」

「うん、手を繋いだりとか、あの、キス、とか」

あまりの出来事に面食らっていたのかわからないが、私はもう一度ほほう、と呟いていた。

というか、そんな、頬を赤らめて言わないでほしい。そこいらの女の子より美しい。

そういえば、先程一回した佐藤君のまばたきは、とてもとても綺麗だった。

まあ、どうでもいいことだけれど。

第3話

まず、頭を整理しよう。しかし、今の私には何かが足りない。はて、それはなんだろうか。そう考えて、私はひらめいた。糖分である。

私はひとり納得して頷くと、牛乳入りのマグカップを持ち上げれば、佐藤君に声をかけて通してもらい、すぐ傍にあるレンジへとふたつのそれを放り込んだ。熱々にしたいので操作盤を押して、3分温める。カップラーメンが出来る時間と同じだ。

「……行動の意味を訊いてもいいかな」

背後から聞こえてくる静かな声に振り向けば、じつとこちらを見つめる佐藤君。腕組をして私に理由を問うている。私はどうしてそんな質問をされるのかわからなくて、目を丸くした。

「当然でしょう。今の自分には理解出来ない事を言われたの。糖分が足りないからだよ！あ、佐藤君も飲むでしょ？ココア」
「……ぶっ」

私の答えの何がそんなにおかしいのか、佐藤君がついに声を上げて笑い出した。

何をそんなに笑う事がある。だって理解出来ないのに、腹は満たされておるのだから、足りないのは糖分であろう。脳にお砂糖、と言うではないか。

首を傾げて彼を見ると、私が疑問符を浮かべた顔をしているのがますますおかしかったのか、佐藤君は肩を揺らして笑う。

いや、ひょっとして、と思う事もあった。人よりも何かずれているところもあるうか、と。しかし、その齟齬はきつと些少なものだ

と今まで信じてきたし、今現在もそう思っている。けれども目の前の佐藤君の様子を見ると、つい数分前の行為は、大変面白いものであったらしい。ふむ。

温め終わったのを知らせる音がリビングに鳴り響き、私はマグカップを取り出す。

スプーンでちよいちよいと張っている膜を取り除き、ココアの粉を入れる。ぐるぐるとかき混ぜて完成。はい、と渡したら、私はリビングのソファへと腰を落ち着かせた。たすん、と隣を叩いて、佐藤君も隣に座るよううながす。

おや。なぜそこで目を細めてこちらを見やるのであろうか。首を傾げるも、佐藤君は特に何を発するでもなく、無言で私に倣った。公園の時とは違い、今度は私の右隣に佐藤君が居る。

こくん、と一口飲めば、脳に糖分が行き渡る錯覚に陥った。なんだか今なら良いこともひらめきそうである。思い込みだとしても、そういった気持ちは大事なはず、だ。

マグカップをテーブルに置いた音がし終わったあと、私は一瞬呼吸を忘れた。なぜならば、物理的に呼吸を塞がれたからである。

綺麗な唇が、平凡な私の唇に吸い付いている。

触れるだけならばキスとか口付けとか、そんな言葉で済ませられるのだが、なんとなく、接吻という単語が私の頭を巡った。意味合い的には同じであるうが、日本人だからだろうか。そちらのがより深い繋がりがあるような感覚になる。

あれこれと、ほぼどうでもいいことを思考していれば、その間も無遠慮に佐藤君の唇は私の唇に好き放題触れ、ちろり、と覗かせた舌が私の下唇を舐めた。

びくん、と肩を跳ねさせて驚いてしまった反射なのか、私は薄く口を開いてしまった。それを待っていたのかはわからないけれど、佐藤君が私の後頭部に手をまわすと、そのままより深い口付けを私にほどこしてきた。

「む……ひゃによ……」

名前を呼ぼうとしたけど無理だ。呂律が回らないところの話じゃない。息苦しい。ぴちゃぴちゃとんだかいやらしい水音まで耳に響いて、私の唾液だったらなんか嫌だなあ、なんて思う。粘膜と粘膜が混ざり合うつて、なんだか物凄く卑猥じゃないだろうか。

それにしても。

恐らく先程私がキスと呼ぶようなものしか彼は経験してない口ぶりなのに、どうしてこんなに手馴れている様子なのだろうか。それとも所謂、接吻を経験済みなのか。

頭の芯が痺れる。何かを注がれているみたいに、ぼんやりと思考が鈍くなる。そこまでいったところで、佐藤君がゆっくりと唇を離した。

気付けば目には涙が溜まっていて、顔が熱い。息も苦しかったから、はふはふと浅い呼吸を繰り返す。

「……うつわ、やばい」

この時の私は、彼が何を呟いていたかなんて考えられなかった。もし気付いていたならば、違う結末もあつたろうか、と後になって考えたのだけれども、すぐにきつとそれはないな、と一蹴していた。やっと呼吸が落ち着いてきた私の頬に、佐藤君の右手が触れる。

彼の手の平は、温かくも冷たくもなかった。

「……真っ赤だね」

「真っ赤じゃないほうが良かった？」

「うつん、可愛い」

ふふ、と笑ってそんな事を言うあなたのがよほど可愛い顔をしていると思うのだが。けれど今はそんなことどうでもいい。さすがに

ここは憤慨するタイミングだとわかっているのだが、なんだか私はどうにもそういう気になれなかった。なぜであろう。彼にたいして同情的であるからなのか。単に綺麗な彼の顔にまいてしまったからなのか。

なにしろ突然の出来事に驚いてしまって、正しい、と言うとおかしな表現だが、反応が出来なかったのかもしれない。

「ねえ、嫌だった？」

佐藤君の言葉に私は考え込むが、生理的な嫌悪感は無かった、と告げれば、正直な感想だね、と空気で微笑む。うつん、他に思い浮かばなかった。

「僕もね、嫌じゃなかった。女の子に触れても、嫌じゃなかったんだ」

「それは。良かった、でいいのかね」

「うん、良いんじゃないかな？トラウマを克服するという意味では」
「……なるほど」

やっと思考が戻ってきた私は、ぼんやりとしてソファに沈めていた身体を起こす。

「ごめんね、突然。でも、千絵子さんさえ嫌じゃなければ、僕はそのまま千絵子さんと恋人同士でしか出来ない事をしたんだ」

「なんと。それはつまり、私で女の子に対する苦手意識をなくしたいということと相違ないね！？」

「うん、まさにそういうことです」

ふむふむ！何度も頷きつつ、私は援軍を送る心持ちでココアを飲む。

私の行動にあ、と気が付いたのか、佐藤君もいただきます、と言って用意したココアに口を付けた。美味しい、と微笑む彼はやはりとても可愛らしい。

ひょっとして、私はこの顔にどこかしら弱味があるのだろうか。でなければ、いくらなんでもろくに話したこともない彼から接吻をされて憤慨しないのはおかしい。

私もあばずれであつたか。

多少悲しくなりながらも、ならば仕方ない部分もあるう、と納得する。本能は、しょせん何事にも勝るはずなのだから。

「……でも、何故私に？記憶が確かであるならば、私と佐藤君はまるで接点がなかったのじゃないかね」

「だから。こんな事言うのはあれだけど、接点のある子にはそんな馬鹿正直に頼めないし、そういう噂に興味がなさそうな子に声をかけてみようと思ったんだ。単純だけれど、真面目そうな人の集まる場所って図書室かなあ、と思って、そこでたびたび千絵子さんを見かけて。真面目すぎるのもやっぱり難しそうだけれど、お友達との会話を耳にしたとき、そのへんのバランスが良さそうだって勝手に思ったんだ。千絵子さんみたいな人なら、ある程度付き合って、別れられるかなと思って。ミーハーな子は後々大変そうだし」

「おや、なかなか辛辣なお言葉だね」

彼の事はまだまだわからないとはいえ、今までの様子からしてらしからぬ発言に、私は目を丸くする。

佐藤君は、申し訳なさそうに首を竦めた。

「……ごめん。僕も、やけになってたのかもしれない。好きな人に気持ちを否定されて、ましてそんなことない、って言い返せなかった自分自身が情けなかったんだ」

「そう、か。うん、そうだね……」

もしも女性が駄目だと判明したならば、いや、むしろその方が、佐藤君にとっては幸せな結末なのかもしれない。だからこそ、彼にとつてこれは大袈裟かもしれないが人生を賭した最大の勝負事なのだ。

お付き合い、か。ふうむ。現状、嫌だという感情は沸かないし、私は彼に対して同情心を抱いている。おまけに、行為も最後までは至らないと約束してくれているし。

流されてる感があまりに否めないが、ここまで話を聞いてしまつて、無理ですさようなら、と言えるような強さも私にはない。操を立てる相手もないのだし、どうにもそういった部分に深いこだわりが持てなかった。

「でもさ、それなら周りには私と付き合つてるって言わないほうがいいよね。そのほうが何かと都合良いだろうし」

「！ 千絵子さん……僕と恋人になつてくれるの」

返答に目を丸くした佐藤君を真正面から見据えて、私は頷いた。

「乗りかかった船つて感じだね。ただ、その、無理な行為は無理つて言うと思う。なるべく応えるようにはするけど。その、それでもいいですか」

「そ、それは全然！むしろ、僕が悪いんだし！」

慌ててそう告げた佐藤君に良かった、と微笑めば、佐藤君も同じように微笑んだ。

「……あの、千絵子さん。もう一回、キスしても良い？」

「ほへ」

「さっきの、嫌じゃなかったって感情、勢いでパニックになつただ

けかもしれないから。冷静になった今の状態で試してみたいんだ」
「ええと、そうか。あの、じゃあ、お手柔らかにお願いします？」
「どうして疑問系なの」
「なんとなく」

ふふ、と笑んだ私に了承を取れば、佐藤君はそつと私に近付いた。先程とは違って、ゆっくりと綺麗な顔が近付いてくる。余裕が出来たからか、彼の顔をじっくりとながめられる。くりくりとした瞳の中が綺麗。伏せる睫毛も綺麗。私を驚かせた唇の柔らかさも、ついさっきの事だから、よく覚えている。

ちゅ、と触れ合う音が耳に届いた。一回目には気づかなかった発見に少し感動しながら、私はゆっくりと目を閉じる。なぜ目を閉じるのか、体験するまでわからなかったけれど、より相手を近くに感じたいからなのかもしれない。

視覚が奪われて、他の五感が冴えていく。触覚、聴覚。少しでも触れられればそのぬくもりを敏感に感じ取ることが出来る。先程とは違い、口腔内というよりも唇を味わうように、佐藤君はやっぱり私の唇を甘噛みする。その延長で、舌をちろり、と出して舐めたり、佐藤君の唇全体で挟まれて、吸われたり。

溶けてきた思考で、それが気持ち良いと感じる。私って、ひよつとして淫乱だったのかな。そんなことまで考えながら、ちろりと伸びる舌はどんな様子なのか見たくなくて、そろり、と瞳を開けてみる。

驚いた事に、てっきり閉じていると思っていた彼の瞳は、ぱつちりと開かれていた。

目を見開いた私に気付けば、瞳で笑った佐藤君は、そつと私の唇を弄んでいた舌を離す。まるで私が見たがっていたことを知っているみたいだ。

ああ、やっぱり、綺麗。

ぼんやりとそんな事ばかり思っていたら、佐藤君が微笑んだ。

「昂って、そう呼んで」

「……え？」

「ふふ、まだぼんやりしてる？かわいい」

頬に手を添えられて、優しい声音でそんなことを言う。私はそれがとても恥ずかしかったけれど、同時に冷えた手の平が気持ちよかった。いや、佐藤君の手が冷えたというよりも、私の頬が熱すぎるのだろうな。先程の行為のせいだと思ったら、なんだかますます温度が上がりそうだった。

私は何かを誤魔化すかのように、ちらり、と佐藤君を見やる。

「え、ええと、あの、す、昂君？」

「うん、そう呼んで」

わかった、と私が頷くと、佐藤君は再度微笑んだ。

それから、ココアをすべて飲み干して、佐藤君は帰った。

駅までの道がわかるのか心配だったから、いっしょに行こうか、と言ったけれど、夜は危ないから、と断られてしまった。なんとも紳士的であると同時に、そんな風に女扱いされると、気恥ずかしい。パタパタと顔を扇ぎつつリビングに戻ると、携帯電話が振動する音が響く。静かにしていると、けっこう聴こえるものである。

私はポケットからそれを取り出せば、登録した覚えのない名前に目を丸くする。通話ボタンを押すと、そこからは先程まで話していた佐藤君の声が聞こえてきた。

『無事駅に着いたよ』

その言葉に、よかった、と私が告げる。そういえば、携帯電話の番号を覚えてくれとさっき佐藤君が言っていたな。何か操作して私

の番号はわかったから、と返されたから、まさかこちらに彼の番号が登録されているとは思わなかった。佐藤昂という名前が、きちんと着信者名に出ている。

私は、彼の言葉に微笑んだ。

『そうか、それはよかった。家までも、気をつけて帰ってね』

『ありがとう。じゃあ、また明日ね、千絵子さん。これからよろしく』

その言葉にこちらこそ、と返事をして、電話を切った。

台所へと足を運べば、片付けようと思っていたマグカップは、綺麗に洗われ、あるべきところに戻されていた。きっと、佐藤君がやってくれたんだ。でも、いつの間に？

「……そういえば、あんまり顔が赤いから顔を洗ってきたらどうだって佐藤君に言われたな」

きっとその間に片付けてくれたのだろう。なんと、好青年である。気付けば私は、よくわからないかたちで終わらせてしまった初めての接吻を、特に悪い記憶として残すこともなく微笑んでいた。

第4話

携帯電話の番号とアドレスを交換し、けれど特別何かをやりとりしたわけでもない。果たして、お付き合いというものが具体的にどういったものかと考えたけれど、そもそもがお付き合いというものを正式にする必要がないのだということに気が付いた。

極端な話、女慣れする為に適度に私と会話をしたり触れたりすればいいわけで、特別に親しくする必要もないだろう。情がわけば、別れも辛くなるし、私にとってもそのほうがいいだろう。

「……ん？あれ？」

今重大なことを心の中で呟いたよな。こんなことが過ぎるということは、ひょっとして私はすでに彼にたいして何か特別な感情を抱いたのだろうか。

嫌いではない。話しやすいし、彼の隣は居心地が悪いわけでもない。そもそもが、特別な感情、所謂、好きとはどんなものだろう。自分に問うてみたけれど、答えは出なかった。糖分が援護をしたところで、答えを出すのは無理だという事くらいはわかったけれど。

「千絵子さん」

「！ 佐藤君」

明日、と言われたけれど具体的に何も口約束をしていない状態だったから驚いた。友人と図書室へと移動する途中で、佐藤君が教室に現れた。出入り口に立つ私の隣に居る友人は目を丸くしている。

「良かった、行き違いになるところだったね」

「どうしたの？」

「せっかく作ってもらったんだし、いつしよに食べたいなと思って
お友だちさえ良ければだけど……」

佐藤君が首を傾げて私に告げる。ああ、そうか。弁当のことか。
確かに同じ場所にて、作った相手と作ってもらった相手が別々に
食べるのはどこかしら妙な感じもする。けれども、そんなに親しく
して良いのだろうか。

周囲は、突然現れた私の存在に戸惑いを覚えるに違いない。佐藤
君は同性愛者として有名であるとは言ったけれど、もちろん彼の容
姿にだって起因しているのだ。私は恋路を邪魔する人間として、学
校中から非難される可能性を孕んでいる。彼は、そのへんどう考え
てるのだろう。

「……あのさ、聞きたいんだけど」

「！ あかり」

私が思考をめぐらしていると、横に居る友人が声をあげた。横田よこた
あかり。私の数少ない友人のひとりである。ちなみに他校に恋人が
いるからか、黒くまつすぐな長髪で佐藤君の隣に並べばえらく画に
なる彼女はしゅっちゅう告白をされる。恋人がいるのだと断っても
信じてもらえないことだってしばしばだ。

「ちよつと、ちー！」

「ほ？ おう！」

間の抜けた返事をしてしまったためか、拳骨を額にお見舞いされ
悶絶すれば、佐藤君が千絵子さん！と名前を呼んで私の顔をあげさ
せる。

「だ、大丈夫？ 横田さんて噂通りのキャラクターなんだね」

む？

私は良く、人とずれてるなんて言われたりもするけれど、こういうのは敏感なのだ。

気のせいじゃない。佐藤君の言葉、私に向けるものとは違ってどこか険のある空気を出している。言いようも、何か含んだようなものだし、そんなにわかりやすいものじゃないけれどはつきりと敵意が感じられた。

なんでだかはわからんけど。なんで？……いかん、空腹では考えが纏まらん。

「あら、その噂、どんなものかお聞かせ願いたいもんだわね」

そしてこの友人である。あかりは、自分に向けられる敵意やその他の事は私以上に感じやすいだろう。はつきりと、彼の挑戦状を受け取ったようだ。でもだからなんでこのふたり険悪なわけなの。

ねめつけるような顔で腕を組みつつ、あかりは佐藤君を見やる。しかしそんな彼女の強い視線を真っ直ぐ受けているというのに、

佐藤君は春風の如くそれはそれは爽やかに微笑んで見せた。

「だったらお昼をいつしよにとりながらってどう？」

「名案だと思うわ」

につこりと笑んで発した一言に、あかりはやはり微笑んで応えた。ふたりの間に散ってる火花の意味は一体なんなのだろう。首を傾げつつ、ちらと腕時計を見やる。おっと、こうしてはおれん。

「おふたりさん、話が纏まったんなら行こうか。早くしないと昼を喰いっぱぐれるという事態になる。部室で食べよう。佐藤君、そこで良いかな？教室だと色々まずかるうて」

私の言葉に佐藤君が頷くが早い、私は歩を進める。正直、この空腹は耐えたい。とつとこの空白を埋めないことには、私は心が安まらない。

「……あの子、ほんと食事時になると性格変わるわ。私のウインナーまで奪い去ったくらいだし」

「……すごいね」

早足で目的地へと進みだした背後では、2人が半ば呆れたように言葉をこぼしていたらしいが、今の私の耳にはもちろん届いていない。昼食をとるのが最優先事項なのだから。

部室、というのは、実は私達ふたりしか在籍していない所謂、同好会だ。文芸部、ではないので文芸同好会。反対に、漫画研究同好会は人数が多く、漫画研究部として成立している。なんとも面白い話だ。先輩が卒業してしまって2人きりになった部室は少し寂しいが、その分気楽でもある。元々、何の活動もしていなかったから人が増えようと減ろうと関係ない。

冬は少し寒い為、図書室で昼食をとるのだが、夏はこちらで食べる事も多い。同好会なので元々、資料室という名の倉庫だった教室をあてがわれており、恐らくは六畳と少し程度しかない、きちんと調べたら本当はもっとあるのかもしれないが体感的にはそう錯覚する、であるうと予想されるこの場所は、こじんまりとしたソファと机に、ひとつの棚にびっしりと過去に制作された冊子や小説が置かれている。ちなみに電気ポットが完備だ。

私と佐藤君は隣り合って、あかりは向かいのソファにそれぞれ腰かけた。

「……それで？あなた、千絵子に交際申し込んだってホントなわけ」
「ああ、それは知っているんだ」

「昨日呼び出されたとき一緒に居たんだもの。戻ってきたら気になるし理由は訊くでしょう」

「まあ、そうだね。千絵子さんが言っただんだ？」

私をちらり、と見つめる彼の視線に少し驚いて、おかずを一瞬のどに詰まらせた。いかんいかん。お茶を飲んで無理やり流し込む。すぐ隣に座っているから、距離が近い分なんだか過敏に反応してしまう。2人きりで話しているときよりも緊張するのは、あかりの前だからだろう。

「……あかりは友だちだし、まあ。まずかったかな？」

でも、事情を話すつもりはない。あかりには申し訳ないけど、彼女に知られては色々面倒な事もあるだろうし、そもそもこの歪な関係を彼女が認めてくれるとも思えない。私だって、もしもあかりがそんな事に巻き込まれたら止めただろうし、そんなの恋人ではないだけでただならぬ関係の友達と言われてしまっても仕方がないではないか。

そう、昨日、その事実が気が付いて私は打ちひしがれた。就寝前のベッドで、ひとしきり暴れて、やがてため息を吐いた。認める他ないという現実が、妙に残酷だと感じる。

私は、何がしたいんだろう。今更そんなことを思う。そんな醜い行為をしてまで、私は彼に協力して、得るものなんてないのに。自分はこのままで、善人だったろうか。ひよっとして昴君の素敵なあれこれにあてられてのぼせ上がっているだけなのだろうか。そうなるといよいよもってあばずれでしかない。

一度、是と言った以上、拒否するつもりはない。けれど、これで良かったのだろうかという気持ちはやはり拭えない。彼とはすでに、思い出すだけでも恥ずかしいような接吻をしたのだ。あれ以上だつてひよっとしたらするかもしれない、正直想像できない。

いつかは別れる相手。いや、始まってもない相手。こうやって昼に訪れたのは、意外だった。彼は、私と同じような考えだと思ったから。

そんな佐藤君を見つめる。一応、事情は話さないよ、と目で訴えてみた。

正しくそれを受け取ってくれたのかはわからないが、佐藤君はそんな私の視線を受けて、微笑んだ。

「実は、正式に付き合う事になったんだ。最初僕が勘違いしちゃったんだけど、昨日色々と話合った末にそういうことになって」「……そうなの？」

佐藤君が何を考えているかわからないが、怪訝な表情でこちらを見るあかりの視線を受けて、とりあえず私は調子を合わせて頷く。

「あんた、別に佐藤君のファンでもなんでもなかったでしょ。なんでまた」

「ううーん、特に断る理由がなかったから、かね。確かに好きかって言われたらわからないって感覚だけど、昨日一緒に帰ってみて、話して、ああ隣に居るのはそう悪くもないなって思ってた」

私の言葉に佐藤君はしばらく目を丸くしていたけれど、やがて頬を染めて微笑めば、ありがとう、と私に告げた。満面の笑みはきらきらしていて眩しい。ああ、本当に綺麗だ。

そんな私たちの空気を一掃するように、ごほん、とひとつ咳払いをしたあかりは、呆れ顔で私を見たあとに、目を眇めて佐藤君へと向き直った。

「佐藤君。もはや噂でもなんでもなく、あなたが同性愛者って事は公然の事実だったと思ったけれど」

うつん、やっぱりそうくるよね。佐藤君、どうするつもりなんだろう。

多少、好奇心の混じった目で彼をみつめていれば、彼はさらりと衝撃的なことを言っただけだ。

「僕はゲイなんじゃない。バイなんだ」

さすがのあかりも驚いたのだろう。口をあんぐりとあけて、間拔けな声をあげる。

「……はあ？」

「でもどちらかというとゲイ寄りだと思うよ。好きになる人は男性が多かったし。あと女の子は集団で騒ぐ子が多くて同年代はちょっと苦手なんだ。だから何人かに好意を告げられた時、もしかたそういう子があらわれたら申し訳ないと思ってそう言った。僕も予想外だったんだ、同年代、学校で好きな女の子ができるなんて」

言って、微笑みながら私を見つめる彼の瞳はとても甘ったるい。そんな顔で見られると、真実ではないとわかっていてもなんだか気恥ずかしかった。

私は思わず、難色を示そうと声をあげる。

「っあの、佐藤君、ちょっとこのタイミングで見ないでくれないかね」

「そうそう、それ」

なぜか私がやめろ、と言おうとしていたのに、佐藤君のがよほど不機嫌顔でこちらを睨むようにさらに見つめてきた。なんだというのか。

「どうして戻ってるの？ 昂って、そう呼んでって言ったじゃない」
「え、あ、ごめん。あのときはその……なんかよくわからない感じで」

「あのとき？」

私の言葉に間髪入れずにあかりがつっこんできた。しまった、口が滑った。

しかし私が慌てて口ごもる前に、昂君はひょうひょうとあかりの疑問に答えた。

「改めて告白したときだよ。あの時は、顔が真っ赤ですごく可愛かったんだ」

「ちょ、えと、す、昂君」

ふふ、と笑って私の頬を撫でる手は、昨日より少し冷たい。というか、あの時っていつのこと言ってるんだろう。もしかしてむにやむにやした時のことじゃないのか。

考えれば考えるほど、私は混乱してしまう。

きつと、今もあの時と同じくらい顔が赤いんだろう。彼の言っているあの時と、私の思うあの時が合っていればこそそのたとえばであるが。

「……ふうん。ま、どこまでが本当かどうかはわからないけど、佐藤君が千絵子を好きだっていう点だけはどうやら本当みたいね」

あかりの言葉に、昂君は当然だよ、と言って微笑む。私は、少し胸の奥が痛んだ。友人を騙してしまった。それに、平然と言っているにはいるけれど、昂君だって好きな人に対する裏切り行為を今宣言してしまったようなものなのに。

私が悶々とそんなことを考えていると、それで、と昴君が真剣な表情で口を開いた。

「実は、お願いがあるんだけど。僕らのこと、口外しないでもらえるか？」

「まあ、そのほうがいいでしょうね」

ため息を吐いたあかりは、一言ですべてを把握したらしい。まあ、それはそうなんだよね。

今は学校全体が昴君と幼なじみ、名前はそういえばなんだったろうか、を応援している雰囲気だし、そこにきてぼつと出の私が彼女になりました、なんて。色々な人間を敵にまわしそうだ。それに。

昴君は正直、とても女性に好意を寄せられる機会が多い人間だ。端的に言えばモテる男の子。これだけ可愛い容姿と人柄ならばそうなるのもうなずける。であるからこそ、彼が今、女性とも関係を持てると表明してしまえば、外野はますます騒がしくなるだろう。私達のことは表立って言わないのが無難である。そもそもが、偽りの恋人なのだし、必要性を感じない。

「……でもいいの？佐藤君。この子、別に箸にも棒にもかからないような子じゃないわよ」

「それはもちろん、わかっているよ。だから、大々的に僕らと仲良くなってもらおうかと思ってね」

「僕ら？どういう意味？」

「僕と奏^{かなで}。それぞれ同時に接触してもらえれば反発もそう起きない」

ふたりの話がいよいよ見えなくなってきたところに、昴君はこちらを振り返って微笑む。

「千絵子さんは知ってるかな？ 僕の幼なじみ、奏たかって言うんだ。高柳奏やなぎ。そいつと僕と四人で仲良くなれば、そうそう怪しまれない」

「……え、でも」

「大丈夫。理由はもう用意されてるよ。ねえ、横田さん？」

ますます微笑みを強くする昴君を私は心配になってみつめる。そういう意味じゃないよ、わかってるでしょう！ でも、昴君は何も言わないし、この状況じゃ言えない。

そのときだ。

昴君が、私の手をきゅ、と握った。私は、驚いて一瞬反応してしまったけれど、昴君の顔はあかりに向かっていたので、あかりは気付いていない。

私はなんとなく、その手を握り返す。すると昴君も、今までよりも強い力で私の手を握ってくれた。

忘れていた先程の彼の言葉を反芻して、私はあかりに顔を向ける。目の前の友人は、なんだか悔しそうに唇を噛んでいた。

「……あかり、どうしたの？」

「……少し前に話したでしょう、私の兄が結婚するって」

その言葉に、私はああ、と頷く。あかりは、けっこう自他共に認めるブラコンで、結婚話が決まった時多少荒れた。けれど、相手の女性がとても良い人らしく、最近は晴れ晴れとした様子で敗北宣言をしていたものであったが、それがどうしたというのだろうか。

「実はね、奏のお姉さんも、近々結婚するんだ」

「へー、それはまためでたい。……っておいおい、まさか」

その言葉の意味をわからない私ではない。今は満腹だしな！

「そのまさかよ。……まさか、高柳君があなたの幼なじみだったなんて」

「元々、学校でも話しかけようとしていたみたいだし、接触してるのは時間の問題だったと思うよ」

憂鬱そうなあかりに、昴君が楽しそうに微笑む。どうしてあかりは、こんなに嫌そうな顔をしているのだろう。

「なんか苦手なのよあの人。妙に明るいしなれないし。他人との距離感を正しく取れない人間はどうにも疲れて」

「でも口実が出来れば、僕は他への牽制ができるから正直ありがたい」

「……私にメリットは何もないんだけど」

「僕は、強硬手段に出る事だっと思って考えてる。確かに、女子がどんな反応を起こすかは予想の範疇をそれこそ超えてしまいかもしれないけど、千絵子が無防備にしておくよりはずっといい」

千絵子って、ま、また名前呼ばれた。

どきりとして、繋いだままだった手を離そうとすれば、昴君はそれを許してくれない。

ただ握っていただけの手が、一本いっぼんの指を使って絡みとられる。指と指を交差して私達の手は先程よりも深く繋がると、昴君は指の腹をつかって私の手をゆっくりと撫でてくる。なんだかいやらしい手つきに、私は声をあげそうになった。

というかなんなのだろう。この手つきは。すごく抗議したい。

混乱に陥れられた私は、この時2人の会話の意味を全く考えられなくなり、話自体もあまりきちんと聞いていられなかった。終始小刻みに動く彼の手が、どうにも気になってしまっただけ。

あかりが鋭い瞳で昴君を睨みつけていた事も、それを受けて昴君が微笑んでいた事も、やはり全く気付いていなかった。

「……脅すつもり？」

「穏便に済ませたいだけなんだよ。僕だって、彼女を守りたい。傷付いてほしくはない。けれどそれ以上に嫌なんだ、他の男が千絵子を見るのが」

「まさか、そんなに独占欲が強い男だなんて思わなかったわ」

「どうしても、だめかな」

「……はー。わかった、わかったわよ。どっちみち、これから親戚付き合いもしなくちゃいけないだろうし、まあ、今から交流を深めて苦手意識をなくす努力をするのも悪くないわ」

「よかった」

にっこりと微笑んだ昴君の手が、やっと私から離れた頃には、2人の会話は終わっていた。

「……って千絵子。顔真っ赤よ、大丈夫？」

「へいっ!？」

あかりの指摘にいつぱいいっぱいになった私は、ますます顔を真っ赤に染め上げてしまったらしい。覗き込んだ昴君が可愛い、と微笑むその顔に、ついに昴君のが綺麗だよ、と声に出して言ってしまったのは醜態以外のなにものでもなかった。

第5話

「まさか、あかりのお兄さんと昴君の幼なじみ……奏君だっけ？のお姉さんが結婚するなんてまだずいぶんとすごい偶然があるものなんだねえ」

「そうだね」

ほへえ、と妙な声を上げつつ話す私に相槌を打った昴君は、食べている間ずっと誉めてくれていたお弁当を食べ終え、ペットボトルのお茶を一口飲んでいる。ちなみに私は家から持ってきたものを持参している。どうせ弁当用意するから、飲み物も一緒に用意するのはそれほど手間じゃないのだ。

あかりは何を思ったか、居心地が微妙だから先に戻るわ、と言って少し前に教室へ戻ってしまったので、今はふたりきりである。なんでだろう、さっきまでの変な緊迫感がなくなって、だはー、と長い息を吐き出してしまふ。

「ずいぶん緊張してたみたい？」

「わかった？」

あはは、と苦笑を漏らして再度短く息を吐き、私は話を続けた。

「あかりは鋭い人間だから……彼女に嘘吐くってえらい緊張するんだよねえ。まあ、罪悪感とは別としてさ」

「そうだね」

私の言葉に昴君も首肯する。

「きつと横田さんは、ほとんど信じていないんじゃないかな」

彼の予想か確信かわからないその口ぶりに、しかし私は完全にそうだろうな、と考えていた。きつと、あかりは何もかも信じていないのだろう。けれど何も指摘しないでいてくれたのは、彼女が私を信用してくれているからだ。心配していないわけでは決してないのだろうに、最後の判断を私に任せて、見守る役に徹すると、きつと無言で約束してくれたのだ。

友人の気遣いに少し心が温かくなると同時に、先程口にした罪悪感からか、ちくりと胸が痛んだ。

私がしばらく無言でいると、昴君も黙って正面を向いていたが、やがて私の方へと振り返れば眉尻をきゅ、と下げて、なんとも情けない表情になった。どうしたのだろう。

「……ごめんね」

「？ 昴君」

「僕の嘘に付き合わせちゃった」

その言葉に私は目を丸くして固まる。

いいよ、と言って笑ってしまえば済んだけれど、私はそうできなかった。だって私は、全然いいよ、と思えていないのだ。そこを曲げて口に出すのは、馬鹿正直かと言われればそうだけれど出来ずに、結局無言で微笑むだけになってしまった。

決めたのは私で、けれども何がしたいのかわからないという感情はやはり同じで。

やっぱりやめる、と言うのは簡単なのだけれど、昴君の内情を思えば、どうにもそれは言えなかった。

もしも自分ならば、と。やはり考えてしまう。

私ならば、あかりに恋心を抱いてしまうようなものなのだろう。

私はそんな感情抱いたことないからわからない。けれどそうだった

ら、きつと考えても答えは出せずに、いくら大好きな糖分を摂取したところで、私の思考はそれ以上すすまないのだろう。

想い人に、自身の心を否定されるのは、一体どれ程の苦痛だろうか。

君は今、傷付いているのかい？なんて、訊けるはずもない。けれど、想像してしまうんだ。ない頭で、考えてしまう。そうになると、私は息が苦しくなって、彼をそこから解放できるのならば、協力したいと願ってしまったのだ。

綺麗なその顔が、歪み病んでいくのを、どうしたって見たくなかった。

私のその表情を見て、何を思ったのか、昴君は苦しそうに顔を歪ませた。あれれ、いちばん見たくないとか思っちゃった表情さめちゃった、なんでだろう。

私は疑問符を浮かべた顔でじつと彼を見つめ返していれば、やがて昴君の右手が私に近付いてきた。

長くもなく、短くもない。はつきりと黒でもなく、茶でもない。真っ直ぐというほどでもないけれどくせっ毛まではいかない、何もかも中途半端な私の髪。

彼の手が、さらに、と私のそれに触れると、少しだけ隠していた私の顔をもっとはつきり見る為なのか、少しだけ取って私の耳にかける。

手が耳に触れた瞬間、くすぐったさに私は肩をほんの少しだけ揺らした。

「……もしも」

「え？」

「もしも、本当に僕が、千絵子さんを好きだって言ったら、どうする？」

「どうって」

「あの時、僕の噂を知らなくて、ただ純粹に告白をされていたら、

どうしてた？」

いちばん最初に、告白されたとき？

じっと見つめる彼の視線がなんともいえなくて視線をさまよわせつつも、私はなんとか口を開く。

「……断ってた、と、思うけど」

だって、理由がない。

もしも昴君が本当に私を好きだと言ってくれるならば、私も同じ気持ちを持っていない限り応えてはいけない。人として、それは守らなければならぬことだと、思う。

その答えに、昴君は苦笑して、ため息を吐く。なぜ、そんな悲しそうに笑うんだい。わかんないよ、昴君。

気付けば眉間に皺を寄せて考え込んでいた私は、持参していた紅茶を一口飲み込めば、ちなみにこだわりが特にないのでなんの種類かはわからないがでかど缶に紅茶と書いていたパックになったものを購入している、なんとなく頭の中が冴えた気がした。少量だが甘味も入っている。

「……でも」

「！ 千絵子さん」

静かにつぶやくように声をあげた私を、まじまじとみつめてくる昴君の顔を、私もじっと見つめ返した。

「……今だったら、どうかな」

「え」

「断っていたかもしれないけれど……でも、そのあとたとえば、私の存在を抹消されてしまったら、悲しいと思う」

「……………」

「廊下ですれ違っても、挨拶どころか目も合わせてくれなくなつて、気が付いたら小さく手を振ってくれたりとか。名前呼んでくれたりとか。そんなのが、なんもなくなつたら、いやかなあ」

「千絵子さん」

「あれなんかもう友だち気取り？やだねえ、こんな図々しい奴じゃないはずんだけど。ごめんよう、なんかきもち悪いねははは」

「千絵子」

あれ？

言葉を遮られたと思つたら、なんか気付いたら。
抱きしめられてます？

「……昂君？」

「なんなのもう……超かわいい」

「え？いやあの、す」

名前を呼ぼうとしたら、頬に唇が触れた。それに驚いて言葉を切れば、次に降りてきたのは唇へのキスだった。

キス、ではない。

でした。これは、接吻です。

息が苦しい。どうしたらいいのかわからない。じたばたしていると、昂君が唇を離して微笑んだ。

「鼻で呼吸すればいいんだよ」

くすぐすと微笑みながらそう耳元で囁く。ちよつと、くすぐったいですが！

というか多分そうだろうなとわかってるし苦しいからいくらかそうしてるんだけど足りないんだよ結局！口を塞がれるってこれほど

苦しいのだね！

「それより、あの、なんで？」

「？　なんでって」

息が整って、普通に喋れるようになった私の質問に、昂君はわからない、といった風情でこてん、と首を傾げる。やめてください、可愛いです。

「だって、どうしてキスしたの？　必要ないんじゃないの？　だってキスはもう大丈夫そうってわかった、ん、でしょ？」

「……千絵子」

「へっ」

私の言葉がお気に召さないのか。わからないけれどやれやれ、といった感じでため息を吐きつつ首を振る昂君。なんなのですか、一体。

「僕は言ったでしょう。名実共に恋人のような行為がしたいって」

「……言った、けど」

「それはただ身体を触れ合わせるって意味じゃないよ！　かわいいって言ってるのだって本心だし、抱きしめたいって思った時じゃないよ、僕はそういう行動に出ないよ」

ええー？　それって……　なんか、よくわからない。普通の恋人とそれだとどう違うのか？

私が混乱しているのがわかったのだろう。苦笑して私の頭をゆっくりと撫でる昂君は、とても優しく微笑んでいた。

ああ、また。

彼のこういった表情のひとつで、世界は止まる。時間が流れなく

なる。

「ねえ、別れるって前提で考えるのやめない？」

そんな中、彼の発した言葉の意味を理解するのに多少時間がかかってしまった。

数秒遅れて反応すれば、狼狽して一歩ずり、と後退する。

しかし、そんな私の腕を、彼がしっかりと握った。ますます狼狽した私は、ふるふると数回首を振る。

「だって、でも」

「お願い、千絵子さん。僕と恋愛の練習しよう。女の子とちゃんと付き合った事って、今までないんだ。だから、最初の相手は千絵子さんがいい」

「だから、練習なんでしょう？」

「ゴールは、別れじゃないよ。いいじゃないか、たとえばこのまま付き合っても。どちらかが他の人間を好きになりでもしたら話は別だけ。僕は、いいかげん実らない恋にも疲れたんだ。卑怯だって言われてもかまわない。忘れさせて、千絵子さん」

「昴君」

「千絵子さんの存在で、僕の奏への気持ち全部忘れさせてよ」

なんだそれ。

ええと。ええと？

「ちょっと自動販売機」

「別にココアとか買いに行かなくてもいいでしょ」

彼の言葉に、ぴくり、と反応する。立ち上がりかけた私の肩をつかんで留まらせるとは。こやつ。

「なぜわかったのかね」

「糖分、でしょ。いいじゃない難しく考えなくたって。僕らは確かに飯の恋人かもしれないけど、いつか飯の部分がなくなる可能性だってあるわけでしょ？」

「……昴君は、私のこと好きじゃないでしょうに」

「少しでも好意がなきゃ、一緒になんていたくないよ」

「ふーむ……」

眉間に皺を寄せつつ考え込む私に、にやり、と笑ってみせた彼の顔は、今までにない表情だった。

私の身体を引き寄せると、何を思ったのか私と共にどさ、とソファに倒れこむ。

所謂、押し倒されている状態になった。

「きっと、他の女の子だったら触れられないのかもしれない」

「え？え、いやいやちよつと！」

言われた意味を把握する前に、昴君の手が私の身体をまさぐるうとする。

「昴君、ちよつと、やめて！」

「やだ」

その言葉に衝撃を覚えて目を見開く。昴君をうかがえば、真剣なその瞳と真正面から向き合ってしまったて、私はどんどん怖くなってしまう。

今は、彼の手が私の腕を力強くおさえこんでいた。

「おねがい、やめて」

かすれたような声で呟いて、もう一度彼をみつめる。すると、昂君の瞳が揺らいだ。

……なんなのさ。その哀しそうな顔は、なんでなのさ。

「……じゃあ、お願い。約束しょ？」

「……………やく、そく」

「さっきの話。僕たちは、お互いに外に好きな人が出来ない限り、恋人同士」

「でも」

「僕は、千絵子を道具として扱いたいんじゃないんだ。こんな風に、押さえ込んで、こんな行為だけを繰り返されるのなんて、嫌でしょう？」

昂君は、言つて、纏め上げた私の腕を解放すれば、ひとつ息を吐き出した。わからないけれど、どこもなく自分自身に呆れているかのようなため息だ。

先程の乱暴な行為とは打って変わって、昂君は壊れ物に触るかのようにつつくりと私の身体に触れた。それでも、さっきの記憶が残っているからか、私はついついびくり、と震えてしまう。

「……………ごめん、怖かったよね。ごめん」

「ごめんね、と謝罪の言葉を繰り返されながら、彼がゆっくりと私の頭を撫でる。掴まれていた手首が少し赤くなっているのを確認すると、昂君は私の手を取って赤くなった箇所を唇を寄せた。

触れるだけのそれは何度も施され、その優しい行為にますます涙が出てくる。

「昂君、私は、なんか、駄目だった？」

私の涙混じりの声に、昴君は静かに首を振ると、起きれる？と言
って私の背中に腕を回すと、ゆっくりとソファに座らせてくれた。
押し倒された相手に起こされるとはこれいかに。

涙がたまった情けない顔の私に困った顔を向けながら、昴君は私
の瞋に口付けた。なんですかね、今日は皮膚接触が多いですね。

「泣かないで」

「泣かせないで」

反射で返した私の言葉に目を見開けば、昴君はごもつとも、と咳
いて頂垂れた。その様子に多少は溜飲が下がる思いがすれば、私は
小さく微笑む。

その表情に、昴君がやつと安心したかのように微笑を返した。

「泣かせたかったわけじゃないんだよ。ただね、さっきも言ったけ
れど、僕は千絵子さんを道具にしたいわけじゃないんだ」

「私は別に道具じゃないよ」

「でも、僕となるべく学校で関わらないようにしようって思ってた
でしょう」

え。

「それだけじゃない。こうやって他愛もない話をしたり、お昼を食
べたり放課後の時間や休日の時間を一緒に過ごそうとか、そういう
ことだっする必要がないって思っていたんじゃない？」

え。え。

ちよつとまで、なぜ知っている。

「わかるよ、反応見てればそのくらい。今日、教室に来たときだって心底不思議そうな顔してたし、横田さんの前であまり一緒にいるところ見られたくないんだなって思ったもの」

「……そうだけれどもさ。そのほうが色々都合が良いんじゃないのかい」

「だから。最初、確かに僕はいつか別れるって言ったよ、それはごめん。でもね、僕も、終わりを想定して関係を築こうと思ったら、やっぱり寂しいって思うんだ。千絵子さんがそう思ってくれたように。だから、仮とかそうじゃないとか、あまり考えすぎるのやめようって思ったんだ」

「昴君」

ぽかん、と間抜けな顔で見つめる私に微笑んで、昴君はふわりと笑めば、一瞬だけ触れる程度のキスを、私の唇に落とした。

な、ふいうちは、恥ずかしい！

真っ赤になった私の顔に、微笑んで彼が可愛い、と告げる。だからそれも恥ずかしいのだが。

「僕たちは、まだ恋人って堂々と言えない関係だと確かに思う。でも、いつか終わるんじゃない、ここから始まるって考えられないかな」

「……はじまる、ですか」

「うん。やっている行為は本当の恋人となんら変わらないんだし。行為に気持ちを追いつくように、これからゆつくりと、お互いを知っていかない？」

「昴君は、それでいいの？」

「もちろん。良くなかったらこんなこと言わないよ。千絵子さんは？」

気持ちが追いつくまで、仮の恋人。なんだかとてもややこしい話

だ。

「ちょっと」

「自販機はいいから」

ちつ。なぜわかる。

私はひとつ息を吐き出せば、覚悟するかのように、頷いた。

「わかった。そっちのほうが、ずっと健康的だもんね。うむ、どんとこーい」

「……最後の宣言がよくわかんないけど」

ふふ、と笑って、昴君は右手を差し出した。

「これから改めて、よろしく願いします、千絵子」

「！ よ、ろしく。す、昴」

私はされた行為を真似しただけなのに、呼び捨てにされた昴君は、目を見開いてなぜか頬を染め上げた。

第6話

「なにかな」

「えっ」

「訊きたいことあるんでしょう？僕に」

「あー、ごめん。あからさまに態度出てたかい？うん、あるんだけど訊いたらいいのかわからない」

並んで歩いてる時に何度もちらちら視線送ってたらそうなりますよね。わかりやすすぎますよね。ええ、ごめんなさい。

ひとつため息を吐いて、私は昴君にもう一度うかがうような視線を超越す。それを受けて、昴君は首を傾げて更に優しい笑みを増すばかりだ。訊いていいよ、って合図なのはわかるのだけれど、非常に訊き辛かったのだ。

それでも、好奇心に負けてしまい、私はためらいつつも口を開いてしまった。

「あーの、ね。奏君って、どんな人なのかなあ、と」

「ああ、なんだ。そんなこと訊き辛そうにしてたの？」

からからと気持ちよく笑う昴君は、お昼に見せた少し艶のある顔とはまた違う。けれどひとつひとつの表情に魅了されているかのように、私は新しいそれらをのぞけるたびに同じように綺麗であると心の中で呟いてしまえばかりだ。

けれど、そこまで笑わなくとも。そもそもなぜ訊き辛いかだなんて、わかっておるうに。

だってさあ、と口ごもりつつ言う私の頭を、昴君は撫でる。いや、嫌ではないのだけれど、そんな頻繁に頭撫でなくなっただけいいんですよ？

「別に、あいつのこと訊かれたって落ち込まないよ。そもそも明日には会う事になると思うよ?」

「ああそっか。そうだね。……ねえ」

「うん?」

「あんちゃん、本当に大丈夫なのかい」

あんちゃんてなに、と噴出しながら言った昴君は、一頻り笑ったあと、真顔になる。

「僕が落ち込んだら、悲しい?」

「? 当たり前でしょうよ」

そんな今更な質問の意味がわからん、と眉根を寄せつつ言えば、昴君は満面の笑みで私の腕を掴むと、早足で歩き始める。なんだい急に。見たい番組でもあるのかい。

首を傾げつつ私が昴君?と名を呼べば、昴君は一度止まって、ぐるん、と少し後ろを歩く私へと振り返った。

「落ち込んだら、なぐさめてくれる?」

「……はあ、まあ」

「じゃあまたキスさせて」

「はい?」

「僕の家でも良いし、千絵子さんの家でも良いよ。なんならその他の場所でも」

「何の話を」

ぐい、と腕を引っ張られれば、気付けば私は彼の腕の中。これでもかというくらい目を見開く私の耳元で、昴君は囁く。

「千絵子に、いっぱい触れさせて」

「！　ちよ、おい」

「早く帰ろう」

拒否したかったけれど、なんだかんだ押しきられた私はあばずれなのか。ああもう、考えるといちいち落ち込むから嫌だ。

次の日の、まさか朝に向こうから接触があるとは思わずに、いつものようにぼんやりと教室で席に着いていた私は、視界に昴君の存在が飛び込んできて驚いた。驚いた結果。

昨夜の破廉恥なあれこれを思い起こしてしまったわけである。

顔赤くないだろうか。にっこりと微笑んで手を振る昴君に、私も手を振るけれど、顔は無表情に留まってしまった。

「おはよう、あかりちゃん！」

声を大きく張り上げ腕が千切れんばかりに振り上げれば、満面の笑みでこちらへ駆け寄ってくる。呼ばれた当の本人はうんざりした顔をしているけれど観念しているのか、逃走するつもりはないらしかった。

高柳奏。賑々しい彼こそが、昴君の幼なじみにして、彼の想い人そしてあかりと縁戚になる人だ。

ちら、ともう一度私の前に座るあかりを見たけれど、呆れた顔でため息を吐いているが、おや。思ったほど嫌でもなさそうだ。

あかりは、本当に嫌いな人間にはここまで露骨にこっちくんな、っていう雰囲気を出したりしないのだ。きっと、距離をはかっている最中なのだろうな。

「千絵子さん、おはよう」

「おはよう昴君」

今度こそ微笑んで私は告げる。まだ少し早い時間帯だから人はまばらだ。私たちの隣にあたる席のクラスメイトもまだ登校していない。

昴君は繊細な動作で、奏君はなんとも豪快な立ち居振る舞いをしつつそれぞれが席に着いた。

「えっと、はじめまして！あかりちゃんのお友達の、千絵子ちゃん」
「あ、こちらこそ初めまして。ええと、奏君」

奏君は私の名を呼んで頭を下げたので、私もそれにならってお辞儀をする。日本人の礼儀だ。

しかし無防備な姿を晒していた奏君になんたる仕打ちなのか。何を思ったのか昴君は想い人の頭を思い切り叩いたのだ。何か道具を使っ叩いたわけでもないのに、とても耳に心地よい音がした。叩かれた奏君は、とても痛そうではあるけれども。

目を丸くして彼らの行く末を見守っていたけれど、昴君は不機嫌な顔を彼に向けている。なんだ、どうした。

「奏は野田さんって呼びなさい」

「えー？そんな他人行儀なの嫌じゃん、千絵子ちゃんて名前かわいいし。あ、じゃあちーちゃんて」

「馬鹿なの？そんなのもつと駄目に決まってるじゃない」

なんだか険悪な雰囲気慌ててしまい、私は2人の会話に割って入る。

「別にかまわんよ？ちーちゃんでもなんでも。私は奏君て呼ばせてもらって良いかね？」

「！千絵子さんっ」

「おーむしろ呼んで呼んで！俺、下で呼ばれるほうがいいから、あ

だっ」

「お前調子乗んじゃねえぞ……」

ゆらり、と彼の後ろに漂う何かが揺れた気がする。というか、あれれ？

「す、昂君？」

なんだか随分とくだけた物言い……というか、好きな人にそんな感じでいいのですか？多少驚いてまじまじと彼を見つめっていると、昂君はにっこりと微笑んだ。

「千絵子さん、千絵子さんも奏の事は下の名前で呼ばないようにしてね」

「……なんでだね？」

「なんででも」

言い切りに、胸の奥が少し痛んだ。

そうか、そうだよな。好きな人が、他の子に名前呼ばれるの嫌だし、その逆だって、嫌だよな。私としたことが。そのへんの気遣いをすっかり失念していたようだ。

私は、小さくわかった、と返答する。

でも、でもだな。

なんだか、理不尽さを感じたりはしないかい。

言ったじゃないか。忘れたい、と。忘れさせてくれ、と。だと言うならば、こんな些細な事で嫉妬してどうする。彼を独占しようとするばするほど、あなたはより苦しくなるのではないのか。

自分に生まれた今の感情に、名前を付けられるほど私は人間として豊かではなかったけれど、それでも、そのまま従うにはいささか荒れた心は、小さな反抗心を鈍いふりして隠してみせた。

微笑んで、私は口を開く。

「じゃあ、私はやなぎんと呼ばせてもらおうかね」

「ああ、なるほど！じゃあ俺は野田っちで！」

「おお、かまわないともさ」

「じゃあ改めてよろしく、野田っち」

「こちらこそよろしくね、やなぎん」

にこにこ微笑み合って、握手を交わす。さあ、これで我々の自己紹介は終わりだ。

それで、と更に話を続けようとした、が。

どうしたのか。ものすごい不機嫌オーラをその身に纏いつつ、ゆっくりと昴君が席を立った。まあ、当然か。わざわざ苗字で呼べと言ったのに、親しさを強調するかのようにあだ名を付け合ったのだ。彼を独占したい心が強ければ強いほど、私にたいして苛立つのは無理からぬことである。

据わった目と低い声。

呆れたことに、私は表面的にも心の中でもそんな彼に怯えていたのに、初めての表情に、またしても綺麗だ、と無意識下で私の内に過ぎった。

「……部室の鍵、どっちかが持っていたりする？」

響いた声に、どんな意味で心拍数を上げているのか、混乱してわからなくなってくる。

千絵子さん、と名前を呼ばれて、私は馬鹿正直に持っている、と返答してしまった。無言で私の鞆を持ち上げ、更に私の腕を昴君は掴む。

心配顔のあかりと目が合って、私はとっさにへらり、と笑んだ。あかりは少し表情を和らげてくれたけれど、それでもまだ不安そう

だった。

「というか、ふたりきりで話をさせてしまうことになるけれど、それはいいんだろうか。」

私はぐいぐいと引つ張られる力強さに、その乱暴さにどこか芯が冷える思いがした。部室の前に着いても、黙って従う事もしたくなくて、足が止まった時点で思い切りその腕を振り払った。

昂君は一瞬その行動に面食らっていたけれど、すぐに鋭い視線を取り戻せば、鍵は、と短く呟く。

「……持つてない」

「さつき持つてるって言ったでしょ」

「ふたりきりになって、何するの？」

私の言葉に先程よりも苛立ちが増したのか、無断で私の鞆を開くと、ごそごそと漁りだした。行動に驚いて抗議しようとする、昂君の手にはもうすでに鍵があった。

くそ。たいがいああいうのって外側のポケットか中の小さいポケットに入れてあるからな。すぐわかってしまったか。

私は焦って走り去ろうとしたけれど、やはり彼のが早い。腕を掴まれた状態で開錠され、そのままずると部室へ引きずられてしまった。

かちん、と施錠される音がやけに部屋全体に響く。授業とか、そういうことは当然ながら目の前の男は考えていないのだろうな。

「……何そんなに怒ってるのかわからない」

私の言葉に、昂君は眉を顰める。半ば無理やり座らされたソファのぎりぎり端っこまで寄ったって、昂君がこちらに近付いてきたら意味はない。わかっていたけれど、本能的にそうしてしまった。

「どうして、奏とそんな親しくなりたいの？」

「別に、そういうわけでは」

「僕の事は、最初は他人行儀に呼んでたし、口調だってしばらく素で話してなかった」

「だって昴君の好きな人だったら、その、信用できる人だから」

「それだけ？」

ぐい、と両腕を引つ張られて昴君のほうへと倒れ込む。この学校は一般的な公立高校だが、男子のブレザーにはネクタイがあり、一応は着用が義務付けられている。ほとんどの生徒はしてきていないが。かつちりと制服を着るのは、一部の優等生だ。公立はそうそう校則も厳しくないのも、教師もそこまでうるさくない。

そう、だから、ネクタイを着けるような生徒は、表向きだけかもしれない。なくとも、優等生、なのである。

「あの、昴君？」

私は、どうして掴まれた右腕にネクタイをひっかけられているのですか。ひょっとして、拘束されている？

固まっている間に、昴君は何故か私の右手首と彼の左手首をぐるぐると巻きつけて縛り上げてしまった。どういうことだ、これ。混乱して彼を見ると、びっくりするくらいの無表情がそこにある。

「す、すすす」

「もう一度訊くよ？どうして、奏と親しくなりたいの」

「え？べ、べつに」

「好きなのか、あいつのこと」

睨むように、挑むように言われた言葉の意味を考えるには、時間がまるで足りなかった。

固まった無言になった私を見て、それが肯定の意を示していると思っただろう。ますます険のある空気を醸しながら、昴君の右手が私の膝小僧をつつ、となぞった。

びくり、と震えた身体がひどく汚いもの思えて、全て投げ捨ててしまえばいいと思った。けれど彼はやわやわと触るその手をどかしてはくれない。

「あっ……!!」

ついに小さくだけれど声をあげてしまった私を、昴君は軽蔑するかのよう笑う。

「僕に触られて、感じてるの？」

「おねが、やめ、て……」

「声、色っぽくなってきてる」

「やあっ!!」

ふいに、耳になにかが触れる。

昴君の舌だとわかったのは、そろり、と耳朵をなぞられた時だった。

特に恥ずかしい場所ではないはずなのに、今まで誰かに触れられたことのない部分を、男の人に舐められている。その事実が信じられなくて、私は必死で首を竦めた。

「やあ、おねが、やめてえっ!!」

「快樂でもなんでもいい。僕から離れられない身体になっちゃえばいいんだ」

「……っな、んで」

「まだそんなこと言うの？僕よりも奏がいいのに、こんなに反応して」

その言葉に、私の中で何かが爆発した。

「高柳君に、こんなことされたいわけないじゃん！」

「！……………千絵子」

「す……ばる、く……が、いや、なんでしょお……？」

嗚咽混じりでなかなか言葉にならないけれど、それでも私の声に反応して、昴君は次に進もうとしちた行為をぴたり、と止めた。

私は、無言で私を見下ろす彼の顔も見れないくらい、ぼろぼろと涙を零し続けていた。

「昴君は、高柳君が、私に近付くのが、嫌、なん、でしょ」

「……………ああ」

「たか、やな、く、が、昴君より、私と仲良くするのが、や、だ、から」

「……………はっ？」

次に発したことが予想外だったのか、昴君は妙に間抜けな声を上げて、私の頬を拘束されていない右手で包み込む。

「ちょっとまった、千絵子。おまえアレの事が好きなんじゃないのか」

「あれって、どれえ……」

「奏だよ！高柳君！」

「好きでも嫌いでも、ないよおおお……」

「はあ！？じゃあなんで」

「だって、やなぎんと、仲良くするの嫌がって、そんなに、やなぎ

んのこと、大切なのかって、思うじゃんよう……つく……」

私の言葉に、しばらくぼかん、と口を開けて固まっていた昴君は、やがて我に返ったのか、私を拘束していたネクタイを外すと、短く息を吐き出した。

「……てつきり奏に一目惚れでもしたのかと思った」

「なんでそうなるのさ！意味わからないよ！」

「そっちの思考こそ意味わかんないよ！なんで今更、千絵子さんをあいつから遠ざけたいの？あいつは同性愛者じゃない。僕には可能性なんて方にひとつもないんだ！」

じゃあ、どうして？どうして私の事を怒ったの。こんな事したの。口には出さずに、けれど空気ですれを感じ取ったのだろう。昴君は私を見下ろしながらぼつりと呟いた。

「僕が嫌だったのは、千絵子に奏をとられることじゃなくて、奏に千絵子をとられることだったんだよ」

「……………はあ？」

ちよっと、自動販売機に行ってきたでもいいでしょうか。

第7話

「僕にとって、千絵子さんの存在はもうけっこう大きくなって」

「……奏君が、好きなんでしょう？」

「そればかり。今の僕は、千絵子さんの恋人なんだよ？」

「そう、かもしれないけど」

「だから、奏と千絵子さんはそもそも大切な種類が違うの」

「だけど昴君にとっての奏君は」

それ以上、言葉を重ねる私に苛立ったのか、昴君は一瞬眉を顰め、次には私の唇を彼のそれでふさいでしまった。

ま、またも接吻です。苦しい。

けれどもなぜなのか。今まで感じた事のなかった、どこかの何かが揺さぶられているような。

唇が重なった瞬間、沸いた感情は、なんなのだろう。

『歡喜』

浮かんだ言葉に、しかし何故なのか、と首を傾げなくなったが、今の私はいにく後頭部を彼の左手によってつかまれ、頬には彼の右手が寄せられている。重なる唇の間からこぼれる吐息や水音が、沸く感情をより強く認識して、ついにわけがわからなくなった。

好きなのか、私のことが、少しでも。

私は、どうなのだ。彼のことが、好きなのか。恋慕する、想いがあるのか。

少しでも。

苛烈ともいえるその行為がやっと終わると、私は肩で息をする。どうやら、先程の表現は間違っていない。どこかしら残虐な気持ちがあったに違いない。苦しがる私を見て、昴君が見たことのない

種類の笑みを浮かべている。

悪の親玉って、こんな顔をよくしているよな。じゃあ私は、ピンチになったヒーローだろうか。あいにく、地球を守る器を持ち合わせてはいないが。

「まったく、変な所で普通の女の子っぱいんだから」

息切れしてまだうまく喋れない私は、問うように視線でその意味を訊ねる。昴君の言葉は、時々てんでわからない。難解なパズルを解かなきゃいけないときみたいだ。

昴君は私の表情を見て、ふ、と微笑むと、頭のとっぺんから髪の毛までをゆっくりと撫でる。その手つきは、ひどく心地よい。

「今はまだ、気付かなくていい。だけど覚えておいて。僕は、君が大切だ。失いたくない。たとえ、奏を失ったとしてもね」

たとえかなでをうしなっただとしても？

反芻して、咀嚼してみる。しかしそんなことをしても、理解できるはずがない。

私が口を開き声を発しても、それを邪魔するものはない。気付けば私の呼吸は落ち着いていたらしい。

「……………なぜ」

「はいはい、質問ばかりしないの。あとは宿題！自力で答えが出せる時がきたら、ちゃんと聞いてあげる」

すんなりと出た言葉も、しかし昴君はそれにたいして何も答えてはくれなくて。

悶々とした気分が残ったけれど、言われた真の意味はわからずとも、単純に考えたってすぐだった。

大切。今現在の想い人であるはずの、奏君よりも、私のことが、それが、どんな意味でなのかはわからない。それでも、その言葉が、私には嬉しかった。

「……お帰り。一時間目見事に終わったわよ」

「うん、わかってる。ただいま」

「手に持ってるそれ、ココア？」

「糖分」

四角い紙パックに刺さるストローから、茶色い液体をずず、と吸いつつ答える。

昴君とは、教室の手前でわかれた。手を振って、一応は笑顔で、私も戻る。内心は色々複雑であるが。

自動販売機でココアを買った時は笑われた。なんでそう笑うんだ。上戸か、上戸なのか？

席に着いた私にありが言ったように、一時間目をまるまるさばってしまった。教師にそれを指摘されると面倒だな、と思っていたが、あかりが適当に誤魔化しておいてくれたらしい。気分が悪くトイレに行ったが、ひよっとしたら保健室に向かったかもしれない、と。

少し苦しいといえばそうだが、担任はそこまでつつこんでくる性格でもないので大丈夫だろう。目の前の彼女に礼を言つと、あかりは目を眇めてぽつりと呟いた。

「……あんた、そのうち痛い目に遭っても知らないわよ」

言われた意味を、私は必死で考えた。……糖分を、もっと摂取したほうが良いだろうか、と思いつつ。

「野田っち！」

「おう、やなぎん。どしたん？」

「いやせつかくだから。お昼いつしよに食べようよ」

廊下に出た所で声をかけられ、隣に立つあかりが嫌そうな顔をした。そういえば訊かなかったが、ふたりきりになったとき、どんな会話を交わしたのだろう。

にこにこ笑うやなぎんこと奏君と、隣に立つ昴君。昴君は背が小さいわけでもないけど、やなぎんのが高い。というか、やなぎんの背が高いのだな。短髪の上に近い髪は、活発な彼の性格をよくあらわしている。良くも悪くも主張が激しい、というか。いや、今時金色の髪もそうそう珍しくはないけれど。

目は奥二重なのかな。よくみると線が見える。目は大きすぎないけど、糸目ではない。万人から平均よりも格好良い顔と言われそう。嫌いじゃないけれど。

と、私はやなぎんに注目していた視線を、昴君へとうつしてみる。茶のふわふわなくせつ毛。長い睫毛。ぱっちりとした二重に、唇は厚いまでいかないが、薄くはないな。

うん、やっぱり、昴君は、綺麗だ。

「……千絵子さん、どうかした？」

「どうしたとは」

まじまじと彼を見つめる視線はそのままに訊ね返すと、昴君は狼狽しつつも頬を染める。あまり見ないで、と言われたので、一言謝罪して観察するような力強い視線を送るのはやめた。

「……じゃあ、また部室に行くかい？」

「いや、図書室に行こう」

問いかけた私に即答した昴君が不思議で、私は首を傾げる。しか

し何か質問する前に隣のあかりからため息が漏れたのに気が付けば、彼女のほうへと視線をやった。

「そうじゃなければ意味がないものね。行くわよ、ちー」

「？ 意味がないとは」

「部室には人がいないでしょ」

「その何が悪いと言うのか」

重なる私の質問に、呆れたようにあかりが再度ため息を吐く。

「そんなくらい自分で考えなさい」

言って、すたすたと歩き始める友人。

どうしてあかりも昴君も似たようなことを言うのだ。前を歩くあかりの隣にちゃっかり小走りで並んだ奏君は、あかりに足を思い切り踏んづけられていた。あれは痛い。

「置いてかれちゃうよ、いこう」

「……昴君も、やっぱり教えてくれないの」

「お昼を食べるのが、第一優先じゃないの？」

くす、と笑って私に再度歩みをうながした昴君の顔は、どこか悪戯っ子のようなだった。

なんなのだ、一体。

もうおわかりの通り、我が校は図書室での飲食を禁止していない。ただし、カップラーメンは別である。液体は本を汚す恐れがあるし、残ったスープをどこに捨てるかで一度問題になった。図書室を出てすぐのトイレは、よく手洗い場の排水溝が詰まってしまっていたから。そういう経緯があり、図書室はカップラーメン厳禁である。

「……この前もそうだったけど、昴君のお弁当、それ千絵子の自作よね」

「ほんとだ。中身いつしょだね」

あかりの言葉に、やなぎさんが同じく私と昴君のお弁当を覗き込む。ちなみに、私とあかりが隣同士に座った。やなぎさんはあかりの隣が良かったみたいだけど、全力であかりが阻止したのだ。

私の向かいに昴君が座っているの、自然とふたつのお弁当を見比べる為に昴君のほうへとやなぎさんの身体がたおされる。ふに。

眉間に触れたのは、昴君の人さし指だった。急に感触がしたらびっくりするじゃないか。一体なんだというのか。

「千絵子さん、どうしたの？皺」

「……しわ？」

ぐにぐにとほぐすように触られて、やっと自分が顰め面していると自覚した。

おや？一体全体これはどういうことかね。理由を考えようにも、無意識だったからさっぱりわからない。

「ごめん、なんでもない」

「野田っち大丈夫？はらいた？」

「ちよつと、女子に腹痛とか訊くのやめなさいよ、こういう神経してるのあなた」

私よりも更に眉間に皺を寄せあかりが指摘すると、ごめんなさい！と慌ててやなぎさんが謝罪する。いや、別に気にしないけれども。

「ごめんね。こいつ、そういうの本当無神経なんだ。まあ、良くも悪くも単純というか」

「昂、それフォローになってないじゃん」

「してないよ。何、擁護してもらってる気だったの？意味がわからないね」

辛辣な言葉に、やなぎんは、意地悪するなよ！と涙目になる。ああ、ふたりは、すっごく仲良しなのだ。美しい彼と、格好良い彼。静謐な彼と、快活な彼。柔らかい彼と、豪快な彼。

静と動。まるで凸凹がかつちりと組み合わせるみたいに、ぴったりのふたり。

彼を失っても、私のが？嘘ばかりだ。昂君は、優しい顔をして、毒を吐く。見え隠れする本性みたいなものも、少しだけれどわかってきた。彼は、きつと嘘が上手な人種なのだ。

私を、道具として扱いたくないのは、彼が少しでも罪悪感を軽くしたいからなのかもしれないし、それこそ、高柳奏という人間の呪縛から解放されたいからなのかもしれない。

けれど。

目の前で繰り広げられる会話に。楽しそうに笑う昂君に。

私は、早々に、そんなわけがない、と思い至った。

無理じゃないか。私が、彼をそこから救い出すなんて。ああ、なんだろ。無力だなと、思う。

同時に沸きあがる哀しさは、なんなのだろう。せめて友人として、隣に立てたならば、こんな気持ちにはならなかったらうか。

形ばかりの恋人は、この先も虚しさが付き纏うのだろうと、楽しそうにふたりをみていて、改めて、私の胸を突き刺した事実だった。

「あかりちゃん、いつになったら俺の事名前で呼んでくれるの？」

「別にいいじゃないのどうだって」

「でもほら、我が家は全員高柳なわけだしさ、結婚式のとときとか、

下の名前で呼ばないと不便じゃない？」

「だったら結婚式の時限定であんたのこと名前で呼ぶわよ」

「うっ……俺、負けない」

ぺたん、と机に突っ伏すやなぎんは、本当に真っ直ぐな男なのだな、と感じる。

言動がすべて、素直すぎる。この年齢で、こんなに素直すぎるとそろそろ不便な面もたくさん出てくるのではなからうか。変なところを心配してしまつて、そんな自分がおかしくなる。

ある意味私も、昴君も、彼によって苦しめられているのに。そんな彼は驚く程憎しみを持ってないようなキャラクターだった。これでは、昴君も気持ちを持て余したって仕方がないだろう。

あかりに何度詰られても立ち向かう彼の愚かさは、見ていてとても気持ちがよかった。

もちろん、変な意味とか、悪い意味ではなくて。

「ちょっと、あんた大丈夫なの」

「へ」

「薄気味悪い愛想笑いずっとくつつけて。お昼、味しなかったんじゃない」

教室に戻って来たとき言われた言葉に、私は苦笑するしかなかった。

なにもかもその通りすぎて、やっぱりあかりにはかなわないなあ、と思わざるをえない。まあ、私もわかりやすいというか、顔に出やすいからな。

これから先、何度もああいうふたりを見ていくのだろうと思うと、胸中は複雑だった。

でも、ほんつと、いいやつ、だなあ。やなぎんは。友達多いんだろつな。なんか、見ていてすごくまぶしいや。

達観できれば、ちよつとは違うんだろうか。

昴君が、いつも綺麗な顔をしていてくれれば、私は哀しくならな
いはずだけど、あんまりにも私を置いて嬉しそうにされてしまうと、
ちよつと、じゃない、かなり寂しい。

買ってきたいちご牛乳を飲みつつ、私はまた気付けば眉間に皺を
寄せていた。

自分の今の心はなんだか難解で、誰かに教えてほしいとさえ考え
ていた。

「野田つちー」

放課後になり、さあ帰ろう、という矢先。あかりは今日は何やら
用事があるらしく、私が帰り支度をしている間に慌しく下校してし
まった。

マイペースに身支度をしていたら、明るい声で再度教室に訪れ
たやなぎんに、私は首を傾げる。

「どうしたの」

「うん、ちよつとお話があつてさ。いいかな」

「かまわんけど……ん？昴君は？」

「昴は今日生徒会に顔出してるから、遅くなるんじゃない？」

「なんと。昴君は生徒会役員であつたか」

「いや、正式にじゃないけど。たまに手が回らなくなると泣きつか
れるんだ。生徒会の顧問から」

生徒会の顧問。私はまったく興味のない部分だったので、それが
誰かもわからずまたまた首を傾げた。

そんな様子にやなぎんが目を丸くする。

「野田つち、なんにも知らないんだね。ふたりって恋人なんじゃな

いの？」

後半部分は声を潜めて言った彼に、私はえ、と固まる。知ってたのか。

それと同時に、胸を抉られた。

何も知らない。私は、昴君のことを、なにひとつ。

「生徒会顧問てさ、佐藤先生なんだけど。平凡な苗字だから皆気付かないけど、昴のお父さんの弟さんなんだよ。つまり叔父さん」

「なんと」

「野田っち、反応が面白い」

豪快に笑って私の背中をばんばんと叩く彼に、やはり先程傷付けられたとを考えてしまった発言も、気にならなくなる。無神経かもしれないが、それをも吹き飛ばす彼の屈託ない行動は、やはり人を惹きつける何かがたくさんある。

私は、げほ、とむせながらも、そうかね、と声をあげた。

「そうだ、話とは？あまり人前では話せないのならば部室へ行こうか」

「ん？ああ……いや、ここでいいよ。もうちょっと人が少なくなったら話そ？」

「？ かまわんけども……部室は嫌なの」

私が疑問符を浮かべた声をあげると、半ば呆れたようなため息を吐き出して、やなぎんは私の頭を軽く叩いた。痛くはないけど、なんなのだね。

「野田っち！簡単に密室で男とふたりきりになろうとしないの！」

めっ！とそんな声までおまけにくつつけられ、私は目を見開く。
だって、いや、そんな。君は、昴君の友達なのに。どうしてそんな風に、警戒せねばなるまい。

「まったく、昴があんだけ束縛しようとするのもわかるなあ。危なっかしくて見てられないよ。野田っちって、無意識に男の好意をへし折るタイプでしょ。そのくせ、遊び人には簡単に利用されちゃうの」

「……やなぎんまでなぜそんな難しい事を。大体、私はそうそう異性に好意を寄せられる人間ではないのだよ？何をどう警戒しろと？」

私の言葉にこれだよ、と肩を竦めるやなぎんが、今までの印象とは違い、おとなの男性のようんで、なんだか悔しい。私も、昴君やあかりや彼のように、皆が知っていて私の知らない理をわかりたい。どうやったら、もう一段階おとなになれるのだろう。

「まあ、とにかく。無闇に男性とふたりきりになっちゃだめだよ？」
「了解した。でも、やなぎんの事は警戒しなくていいのでしょ？」
「……うん、いや、良いん、だけどね。俺もなー、まあ、言われなきやわかんない程度には鈍いからさあ。初対面の際は本当ごめんね！あの時はまだ知らなくて」

知らなくてというのは、多分、一応、私と昴君が付き合っているという事実だろう。そういえば昴君が言っていた、あまり親しくするなという言葉の意味も、結局わからないままだ。

「あんまり野田っちと仲良くすると昴が嫉妬して大変なことになるし。俺も、あのあと超しめられたもん、昴に。珍しいよあいつ、他人にそう執着する人間でもないのに。愛されてるなー、野田っち」

話している間に教室には誰もいなくなっただからか、やなぎんは声の調子を落とすことなく、笑う。

「というか、ん？」

「待ってください。」

「……やなぎん、どういう意味だね」

「？ なにが」

「嫉妬、とは」

「だからあ。俺と野田つちが仲良くなりすぎるのが嫌なんだよ、昴は。野田つちのこと愛しちゃってるから」

「そ、それは逆じゃないの？ ええと、なんというか、昔からの幼なじみを私に取られるのが嫌で」

「んなわけないじゃん！ 昴、俺の胸倉掴んでなんて言ったと思う？」

笑って、おいでおいで、とやなぎんが手を振る。私は、机を挟んでいたが出来る限り彼に顔を寄せると、秘密の話をするように、やなぎんが耳元でひっそりと囁いた。

「必要以上に千絵子に近付くな、少しでも触れたら殺すぞ」

その時。私は一瞬思考停止した。これはちよつと、糖分が必要だな。うん、そうだ。

「……ちよつと、甘いものが欲しいので」

「あ、俺飴持ってるよ、はいあげる」

む。

昴君といいやなぎんといい、私がココアもしくは甘いなにかを買いに行くのをよく阻止してくるな。しかしこれは、美味しそうなソーダ飴である。もらっておこう。

綺麗な水色のそれを口の中にころん、と放れば、中でしゅしゅわと弾けた。この刺激もまた格別。脳が覚醒しそうである。

にしても、昴君は、意味がわからん。想い人の胸倉掴んで、こころす、だど？なんと物騒な。しかもやなぎんの言葉が本当ならば、まるで。

私に、じゃなく、やなぎんに嫉妬してるみたいではないか。

そこまで考えて、必死でそれを振り払う。そんなはずがないのだから。

「……………やなぎん。件の相談事だが。一体何かね」

「あれ、見事に話題そらしたね。照れてるの？」

にやにや笑いながら言う彼に、いいから、と再度うながせば、今度は彼のほうが恥ずかしそうに少し頬を染めて、後頭部をかり、とひっかいた。

「うーん。その、さ、噂で、あかりちゃんて他校に彼氏がいるって話なんだけど、本当なのかな」

「ん？ああ。私はつつこんで訊いたことないけど、いると言っているからいるんじゃないかな」

しかし改めて問われて、考えたら私は彼氏とやらにそういえば一回もお目にかかったことがないと気が付いた。どころか、愚痴やらのろけやら、なんでもいいが彼の話題を耳にしたことすらない。

あれ。ひょっとして昴君の方便と同じで、あかりも断るのが面倒でそう触れ回っているだけなのだろうか。私も、もう少しきちんと訊いておけばよかっただろうか。少し自信がなくなってきた。

考え込む私に、やなぎんはそっか、と悲しそうな声音でこぼす。

「？ やなぎん、もしかして」

「……あ、わかつちゃう?」

えへ、と微笑む彼に、私は確信した。

「あかりが、好きなのか」

私の質問に首肯する彼に、私は思わずなんと、と呟いた。

第8話

ころころと、ソーダ味の飴が舌の上で転がるたび、しびれた。

その刺激に脳が反応する為か、私の思考は残念ながら停止するどころか稼働率がいつも以上に上がっている気がする。

先程の言葉をどんな角度から考えてみても、答えは同じ。実にシンプルなものだ。

私は、どうしたらいいだろう。いや、そもそも。彼のこれから話す内容が、予想できて怖い。そして、その予想が当たっていれば、なおのこと、怖い。

「……それで。具体的に、話っているのは」

少しかすれた自分の声が、情けない。その先は、訊きたくはなかったけれど、先送りにしたって仕方がない。私は無意識に歯を食いしばっていたらしい。

がり、と音がして、飴玉が口内で砕けた。

「うん、その。仲を取り持ってくれないか、とか極端な話ではなくてさ。ただ、知っておいてもらおっかなーって」

てつきりあれこれしてほしいという要求がくるのかと思ったら違うらしい。瞳を揺らして、やなぎんをみつめれば、彼は苦笑した。

「俺が嫌がるあかりちゃんに食い下がる理由はそういうことだから。少しでも免罪符にならないかなって思ってたさ。野田っちだって、面白がって友達に変な奴が付き纏ってるって思うよりずっといいかなって思ってた。まあ、ついでにちょっとでも応援してくれたら嬉しいけど」

えへへ、と笑う彼は、なんと好青年であろう。

私に、過度な情報を期待することもなく、ただ好きなのだと宣言をして。

人の気持ちに、鍵をかけることなど、できない。ましてや自分ではなく他人の気持ちを、どうにかしようなどとできるはずがない。そもそも、私にはわからなかった。

彼の恋が、成就するのか、破れるのか。

そのどちらが、幸せなのだろう。昴君に、とって。

あかりは？恋人がいるのだろうか。いないのだろうか。いなかったとして、やなぎんみたいな人間は苦手だと話していた。

私自身は、どうすればいいのだろうか、どうしたいのだろうか。

名残のソーダ味もそのうち完全に口の中から消えた頃、少し遠くから声が聞こえる。

「……野田っち？大丈夫？」

「！ あ、ああ。ちよつとびつくり。恋人の有無さえはつきりさせられなくてごめん。役立たずだな」

「いやいやいや！そんな、情報得る為に今だって話してるわけじゃないし！俺個人としても、野田っちと色々話してみたかったんだ」

混乱する私の頭に、更なる言葉が重なり逆に先程の答えは先延ばしにしようと思えた。現時点で悩んでも仕方がない。悩むにしても、とりあえず帰宅してからでよいだろう。

切り替えて、私はやなぎんの言葉にどういう意味なのかと問うてみれば、彼はくすくすと笑い声をあげる。

なぜだろう。なにかを慈しむかのような優しさを感じた。

「昂ってさあ、なんていうのかな。けっこう女関係で色々苦労してるんだよね、あの齡で。変な話、女性不信じゃないけど」

女性不信。

それは、昴君自身からも聞いた話だ。私は黙ってやなぎんの話に耳を傾ける。

「まあ、だからかなあ。ほら、俺との噂、知ってるでしょ？ 昴が俺の事好きでってやつ。野田っちは知ってると思うけどぜーんぶ嘘なわけ。でもそのまま放置してるのは、昴には好都合だからなんだよ」「好都合……」

「うん。言い寄られるの面倒だからって。まーったく、モテない男たちからしたら嫌味だよな。でも、よかった」

「どうして？」

「異性にたいして、っていうか恋愛全般かな。にたいして、冷めるとこあったから。野田っちみたいな存在が昴にできて幼なじみの俺としては嬉しいかぎりなんですよ」

へへ、と笑いながら話すやなぎんの、優しい顔。私もついつい、笑顔になる。

しかし、嘘というのは、どういうことなのだろうか。

昴君は、ひょっとしてきちんとやなぎんに想いを伝えられていないのだろうか。それとも、やなぎんの言っていることは、真実なのか？

同性愛者だという可能性を幼なじみに隠しているという可能性だ。つてあるし、一方の言葉だけを信じるのは危険だが……。

でも、もしやなぎんの言葉が本当としたら。昴君は特に男性を好きなわけではないということになる。ということは、私は嘘をつかれていたと結論付けねばなるまい。しかし、女性不信だというのはどうやら本当のようだ。

考えてみれば、昴君と始めた恋人未満なこの関係はひどく不確かで、曖昧な部分が大きい。まるまる彼の言葉を信じてはいたし、垣

間見える表情も、真実だと思えていたけれど……。

嘘の部分と本当の部分。それはあるのかもしれない。

そして、まだ彼が話してくれていない秘密……。

ひよっとしたら、そんな真実が、隠れているのかもしれない、私はまたも俯いて考え込んでしまっていた。

「おおーい、野田っちー？大丈夫かー」

「……やなぎん」

私の顔を覗き込むやなぎんの顔を、私はきつと、情けない顔で見ているのだろう。目の前の人好きな性格の男は、どうしたの、と優しい声で訊いてくる。多少の困り顔で。

心がふにゃ、とやわらかくなって、私は気付けば口開いていた。

「昂君にとつて、私って、なんなのかな……」

ぼつ、と呟いた私の言葉に、目を丸くしたやなぎんは、野田っちと呟きながら私の頭に手を伸ばしてきた。恐らく、頭を撫でようとしてくれただけで、他意はない。しかし、彼の手が私に触れるか触れないかの距離感で、やなぎんの動きはぴたりと止まった。

「何やってるのかな」

穏やかそうできて、しかし彼とある程度触れたことのある人間ならばわかる程度の不機嫌さを声色にのせながら、教室の出入り口で腕を組んだ昂君が真っ直ぐにこちらを見て声を上げた。

顔には、満面の笑みをたたえつつ。

どうした昂君、もう全体的に怖いぞ。

「昂。生徒会終わったの？」

「……なにしてた」

にこにこと笑いながら席を立つやなぎんを、今度こそ笑顔を消して昴君が睨みつける。

「あかりちゃんの事を話してただけだつて。伝えたほうがいいかなと思って」

「そんなことはどうでもいい。千絵子に触るなって言わなかった？」

「おい、人の恋路をどうでもいいで片付けるなよ」

あまりの言いように、ふてくされたような顔と声色でやなぎんが言えば、こちらへと歩いてきた昴君がやなぎんを一瞥して低い声をあげる。目線は、そのままやなぎんを見ていてくれたらいいのに、なぜか私に移っていた。鋭い眼光で射抜かれるようにみつめられ、私はびくり、と身体を揺らしてしまう。

「失恋したらそれはお前の責任だろう。せいぜい頑張れ。……で？ 話してただけなのになんであんなに距離が近かったの、千絵子さん？」

しゃがんで、立っていた昴君が私の眼前にその顔を持ってくる。ものすごく近い距離感に戸惑い、私は視線をさまよわせる。

「そ、その、なんで近かったんだろっ、ね？」

「……奏」

空転して思考がまわらない私は、あるうことかやなぎんに助けの意をこめて視線を投げたが、それが、彼が勝手に私に近付いたと解釈したのか、実際そうといえはそうだが語弊がありすぎる表現である、やなぎんを睨みつけ、低い声で彼の名を呼んだ。

もちろん、予想外だったやなぎんは思い切り焦っている。

「ええ！？ち、違うつて！なんか途中、ぼんやりと考え事したみたいだったから心配になって！それこそ具合悪いのかなって思ったからちよつと顔色を見ようと」

「詰めたんだな、距離を」

「そうかもしれないけど」

「奏。言っておくけど二度目はないよ。千絵子に安易に触るな」

「……はい」

こわ、と呟いて、やなぎんはさつさと教室を出て行った。また明日ね、と私にひとつ微笑んで。

罪をなすりつけようとしたのは確かに申し訳なかったと思うが、この空気の中で置いていくとは、なんたる所業。やなぎん、戻ってきておくれ！

「……千絵子さんも。これはお仕置きが必要かな？」

につこりと微笑んだ彼の言葉に、私は首を傾げる。しかし、呆ける時間はなかった。

強制的に腕を掴んで私を立ち上がらせると、昴君は無言で私を引っ張り歩きはじめる。無言の圧力が怖い。

「千絵子さん、ご両親、週末は出張だつて言ってたね」

「ん？あ、ああ。父は昨日から、母は今日からだけど」

「帰りは？」

「ええーと、ふたりとも月曜だけど……？」

昨日そんな話を確かしたけれど、今どうしてそんなことを言うのだろつか。わからなくて私は首を傾げる。ちなみに今日は金曜日で

ある。そういえば、昴君のお弁当を作らなくてもいいんだ。家事は少し楽になるけれど、ちょっと寂しいのはなぜだろう。ひとりの食事が増えるからだろうか。

考えている間にも、昴君は歩を進めていく。とりあえず、我が家に向かっているというのは間違いないみたいである。

「あの、す、昴君」

「なに？」

「苛々してるのはお腹が減っているから」

「千絵子と一緒にしないでくれる？」

につこりと微笑んで浴びせられた言葉は辛辣である。呼び捨てにも、だいぶ馴れてきた。

しかし一週間程経過して思うのだが、彼は物腰が柔らかいのと今とどちらが本来の彼なのだろう。とりあえず怖い。

話しかけると墓穴を掘りそうなので、私は家までの道程、固く口を閉ざしていた。

「千絵子さん。言ったよね、必要以上に仲良くするなって」

「？ 言っただけ」

「要約するとそういう事を僕は言っただけでしょう」

呆れたような声をあげながら、昴君はため息を吐く。リビングのソファで、まず私が着替える為に二階へあがるうとしたのだけれど、昴君に止められてしまったので、仕方なく制服のまま隣り合って座っている。

しかし今更であるが、親が居ぬ間に彼氏を連れ込むとはなんというあばずれなのだろうか。親は、そういうことに特別きびしいわけでもないようだ、隠れて何かするのを嫌うし、昴君の存在は近いうちに話さなければならぬかもしれない。

「……昂君」

「何？……っていつか、僕の話をちゃんと聞いてくれてた？」

「いや、そもそも昂君はどういうつもりなのかよわからん。まさかやなぎんに嫉妬してるわけでもないでしょうに。やなぎんが私に触ると何か不都合でも」

「そうだよ」

「え？」

「だから、そうだってば」

ぽかん、と私が口を開いて彼をみつめていると、昂君は獰猛な肉食獣のような双眸で、私を射抜く。

彼の唇が、私に咬みつく前に、囁いた。

「たとえ奏であろうと、俺の千絵子に俺以外の男が触れるなんてゆるさない」

「む……！？」

塞がれた唇の熱さに、激しさに、私は驚いた。

呼吸さえも奪うようなその行為に、頭がくらくらする。唇を開く前に強引に舌をねじこまれ、性急に吸われる。根っこからもぎとられてしまうかと思ったくらい、執拗な責めだった。

ぴちゃ、といやらしい水音が耳に届くと、羞恥と同時に快楽が身体全体に流れ込むようで、そんな自分が嫌だと思っ半面、こんな風に私を誘う昂君を詰りたくなる。もちろん、そんな感情が一時過ぎるだけで、私は結局はこういった事を許してしまっているんだと思うのだけだ。

しばらく、私がいっぱいいっぱいになるまで、昂君はあれやこれやをお仕置きと称して私に施した。しかし後半から、これはどうい

った意味合いがあるのだろうか、と問いたくなるものまであつて、そんな彼を少し責めるように見つめれば、にっこりと微笑んで昂君は言う。

「千絵子は今、誰の恋人なのかな？」

不服ではあるけれど、仮をなるべくなくそう、という彼の言葉にうなずいたのは事実で、私はそれもわかつているから不承不承でも昂君だ、と答えてみせる。昂君はその言葉に満足そうではあつたけれど、私の態度が気に入らないのか、続行、と言つてお仕置きなるものを再開した。

やがて脳が正常に機能しなくなり、わけのわからない疲労感が襲つてくると、遠くからそれでいいんだよ、と声が響いてくる。

一体、何が良いというのだろう。

意識は朦朧としているし、目の前に誰がいるのかもだんだんわからなくなつてきて、今ここで私に触れているのは誰なのだけ、と考へてしまふ。

思考が空転してくると、しかしすかさず昂君が僕を見て、と言うから、かろつじて私は忘れずに済んでいる状態なのだけ。

「それでいい。僕だけを見て、認識して」

今、君に触れているのは誰。

昂君。

小さく、呟くように、返答する。昂君はにっこりと微笑む。

ああ、そろそろ限界みたいだ。意識が遠のいてくる。

「……千絵子さん、君は僕の恋人なんだ。いいことから、忘れちゃだめだよ」

微笑む彼の声に、無意識にゆっくりと頷いて、私はそのまま意識を手放した。

第9話

頭がふわふわしてるのはなぜであろう。

気のせいではなければ、激しい空腹感が私を襲っている。けれども意識を浮上させたくないのは、私がこのあたたかい温もりから自身を引き剥がしたくないからだろうか。

とても、心地よい眠り。ああ、でも、どうしよう。

「はらへった……」

ぶは。

すぐ傍で激しく空気を吐き出す音が聞こえて、私は目をぱちりと開く。

しばらくはぼんやりとしていたけれど、やがてはつきりしてきた感覚に、私は目を見開いた。

目の前に、昴君の、顔？

驚きに固まる私を知ってか知らずか、昴君は私を覗き込み、にっこりと微笑んだ。

「おはよう。けっこう長く眠ってたね」

「……え？」

「ああ、おぼえてない？」

「いや、おぼえてるので言わなくていい。今何時ですか」

即答してさえぎれば、ぶは、と先程聞こえたのと同じ音。ああ、あれは昴君の笑い声だったんですね。

というか。

今気付いたけれど、この状態。もしかしくとも昴君にソファの上で膝枕してもらってる状態ですね。しかもなんか頭をずっと撫で

られております。やめてください、心地よいです。

「ええと……19時くらいかな。けっこう眠ってたね」
「なんと！」

どつりで腹減りなわけである。私の腹が轟音をあげたとて仕方あるまい。

ゆつくりと身体を起こそうとすると、昴君が素早く背中を支えてくれた。かたじけない。って声には出さないけれどね。こうなった原因はあなたですしね。

「ご飯、簡単なものでいい？食べていくでしょう？」

「え、いいよこんなときまで！」

「どつちにしろ私はお腹減ってるから食べるし」

ふらり、と面倒なので制服姿のままエプロンを付ける。冷蔵庫を開くと、昨日の残りの肉じゃががある。ふむ。

「昴君、ええと……あったあった。これを、木っ端微塵にしてくれるかい」

す、と私が台所下の収納からみじん切りを簡単に出来る優れものな機械を取り出すと、昴君は一瞬固まって、え？と戸惑いの声をあげる。

「これは……ええと、コンセントつけて……」

「カッターは装着してから食材を入れてね。じゃないと混ぜられないから」

「は、はい」

神妙な顔つきで返事をする昴君は、相変わらず料理中はすっかり謙虚な生徒だ。恐らく今までやってこなかっただけで、料理自体は決して下手ではなからう。

たまに、なぜか無茶苦茶な味付けをしたり、斬新さばかりを求めて食べ物をおもちゃにするような方はいるけれど、昴君はそれらに該当しない。きちんと基本の調味料を覚えて、どれをどう加えればどのような味になるか。それらを勉強している最中だ。

今日みたいに料理を楽しむ道具はあまり、というかやはり使った事がないのだろう。

恐る恐る、昨日残った肉じゃがを機械の中に投入していた。その様子はどこか可愛くて、ちょっと笑ってしまいそうになる。

「スイッチはね、こう、蓋をぎゅ、と押し込めば刃が回るようになってるから。お願いします」

「どのくらいやればいい？」

「うーん、みじん切りくらいになればいいかな。やりすぎちゃってもいいよ。食感あまりしなくなるかもしれないけど、まずはならないし」

につこりと微笑んだ私の顔に、わかった、と頷いて、昴君はごくり、と唾を飲み込んだ。

なんだか、作業中の自分も緊張してくる。

彼がやっている間に卵をといて、青葱を刻む。本当なら副菜も作りたいところだけど、まだ身体がだるい。私は豆腐とわかめのみそ汁だけ作る事に決めた。

高速で何かが回転するモーターのような音が響く。たまに何かが詰まったような音。まあ、そのまま肉じゃが細かく粉碎しているわけだから、時々はそうなるであろうな。

「このくらい？」

何度も押しして離してを繰り返しつつ、慎重に肉じゃがを粉微塵に
していった昴君からたずねられる。蓋を開いて中身を確認すれば、
うむ、と頷いた。

「いい塩梅。じゃあ昴君にはおみそ汁任そうかな。豆腐とわかめは
切っておいたから、はい」

その言葉に何を思ったのか、昴君はまたも真剣な表情ではい、と
答える。なんで料理中はいつもこういった反応なのだろう。まるで
自分が鬼教官のように思えてくるではないか。

真剣な面持ちで小鍋に水を入れ火にかける彼を横目でみつつ、私
はフライパンを熱する。本当は、卵って泡立てないほうが良いらし
いのだけれど、私はどうしてもふわふわなのが好きなので形が崩れ
てもとにかくふわふわにしたい人間なのである。

粉碎した肉じゃがを軽く炒めて、さつとお皿にあげる。刻んだ葱
はそのままパラパラとそこに散らす。で、溶き卵で肉じゃがを包む
薄焼き卵を作れば完成なんだけど、よく失敗する私はちょっとスク
ランブルエッグっぽく形を崩して上にのつける。そうすると形を保
つ為についつい火を通しすぎかたくなるのを防げるから。どうして
もふわふわ食感がほしいのです！

「……って昴君。一応言っておくけれども、君それは味噌を入れ
すぎじゃないのかね」

「え、そうなの？」

お玉めいっぱいに味噌を掬った彼を見て多少狼狽したが、慌てて
止めるには今私は忙しい。うむ、まずはひとつ、卵が完成した。

お皿に盛りつつ、そうだよ、と声をあげる。

「そもそもだし入れなさいよ。ほれ、ここに和風だしがあるでしよ。粉だからといって馬鹿にしちやいかんよ。無論、きちんとだしをとるほうが美味しいがこれだって日々食すのにはじゅうぶん」

「わかったから、とりあえず手順教えてほしいんだけど」

む。話をさえぎられた。

そういえばあまり詳細を話さずよろしく、と言ってそのまま彼に渡してしまったが、みそ汁くらいいくらなんでも作れるであろうというのは私の中の常識であり、彼にとっては常識ではない。

その事実をすっかり忘れ、私はちらと彼が持つ鍋の中身を見やる。もうすでに具材がぷかりと浮かんでいるではないか。なんと。手順がめちゃくちゃである。

豆腐はどのタイミングでもまあ問題はない、私は沸騰する前に味噌溶かしてその後入れる派であるが、が、しかしわかめは別である。火を通しすぎるとろん、と力をなくしたわかめが猛威をふるい、みそ汁ならぬ美味しい青汁になってしまう。

「もつときちゃんと教えればよかったね、ごめん」

言って、私は次に作る時にはわかめは最後に入れるようにしてくれと説明し、手順を教える。まあ、多少てろんとしてしまっても豆腐とわかめのみそ汁はそうそう不味くはならない。辛くなってしまうたらお湯を足せばいい。ということで、適量も教え、再度彼にながす。

緊張した面持ちで完成させたのはなんの変哲もない、それこそ小さい子でも作れるような一品ではあったが、最終的にちょうどいい塩加減のみそ汁が出来上がった、昴君は大変うれしそうであった。

そんな彼の顔を見ると、ほんわか温かい何かが流れ込んでくるのはなぜだろう。首を傾げながらも、次には出来上がったオムレットとみそ汁を早く食べたくてそればかりに意識がいった。やはり空

腹はいかん。

「千絵子さん、また色々料理教えてね」

「かまわないけど。どうしてそんなに料理作りたいの？」

「将来的に千絵子さんと結婚できる確率が増えるから」

「は！？」

驚いて昴君が洗って更に拭いてくれた食器を棚にしまうコップを落としてしまった。

食器棚はダイニングテーブルのすぐ近くなので、幸い床に落ちて割る事態は避けられたが、冗談にびっくりするなんて情けない。

「大丈夫？」

「あ、はははは」

何を誤魔化しているのかわからない笑いに、昴君は不思議そうに首を傾げた。

「ねえ、千絵子さん。今度、ご両親にあいさつさせてくれないかな」
「！ 昴君」

晩ごはんを食べ終わり、時刻は21時をまわったところ。そろそろ帰ろうとソファから立ち上がった昴君に、駅まで送ると言ったが家の前まででいいと断られた。彼とわかれてから我が家までの私の帰り道が心配なのだそうだ。

なんともいえない女の子扱いに、体がうずうずしてしまう。そういえば前もそうだったな。恋人というのは、こういうものなのか。ああ、頬が赤くなっていないだろうか。

「それで、いいかな？さっきの話。彼氏として僕のこと、紹介して

くれる？」

「え、あ、ああ！いいよ！」

ぼんやりと考え事をしていたせいか、咄嗟につい是と返答してしまつた。

てちよつとまつた。

「よかつた。それじゃあ、また月曜日に」

微笑んで、昴君が玄關扉を開く。閉じられたその音が耳に届いた時、固まっていた思考がようやくほどけた。

いや、ちよつと。確かに、少し前思つたさ。昴君のこと、両親に言つべきだと。けれどそれは、その。彼氏です、とか、そういうことではなく。

「そもそもだね、両親に恋人ができたって報告するってのはだよ」

無意識に私の手は冷蔵庫を開く。取り出したのは一枚の板チョコである。

包丁とまな板を用意し、チョコレートの包みを剥がした。

ざく、とチョコに刃が突き刺さる音が響く。

「そついう、なんだ、その、あれだ」

ざくざくと音が響いて、気付けばチョコレートは綺麗に砕かれていた。

再度冷蔵庫を開き、牛乳を取り出す。閉めた音が若干勢いがあったのは、今の私が極端に力加減がへたになったからだ。

「公認の、仲つて言うつと変な、あれだけれども！あれなのか！」

鍋に牛乳を注ぎ、火をつける。換気扇も忘れずにまわした。火加減は弱火。

「あああもう！どついうこつた！！」

ついでにみつけた香り付け用に買ったブレンダーの小瓶も取り出して、たらす。ざざざ、と刻んだチョコレートを勢い良く流し込んだ。

「昴君は！私と恋人なんじゃなかるうて！仮って付くはずじゃないのか！」

ぐるぐるとかきまぜる。泡だて器を使っているからか、がしゃがしゃと音が鳴ってうるさい。

「あああああもう！わからんわからんわからん！」

かち、とスイッチを押して火を止めれば、用意していたマグカップに出来上がった液体を注ぎ込んだ。簡単な後片付けを済ませれば、火傷しそうなほど熱いホットチョコレートは飲み頃の温かさだ。

ソファに座って、一口啜る。

ほう、と自身の口から吐息がもれた。

「……本当に、これから先も付き合いを継続させるつもりなの？」

だとしたら、私は、君を。

過ぎた言葉の意味に気が付いて、私は身体を硬直させる。

今、何を思ったのだ、私は。いかん、糖分を多量に摂取しすぎたか！焦りつつ中身を飲み干したマグカップを洗ってから、私は風呂

に入る準備をしようとリビングをあとにした。

次の日の朝、起こされた原因は誰かからの着信によるものだった。まだ開いていない目をそのままに、必死で身体を動かせば、ベッドの先にある机へと手を伸ばす。がちゃん。おっと、いかん、電話が落ちた。

落下した携帯電話を拾い上げ、私は薄目で通話ボタンを押した。

「……どちらさまですか」

『画面に表示されてるでしょう』

くすくすと笑いながら言われて、私はそつえばそうか、と気が付いた。

いったん耳から携帯電話を離し、表示されている着信者の名前を確認する。そこには「佐藤昂」とあった。

あれ？

「……もしかしくとも昂君」

『そうだね、おはよう。まだ寝てた？意外だなあ、休日も起きるの早いのかと思ってた』

「私はものすごく寝るのが好きだからね、休日は12時間寝てもかまわなくらいだ」

『それ、寝すぎじゃないかな。もう11時だけど、昨日は何時に寝たの？』

昂君の言葉に、まだ半分ぼんやりしている頭で考える。昨日？昨日はー、何時だったろう。

「あーと……飲んでから風呂入って、髪乾かしつつ洗濯機まわして干して……ああ、日付変更後くらいかな」

『……もう12時間近く寝てるじゃない』

「そうだね、特に問題ない」

『……うん、まあいいや。ね、今日ひま?』

暇かと問われて、暇ですよと答えるのもどこか癪だが、私は本当に予定がないので暇だと答えると、昴君が電話口でじゃあさ、と続ける。

『外で会わない? ちょうどお昼時だし。ごはんいっしょに食べようよ』

「……支度に恐らく30分はかかるが」

『逆に30分で終わるのすごいよ。一時間とか言われるのかと』

「一時間も自分に時間をかけるほど私は人間ができていない」

『寝起きも面白いね千絵子さん』

声をあげて笑われたところで、やっと意識が本当に覚醒してきた。あれ、ひよっとしてこれは、休日に遊ぼうと誘われたのかな。

『じゃあ、一時間後にY駅で待ちあわせしよう。それでいい?』

「え、あ、ああ。大丈夫、だけれども」

『ふふ、初デートだね。あんまり焦って支度しないようにね、僕は待ったって怒らないから』

それじゃあ、と言って電話が切れる。

私は呆然と電話をみつめていたが、数秒後にはやがて意識を取り戻した。昨日の玄関先といい、なにやら昴君は隙について狙っているように思えてならない。

というか。

「……デートって、普通ならばどういう格好で行くのさ」

呟いた声の調子は、自分で発したわけであるがあまりにも情けな
かった。

第10話

『はあ?』

不機嫌な声が耳元から響いて、私は目の前にその声を発している主がいるわけでもないのに縮こまる。自分でも、そういった反応をされる質問をしている自覚があるだけになんともいえない気分だ。しかし現状、糖分を摂取したところで答えが出ないのだから仕方がない。

「だから……普通、恋人同士が出かける時、女性はどいつた格好をするものなのかと」

『初デートなの?』

「……………まあ」

あかりの質問に居た堪れない思いをしつつも、是と返答する。

数秒の沈黙が異様に長く感じられ、私は暴れたくなったが、実行に移す前に友人が簡潔に言った。

『そんなもん、足さえ出しときゃいいのよ』

足、とな。

「……………それはつまり、着丈が短いものを履けということ?」

『そうね』

「スカートはこの時期寒いのでは」

『じゃあパンツでいいんじゃない』

「しかし短いズボンでも寒いのでは」

『ブーツあわせればいいでしょ』

ああ、なるほど。

その言葉を私が発したと同時に、ぶつり、と電話が途絶えた。な
んともあかりらしいと思ったが、答えてくれた事には変わらないの
で、携帯電話を置き、正座して深々と頭を下げてみた。ありがとう
ございました、という意を込めて。

まあ、本人に見えないのだからまったくもって意味のない行為で
あるとわかつてはいたが。

着るものがある程度決まれば、それに該当する服装のものをクロ
ーゼットから出すだけだが……どうしたものか。

少し悩んで、いつだか買ったかぼちゃパンツのようなデザインのも
のを引っ張り出す。色は赤と緑のチェック柄だ。これは太腿あた
りまでしか着丈がないから、かなり短い部類だろう。上は……とり
あえずセーターで良いだろうか。

ごそごそと探して、割とシンプルな灰色のセーターにした。全体
的に身体の線にぴったりくつつくデザインだが、タートルネックが
ちよつと苦手な私は、首元だけがだぶついてるものを好んで買う。
これもそういうものだ。一応中にキャミソールも一枚着ておこう。

外気温からいって、コートを取り出すほどでもないんだよな。マ
フラーは、まだそんな苦手ではないけれど、意識するとふとしたと
きに喉が詰まっつてうえ、と声をあげる。あの、うえ、と声をあげる
瞬間が嫌なので、今日のような中途半端な寒さでは巻きたくはない。
またも少し悩んで、ポンチヨがあつたことを思い出した。柄はち
よつと牧羊民族の方が着そうなものだ。色は白で、柄部分が暗い青
パツと見は紺だけど、紺よりも少し青に近い。前に丸まったふた
つの毛糸玉のようなものがぶらさがってるのだけれど、これの正式
名称はわからない。とりあえず、この形を見ているとアメリカンク
ラッカーによく似ているというも思う。

ポンチヨは、木で出来た茶のボタンをみつつ留めて着る。

戸締りの確認、荷物の確認をし、玄関の靴箱にて目当てのブーツ

を探す。靴下はいつも着用している慣れ親しんだハイソックスにしたが、これで良かったろうか。まあ、ブーツを履いてしまえば隠れてしまうのでいいか。

ごそごそと探して、目当てのものをみつけた。

黒いブーツはふくらはぎあたりまでの長さのものだ。素材が面白くて気に入っている。なんの変哲もないものなのだが、上部分に切り返しのようにニット素材がくつついているのだ。ちょうど、ファーンなんかをあしらったブーツがあるが、あれのファアの部分がニットになっている。ニット部分は灰色なので、セーターとおそろいの色。

一応玄関の姿見でなるべく客観的に自身をみつめてみる。若干足が寒そうではあるが、おかしな格好ではない。と思いたい。

ふむ、と一度頷いて、私は決心して玄関扉を開けた。いざゆかん。携帯電話で時刻を確認。今から駅まで歩いて電車に乗れば、10分前には到着できる。遅刻ではい事に安堵しつつ、髪型はまるで気にしていなかったがこのままで良かったのか？と一瞬過ぎった。

まあ、ちゃんと寝癖は直したわけだしいいか。

待ち合わせ場所には、もうすでに昴君が立っていた。遠くからでもスタイルが良い彼は目立つ。格好もなんというか、妙に垢抜けている気がしてしまうのはなぜであろう。

黒いカーディガンに、普通のシャツだし、パンツもちよっとお洒落な型ではあるっばいけれど普通の灰色のパンツ。

特別気取らなくとも格好良く映ってしまう人が、本当のすごい人なのだろう。

うなずきつつ、私は彼に近寄る。

「昴君」

手を挙げて声をかければ、反応して昴君がこちらへと顔を向けた。

彼のただでさえおおきい瞳が驚愕で見開かれ、さらに大きくなった。どうしたのだ。

わからなくて首を傾げると、昴君がぼつり、と呟いた。

「……早いね」

「早いのは昴君じゃないのかね」

「いや、だって。本当に時間通り来るとは思わなかった」

「なぜ？」

「一時間後つてさすがに無理あったでしょ。余裕が全然ないし」

「だったらもつと遅くに設定すれば良かったのでは」

「わがままかもしれないけど、早く会いたかったから」

急いで転んだりしてほしくはなかったけど、急いでほしかった。

そのぶん、早く会えるから。

そう答えた昴君の顔が、赤くて。瞳も潤んでいて。

正直、どこの乙女ですか、と心の中で思ってしまった。あと恥ずかしい。私にそんな価値ないと思うのだけれど、というかその発言は本当にどういう意味なのだろう。

昨日から、いや、彼が付き合ってくれと言ったあときから、私は混乱の極みだ。

「……昴君？」

「え？」

え、じゃない。私の問いかけの理由をわかっているくせに、すつとぼけないでほしい。

なぜそんなにじろじろ見るんだ。穴が開くじゃないか！

この格好、何かおかしいだろうか。急激に不安になって、私は自身の身体にあちこち視線をさまよわせる。

しかし、次の瞬間。

私の左手に、温かいぬくもりが伝わってくる。

「かわいい」

「！ あ、あの」

「私服、そういうの着るんだ。かわいい」

満面の笑みで言われて、私は先程とは違った理由で焦りを覚える。なんだか、頬に熱が集まっている気がするし、昴君と繋がれた私の左手は、汗をかいていないだろうか。

振りほどきたくもなかったが、それは彼に悪い気がして、なんとか耐える。

そんないっぱいっぱいの私を、その態度で察しているはずなのに、昴君は更に私の耳元まで唇を寄せれば、囁いた。

「僕の為に着てくれたと思うと、よりいっそうかわいい」

艶っぽいその声に、中心がどくん、と鳴った。

ありがとう、と言った声は、かすてはいなかったろうか。

昨日から、私の中でなにかがたちを変えてしまった気がしてならない。けれども、その正体がわからなかった。

ぼんやりと考えている間にも、昴君は普段の調子で話しかけてくる。

「お昼、何を食べたい？」

「……美味しければなんでもかまわない」

私の言葉に、千絵子さんらしいと言って彼が微笑んだ。

「あそこのビルの二階、知ってる？パンが食べ放題のお店あるんだ。焼きたてのパンがどんどん足されていくから、食べ放題なのにひと

つひとつが美味しいって評判なんだよ。メイン料理はハンバーグが多いかな。好き？」

「私は好き嫌いが無い。昴君のおすすめならば、是非行ってみたい」「よかった」

手をひかれて、歩き出す。

繋がったそれを、離したくないと思ったのはなぜだろう。空腹だからか、やはり答えはわからなかった。

「千絵子さん、良い食べっぷりだったね」

からからと笑う昴君に、私はそういう場面ではなかるうとわかってはいたが胸を張って答える。

「当然美味しいものは気の済むまでいただくに決まっているよ。いっこいっこがけっこう小さかったし、さくさくしたのとかもちもちしたのとか色々あって非常にうまかった！昴君、ありがとう。大満足のお昼ご飯だったよ」

ちょっと苦しいけど。

そう言えば、昴君はくすくすと笑いながらどこかで休憩する？と提案してくれたけれど、私は首を振った。

「しばらく歩けば消化される。せっかくだからその通り歩いていこうよ」

「地元民には定番コースだよ、ここ」

「そうだねえ。たいがいショッピングモールの所まで歩いて向かうよね」

「調べたらちょうどいい時間に上映する映画あるんだよ。せっかくだから観ない？」

ここの通りは、割とこちらへんに住んでいるひとたちからすれば有名な場所で、色々な雑貨屋だったり飲食店だったり洋服屋だったりが並んでいる。それを抜けた先にあるゴールが、巨大なショッピングモールなのだ。その中には映画館もあって、休日は学生以外にも訪れる事が多い。

映画か。そういえば最近観ていないな。

「どんな内容？」

「えーとね……確かコメディだったかなあ」

話しながら歩いていると、前方からすれ違う人とぶつかりそうになる。おっと危ない。思った時には、もう昴君に肩を抱かれていた。かばうように引き寄せられて、私はそんな風にあつかわれるのは慣れていなくて、慌ててしまう。

「大丈夫？はぐれちゃうといけないね」

お店を出た時は離されていた手を、昴君はそう言って再度握ってくる。自然な成り行きといえば、そうなのかもしれないけれど。

「……」

「？ 千絵子さん」

ときどきしているのは、私だけなのかな。
そう思うと、少しだけ哀しくなるのは、なぜなのだろう。

「千絵子」

「！ え、あ、なに？」

「映画。あんまりのんびりしていると始まっちゃうから、いこっか」

「……うん」

微笑む昴君に、私も笑みを返す。2人並んで、仲良く通りを歩く。私たちはきつと、外からみれば恋人にみえるのだろうな。ん？いや、わからないか。兄妹に見えるかも。でも兄妹って手を繋ぐものかな。仲良しならば繋ぐかも……わからないな。

いや、まあいい。そこは、あまり深く考えないようにして。

もしも。私たちが、なんの問題もない恋人たちに見えたとしたら。好き合っている仲の良い男女に見えるのならば。

こないびつな事はないよね、昴君。

珍しく皮肉っぽい思考を浮かべながら、私は傍観者のように彼の隣を歩いていた。

映画は、ラブコメっぽいものだった。高校生の2人が、出会って、少しの山やら谷やらがあって、両想いになっていくまでのお話。

主役の女の子がなんともいえずにクールで、冷静すぎるその思考に苦笑する。あそこまで割り切って自身や相手を分析できたなら、どんなに楽だろうか。けれども相手役の男の子は大変そうだ。あそこまで隙がない彼女を、しかし最後は溺愛という名の力技で押しきってしまった。

放課後の人が行き交う校門でのキスシーン。きつと付き合っている男女で観に来た人々は、それぞれの想いをこの映画に投影させてながめているに違いない。

楽しかった映画が、その瞬間つまらないものに思えて、私は多少冷めた目でスクリーンをながめる。

しかし、次の瞬間、突如見えなくなった画面に声を上げそうになった。なんということはない。視界を塞がれたのだ。

眼前にあらわれたのは昴君の綺麗な顔。触れた柔らかいものは、彼の唇。

「……なぜ」

キスをされた理由がわからなくて問うてみる。
無言で体勢を戻した昴君の顔は、暗闇ではつきりとはわからなかったけれど、笑っているようだった。

「けっこう面白かったね」

「そうだね。……あの、昴君、さすがに映画代は私が」

「いいよ！本当は千絵子さんの分も払うつもりだったのに」

外に出て、発した私の第一声に昴君は唇を尖らせる。

結局、お昼代を出してもらってしまったので、私はせめて映画代を2人分払いたいと申し出たのだけれど、却下されてしまった。

なんとか食い下がって自分のぶんは払えたのだけれど、どっちにしろ昴君にお金を使わせてしまったのには変わらない。

「僕が誘った初デートだよ？費用を出すのは当然じゃないか」

「それは違う。断らなかつたのは私なんだから。なにより今日一日楽しかった。ならば私だって同じ程度の負担をおってしかるべきだ」

私が睨みつけるようにそう言うと、昴君は頑固だなあ、と呆れる。

「わかった。じゃあ、晩ごはんは千絵子さんがごちそうして？」

「おお、いいとも」

「ただし、手作りのね」

「！それじゃいつもとかわない」

「いいのー。大体、いつも千絵子さんがごはん作ってくれてるじゃない。そのお礼だと思ってよ。異論は聞かない。さ、行こう」

「昴君」

「行こう？」

微笑む彼の顔を睨みつけても、無駄だとわかった。頑固だと先程言われたが、それは彼もいっしょだ。

なんとなく。

なんとなくだけれど、今日はこれ以上いっしょにいたくないと思った。家で2人きりだなんて、なおさら。でも、そんなこと、いま彼に言えるはずがない。私は、晩ごはんをこちそうするといく数秒前に口にしたのだから。

ため息を吐いて、昴君の手を取る。

満足そうに笑う彼の顔を視界に留めれば、私は負けた気分がして悔しかった。

第11話

頭の中で、何を作ろうと考えていれば、もう我が家に到着していた。

慣れた様子で玄関から敷地内へと入っていく彼がなんとなく嫌で、私は少し目を逸らしつつ、脱ぎにくいブーツに手をかける。覚悟したよりは易しく事は運び、私はそんなに待たせずに昴君を招き入れることができた。

「着替えてくるから、リビング座ってて」

そう告げて、二階へと上がろうとすれば、腕を引かれる。

何故なのかわからないが、ぐいぐいとリビングへ押し入られて、私は昴君と並んでソファに座らされていた。一体なんだというのか。

「……足」

「？ 足」

「どうしてこんな短い履いたの？」

どうしてと言われても。足を出せと言われたからそうしたのだが、昴君にはしないほうが良かったのだろうか。わからなくて私は眉を下げる。

その私の表情を見たからなのか、少し不機嫌そうにしていた昴君の声は軟化して、厳しい顔もいくぶんかやわらいだ。

「視界に入るたび、気になっちゃって。……僕という時以外は、あまり露出の多い服を着ないで」

元々、あまり肌を見せるのは好きではないのでそれはかまわない

のであるが、昴君の発言の意味をはかりかねた私は素直にどうして、と訊ねてみる。

なんだ。

昴君は呆れた様子でため息をついた。

「……男性に声をかけられやすくなっちゃうでしょう」

「そういうものなのかい」

「そうだよ」

「普段あまりこういう格好をしないから知らなんだ。そうか、わかった」

そうか、たとえ特別に可愛くはなくとも、露出していればなにしろの期待感は煽るものなのかもしれない。そう考えれば幾分か納得できる。……しかし、そんな普通の男性心理のようなものを、昴君はどうして理解しているのだろ。彼は本当によくわからない。考え込んでいたからなのか、昴君の顔が迫っているのに気付かずに、真正面をむいてぼんやりしていた。名前を呼ばれて振り向いた時には、鼻と鼻が擦れるんじゃないかというくらい、私と彼の距離感がおかしかった。

多少顔が引き攣ってしまったのも、この際仕方あるまい。

少しかたい声で、私は彼の名を呼ぶ。すると、昴君はにっこり微笑んだ。

「普段は着ないのに今日は着たの？」

「うん……今日のこれも普段なら下にストッキングとかレギンスとか合わせるんだけど。なんか、とにかく足を出しておけて」

「ひょっとしなくてもその発言をしたのは横田さん」

「大当たりー」

えへら、と笑って言えば、昴君は少し前と同じような不機嫌顔に

なる。しまった、選択を間違えたか。神妙にそうなんだ……と情感たつぷりに言っておくべきだったか、ここは。

いや、それもおかしいだろう。

「デート中気になって仕方なかった、綺麗な足だなあって」
「え」

きれい。

ひとつの単語に、どきりとする。昴君も、何かを綺麗だと感じるのか。いや、当たり前か、人間なのだから。動く感情があれば、そんなの当たり前を抱くだろう。

でも、なんでだろう。

無機物にたいして綺麗だと言う彼を想像できても、人に対して、綺麗だ、と発言する彼を想像できなかった。だって、彼こそ綺麗で、彼こそ綺麗だと言われる存在だから。

そんな昴君が、どうして、私を綺麗だなんて言うんだろう。私の足だろうと、私の一部であることにかわりはない。

どうしてだか、それは私にとって特別なものであったようであらずくと、胸の奥で何かがうずく。わからない、不確かな、なにかが。

「……ハイソックス履いてたんだね。制服のスカートと、長さは変わらないかもしれないけど……スボンだから形がこっちのがわかりやすい。あとやっぱり見える面積こっちのが多いのかなあ」

言って、太股に触れる昴君の指先が、なぜだか、よこしまな意思を持って動いている気がしてしまう。

気のせい、かな。自意識過剰？

少し狼狽しつつも、成り行きに身を任せていると、足を眺めていた昴君が、私を視線で射抜いた。

突然に目が合ってしまった、肩が揺れる。

どうしてそんな、怖い目でこっちを見るんだ。なんというのか、ぎらぎらしている、ように、見える。

思わず溜まった唾液を嚥下すると、昴君は無表情だった顔に満面の笑みを湛える。

「晩ごはん以外にも、お礼もらっていい？」

「へ……」

言った意味を理解する前に、昴君がなぜかソファから降りて私の正面に座り込む。どうして床に座り込むんだろ。というか、何、その体勢。

跪いてるみたいなんだけど。

疑問符を頭いっぱい浮かべた私を他所に、昴君は私の右足を軽く持ち上げると、馴れた手つきでするりとハイソックスを脱がす。それは左足も同じで、私はものの数秒で素足になった。単純に寒い。

「あの」

名前を呼ぼうとして、彼の行為に思考が停止した。

え。

今、今。いまいまいま！

気のせいではなければ、あの、昴君のく、唇が、私の足の、ゆ、指先に。

「綺麗」

「ひっ!？」

足の指にキスされたあああああ!!？

「や、やめて、汚い！」

「汚くないよ、綺麗」

「ななななにをやめてやめて本当にやめて！」

更に近付いて何か続きをしようとする昴君にパニックになった私は、あらん限りの力で暴れまくったのがいけなかったのだらう。ぎやあぎやあと叫び声をあげながら、遠ざかろうとソファから離れたそのときだ。

肘掛けからずり、と身体をのけぞらせて、私は真っ白になった。まさにパニックから我に返った瞬間、というやつだ。

「千絵子！」

昴君の声が遠くから聞こえる。

そのまま思い切り頭をぶつける、と覚悟した私はなんと。頭をぶつけてもないのに、そのまま意識を手離してしまったのだった。実際には、すんでのところで昴君がしっかりと身体を支えてくれていたから、大事なかつただけれど、とにかく混乱の極みだった私は、逃避もあつて気絶してしまったのだらう。

「……ちよつとからかいすぎたな」

呟いた昴君の言葉に、今の私は何も答えられないけれど。後々の私には質問できただらう。

あのとき本当に冗談のつもりだったのかい、と。

ぐう。

耳に届いた意地汚い音に私はゆるゆると目を開いた。

「……お腹へった」

第一声をいいかげんなんとかしたいけれど、すいてるのだから仕方がない。

私は混濁する記憶をゆつくりとたぐりよせながら、瞳を開く。

「千絵ちゃん、お母さん久しぶりに炒飯作っただけだけど食べる？
わかめスープ付きよー」

「食べるう……」

「着替えてからにする？そのまま食べる？」

「んー……足寒いから着替えてくる」

「じゃあ温めておくわね」

「かたじけない……」

お母さんにお礼を言って、私はリビングのソファから起き上がり、
ゆつくりと歩いて扉に手をかける。
っておい。

「！？ 母よ」

「なあに千絵ちゃん」

「なぜいるのだね」

「えー、お母さんお家に帰ってきちゃいけないの？寂しい事言うの
ね、千絵ちゃん」

「いやいやいやいやそういうことではなく！」

記憶違いでなければ父も母も出張で、月曜まで帰って来ない、はず、なのだ。

先程まで、いや一体どのくらいの時間が経過したのかはわからないが、していた行為を反芻して私はどうにも居た堪れない思いを抱いてしまう。罪悪感というのか、うしろめたい何かが自身を覆う。
なんならちよっと顔が真っ直ぐ見れないかもしれない。

そういえば。

昴君はどこに行ったのだろうか。鉢合わせする事なく帰ってくれていたならば良いのだけれど。

「お手洗い、ありがとうございました」

「いいえー、ちょうど出来たところだし、三人でお夕飯にしましょ」
「あ、千絵子さん起きたんだ？おはよう」

がちやり、と目の前の扉が開いたかと思うと、私の真正面に立っているのは今頭に過ぎった人物だった。

「すば……」

あまりの事にさすがに声が出ずに、私は口を開いたり閉じたりしながら彼を指さす。昴君はといえば、不思議そうに首を傾げるばかり。鳩が豆鉄砲を食ったような顔というのはきっと、まさしく今の私の顔であろう。辞書の隣にどうぞ今この時この瞬間を写真に収めた私を、掲載してくれたまえ。

「いやいや、そうではない。あまりに混乱すぎて思考が明後日の方へと向かい過ぎである。」

「あつ、こら千絵ちゃん！人様を指さすものじゃありません！」

めっ！と母からお叱りを受け、私は即座に申し訳ございません、と謝る。無論、謝罪のお辞儀は90度である。挨拶の時は30度だ。いやだからどうでもいい。まだ混乱はおさまらぬらしい。

ぼん、と後頭部にあたたかい温もりを感じて、私は顔をあげた。

「何をそんな深々と頭を下げるの。やめてよ、彼女にそんなことされて嬉しい彼氏いないでしょ」

「え、あ、すいません」

「だから謝らないでつてば。千絵子さん、寝惚けてるでしょう？いいから、着替えておいで」

昴君の申し出に、私はこくり、と無言で頷けば、当初の予定通り、リビングをあとにした。

「ひゅーひゅー」

「いや、奈緒子^{なご}さん、それはどうかと思います」

「あら、違ったかしら？」

「……問題はそこじゃないかと」

苦笑する昴君とか、茶化す母とか、ほのぼのした空気のリビングなんて知る由もなく、私はいまだ半覚醒状態の頭を必死に稼働させながらTシャツとスウェットに着替える。料理はしないのでジャージは着なくてよし。

それより、とりあえず落ち着こうじゃないか。まずは状況を整理しよう。

とりあえず、最優先事項は。

「……腹を満たすことだな」

いや。さすがにわかってますよ違うつて。わかってるんだけど現実逃避したくなった私はなんて弱いんでしょう。

でも起きた時にハイソックスをちゃんと履いてたから最悪な事態は免れたわけだ。妙なシーンは見られていまい。

と、信じたい。信じてる。

無理やり自身を納得させ、頷きつつ階下へとむかう。リビングからは楽しそうな笑い声。まさか、恋人だと紹介する前にもう恋人が恋人だと宣言しているとは……ええい、恋人言い過ぎて恋人がゲシ

ユタルト崩壊するではないか。

まだまだ混乱の渦にもまれている自身の暴走はとりあえず放っておく事にした。外に向けて一応の会話が成立するならば問題はなからう。たとえ頭がいっぱいいっぱいだっただとしても。

恐る恐る扉を開けば、音に反応してか母と昴君が同時にこちらを振り返った。

「あああいやだ。千絵ちゃんたら彼氏の前でそんな気の抜けた格好でいいの？」

「……ジャージを見られてるのに何を今更取り繕う必要があるのか、いやない」

「結論まで自分で言っちゃうんだ」

あはは、と笑う昴君の隣に腰かける。ダイニングテーブルは父不在なのに三つの椅子が埋まり、なんともいえない気分である。ひとりが自分の恋人だというのが何より複雑な心持ちにさせるものだ。

「でも、今日はかわいい格好してきてくれたし、今の姿も僕はかわいいと思ってるよ」

「……ありがとう」

「ひゅーひゅー」

「やめろ」

なんともへたくそなぎこちない声で囁し立てる母に思わずつつこみを入れれば、母は悲しそうに瞳を潤わせた。

今にも泣き出しそうな母に、私は慌てて謝罪の言葉を告げる。ごめん、と言えば母は何事もなかったかのように満面の笑みになるので、思わず脱力した。昔からそうなのだ、この母は。一生かなわないのだろう、と齡17にして思わずにはいられない。

「……まあ、いいや。食べて良いかな」

疲れた声で私と言えば、にこにこと母がどうぞ、と言うので、昴君と一緒に手を合わせていただきます、と唱えた。

久しぶりの他人が作ったごはん。ありがたいと同時に美味しい。そして幸せだ。いつしか、私は母よりも家事全般が上手になってしまっていて、母は休みの日でもあまりごはんを作らなくなった。私の手伝いはしてくれても、彼女が舵取りをすることがあまりなくなっただ。

母いわく、台所はもう私の城なのだそう。そう言ってもらえるのは、嬉しいしくすぐりたい。色々なお家事情はあれど、私は今に不満などひとつもない。母がいて、父がいて、私がいる。

それぞれがそれぞれの役割をこなし、また、それぞれがそれぞれに感謝の念を抱き、言葉にするし、してくれる。それはどんなに尊く、幸せであらう。

とはいえ、母の手料理もやはり年に一度は食したいという気持ちもあるわけだから、単純に今日のこれは嬉しいのだ。咀嚼する久しぶりの味に微笑む。

「うーん、やっぱりちーちゃんの炒飯のが美味しいねえ」

「とっても美味しいですけど」

昴君の言葉にうれしい、と母がはしゃぐ。次いで私に感想を求めてくるので、口の中ものをきちんと胃におさめたあと、声を上げる。

「コンソメの量ちよつと少なかったんじゃないか。あと卵入れるタイミングが早すぎたかな、あと」

「もー、だめだしそれくらいにしてー。お母さん超へこむー」

「母よ、若者言葉を操るのは悪いとは言わんが良いとも私は思わな

い。美味しいよ、私はこれでじゅうぶん」
「うふふふ、そう？よかった」

後半だけ取って微笑む母は、嬉しそうなのでよしとすることにした。

わかめスープを飲む。うん、ちよつとごま油が多かったかな。美味しいけど。やっぱり私は、もはや母よりも料理が上手になったのだなあ。そう改めて実感するとなんと感慨深い。

「ねえ、それで、昴君と千絵ちゃんていつから付き合ってるの？」
「二週間ほどになります」

母の質問に、昴君が微笑んで答える。

もうそんなに経過したのか、そういうえば。

というか、そういった話題は今までの会話で出てこなかったのか。そっちのがなんとなく驚きだ。今までどんな話をしていたのだろう。昴君の言葉に、へえ、と母はきらきらと瞳を輝かせる。しかし、てつきり怒られるものとはかり思っていたが、この母は相変わらず読めない。

なんにも言われない事が逆に耐えられず、私はついにみずから質問を投げかけることにした。ああ、なんと弱い。

「お母さん」
「なあに？」

首を傾げる母に、私はごくり、と唾を飲み込む。

「怒らないの？」
「なにを？」

「親がいない間に彼氏を家にあげたりして。普通は怒らない？」

「うーん？千絵子のこと、私、信頼しちゃいけなかった？まだそこまでは早かったかしら？もっと監視下に置いてあげたほうがいい？」
「いやいや、もちろんそんなことはないよ。信頼を裏切るつもりはない」

「じゃあ怒らないよ」

いや、本当言えばその、いかがわしい事もしたりしなかったりなのだが、基本的にはまだ一線を越えていない、ので、セーフなのだろうか。いやしかし。

ぐるぐる考えても仕方がないのでそこは一旦置いておく。

それにしたって、親の居ぬ間に男連れ込むなんてあばずれのような行為じゃないのか。母には、そこらへんもっと怒られるもの思っていたのだが。私もまだまだこの母を把握していない。

「僕は、千絵子さんと結婚を前提にお付き合いさせていただきたいんですが、かまいませんか？」

「あらー、もちろんよ。真面目で素敵だわ」

おい。ちょっと待て。色々と物申したいんだけど昂君。

このひと、今なんて言ったの？

混乱する私を他所に、ふたりの会話は進んでいく。手を叩いて頷いた母は、しかし次の瞬間ふ、と目を細めて私の知らない顔をした。

「それを事実にするかしないかはあなた次第よ」

「そうですね、僕と千絵子さん次第ですね」

挑戦的な視線を昂君に寄越した母に、昂君も同じような目で応える。

きつと、その言葉に満足したのだろう。ふ、と母の空気がやわらいだ。

「ええ、そうね。そうならすぐ素敵。いつか私に、昴君と千絵ちゃんの孫を抱かせてね」

「奈緒子さんてば、気が早いですね」

「あらあ、若いうちにおばあちゃんになるのちょっと夢なんだから」

「ふふ、それじゃあ計画的に頑張りますね」

「昴君てばたのしいわねー」

「いやいやいや。そろそろ会話のおかしさに気付け。」

あまりの内容にどこからどうつつこみを入れたら良いのかわからずに、しかしその前段階ですでに私の思考は混乱の極みとなっている。

結婚を前提にお付き合い……？一体、どういうことなんだ。

昴君は、言った。同性しか愛せないと思い込んでいたけれども、異性を愛せるのかもしれない。だから、私で試させてほしい、と。昴君の好きな相手は、高柳奏。やなぎん。昴君の幼なじみ。

今心の中で反芻した情報は、なにひとつ間違っていないはずなのに。

呆然とした状態で、昴君をみつめる。昴君は、私の視線を感じて、少し首を傾げて微笑んでいる。私はわけもわからずに、席を立った。口は勝手にトイレ、と声を発していたが。

ああ、ごはん食べ終わってた。食器を下げよう。

ふらふらと、無表情のまま私は台所に食器を下げる。あまりにも覚束無い足取りだったのが悪かったのか、何も無い場所で、私は派手に転んでしまった。

食器を持った状態で倒れた為、かばうこともできずに尻を床に叩きつけ、手にした食器はがちゃん、と床に散った。ぼんやりとみつめていると、割れたコップの破片が目の前できらきらと輝いている。私は何も考えずに、その綺麗なかけらへと手を伸ばした。

「千絵子！」

叫んだ昴君の声に反応して、私は慌てて触れようとしていた破片から手を遠ざけた。すんでの所で触れなかった指先は、流血の心配もない。

「なにやってるの、危ないな。触っちゃ駄目だよ怪我しちゃうから」
「……………」
「？ 千絵子」

何も反応しない私に怪訝な表情を向けて私の名前を呼ぶ。昴君が、私を心配して、私に寄り添っている。だというのに、遠く感じるこの距離は、なんだというのか。

「昴君も、不用意に触っちゃだめよ、危ないから。…………ええと、ちーちゃん。掃除機どこかしら」
「…………持つて、くる。とりあえず、これ」

母の声に反応して立ち上がれば、私は食器棚の上にある小型のほうきとちりとりを渡した。これで大きい破片は拾ってもらう。あとは……二重にしたビニール袋とどうでもいい広告を敷いてこの中に破片を入れてもらおう。

無表情のまま作業している私を、母も不思議そうな顔をしてみつめているが、特に何を言うでもなく私から受け取った道具で後始末をする。

私は、ふらふらした状態のまま廊下にある収納へと向かった。
がちゃん、と扉を開いて掃除機を取り出し、リビングへ戻ろうとする。けれども、足がどうにも動かなかった。

「忘れてた……」

ぽつり、と呟いた自身の言葉で、何かを忘れていたんじゃないかとすら思っていなかったさっきまでの自分に呆れて自嘲めいた笑みを浮かべてしまう。

そうだ、起き上がった後から今まで、忘れていた。私が、意識を失う直前に出した答えを。

『私は、昴君が、好き』

そうだ。

私は、好きになっではいけない相手を好きになったのだ。

男性を好きな男性に、私は想いを寄せてしまった。なによりも、私を、利用する相手を、私は。

「……こうなるのが嫌だったから、時間を共有なんてしたくなかったのに」

苦し紛れに笑ってみせても、心はちっともなぐさめられてなんかくれなかった。

第12話

結局、掃除機を渡して、少しだるいと嘘を吐いた私は、心配顔する昴君と母を残して、早々に部屋へと引つ込む事にした。

玄関で見送った昴君の顔はやっぱり綺麗で、そう思う自分がとても哀しい。

「なんでこうなっちゃうんだ……」

というか。

単純すぎやしませんか、私。まだ一ヶ月と経過していないはずなのだが。

始まりは奇妙で、と奇妙の一言で片付けられる話ではないな。自分で言っておいてなんだが。

好きです、付き合ってください、と。その綺麗な唇がそう動いて、空気を振動させ、彼の透明な声が私の耳に浸透したとき、私は首を傾げた。

考えてみれば。その時から、彼の何かがひっかかっていたのかもしれない。

いつからだったのだろう。ただの綺麗が、特別な綺麗にすりかわったのは。

そろそろ呻り声でも上げてしまいそうな勢いで、寝転がったまま考え込んでいると、部屋の扉を叩く音がする。私は無機質にどうぞと告げた。

ひよこ、と顔を出した母の奈緒子は、今年で47になるはずだが、見た目年齢がどうひいきしてみても30程度にしか見えない。さすがにそれは言い過ぎだろう、と思うが、時折男性から「姉妹ですか？」などと言われて、そのたび母は気を良くしている。

母は、一般的にかわいらしい女性で、父は、人によってはとても

好かれる容姿をしている。なんというのだろうか、一重のすつとした顔だ。

今流行の若手俳優が好きな人間からすればなんのひっかかりも持たない顔だが、割と中堅の俳優が好きである方々にはたまらない顔であると思われる。

なぜそんな客観的に分析できるのかといえば、何人かの友人に言われたからである。本当に、女性の評価がはつきりと割れるものだから面白い。

そんな彼らから生まれた私の顔は、どちらともつかない顔で、ひよつとすると普通よりいくぶん良いかもしれないけれど、個人的にはぎりぎり十人並みに躍り出ている顔つきだと思う。しかし、普段両親を見ているせいで目が肥えているのだ、とあかりにいつか言われたことがある。そうなのかもしれないが、冷静に自身の容姿をはかるのは存外難しいものではなからうか。

そもそも、そう発言するあたりだってとても美人なのだ。そう考えると、私はけっこうメンクイってやつなのかもしれないかった。

顔で友人を選んだつもりは決けてないが。

「ちーい」

「なんだね、飼い犬でも呼ぶように」

「うふふ、今日はびっくりしちゃった」

母の含みのある笑いに、私は目を眇める。ちなみに、起き上がるのは億劫なので寝転んだままだ。なんなら本当にだるい気がしてきた。

にしても、この顔。何かがひっかかる。

「……母よ」

「はあい」

「なるほど、私はわかりました」

「千絵ちゃんは相変わらず面白い言葉遣いよねえ」

うふふ、と微笑みながら、ベッドの上に位置する机からキャスタ
ー付きの椅子を引き、私の傍らに座った母は、さらり、と私のおで
こにかかる髪を梳く。

心地よい手触りに、ついまどろみそうになるが、確認しなければ
ならぬことがある。

「昂君の存在、少し前から気付いていたのだね。だから今日、月曜
日まで帰らないと私に嘘を吐き、昂君と遭遇できるか賭けたんだ」

「ほぼ確信に近かったのよ？ なんだか頻繁に出入りしているみたい
だから、毎週末会ってるのかしらなんて思っていたくらい」

「残念。週末に会ったのは今回が初めてだよ」

「そう？ まあ、お付き合いして二週間て言っていたものね」

「……………お母さん」

「ん？」

「勝手に、男の子を家に上げたりして、ごめんなさい」

少しきまりが悪くて、ぼそぼそと私が呟くと、お母さんは目を丸
くしてそれからやわらかく微笑んだ。

酷く優しい笑顔に、なんだか泣きそうになる。

「そうねえ、あまり感心はしないけれど…………でも変な子じゃなくて
よかったわ。お母さん、一目見て気に入っちゃった。少なくとも、
昂君が千絵ちゃんにベタ惚れなのはわかったもの」

母の言葉に、私は胸がずきりと痛む。歪ませた顔に何を思ったの
か、それを見た母は相変わらず優しい顔で笑う。

「別にこれからも、家に上げるなどはお母さんは言わないわ。ただ、

お父さんにもきちんと話すのよ」

あやすように頭を撫でられて、私は不覚にも涙腺がゆるんでしま
う。気付けば、言葉は口から飛び出していった。

「……もう、家には呼ばない」

「？ 千絵ちゃん」

「もう、二度と、昴君は、家には来ない」

震える声で話せば、目を丸くする母。けれど事情をすべて吐露す
るには、あまりにも絡まりすぎていて。なにより、なんとなくだけ
れど、母や父には言い辛い話だった。

その心境を察してくれたのか、これ以上にも話す気はなかった
私に、母は一言、そう、と相槌をうつと、椅子から立ち上がった。

「千絵ちゃん、熱が出るかもしれないわ。ゆっくり休むのよ」

言って、部屋の電気を落とすと、母は部屋をあとにした。

ぱたん、と扉が閉じる音を耳で確認した途端、私の涙腺は崩壊し
た。次から次へと、涙が溢れて止まらない。

もう、私は自分がどうしたいのかわからない。彼に、好きだと告
げたら、どうなる？

きつと昴君は、これからも付き合っていこうと言ってくれるに違
いない。何よりも、ついこのあいだ約束したのがそういう条件だっ
たのだから。

でも。

そんなものは、ほしくない。

そんなものは、いらない。

だって昴君は、私を好きじゃない。私が昴君を好きでも、彼の気
持ちは私にない。そんな状態で名ばかりの恋人を続けて、なんにな

るというのだ？

好きという気持ちは、きつと溢れて止まらなくなる。そうなら、今よりもっともつと苦しい。

私は、それに耐える自信がない。

傍にいたくないのか、と訊かれたら、それは、隣に立っていたいに決まってる。

けれども、同時に、やなぎんと仲良く喋る昴君を見なくちゃいけなくて。自分の気持ちを隠して、彼の隣に居れば、いつかは昴君が私を好きになってくれるかもしれないけれど。

でもさ、そんなのって、辛いよ。

だって、わからないもの。君が私を好きになってくれるかなんて何よりも、もしも好きになったと言ってくれても、私は昴君の言葉を信じられるかがわからない。

最初の言葉も、嘘から始まった。

昴君は、優しい。優しいが故に、残酷だ。

残酷な嘘に、いっしょにつきあってもらうのは、あまりに痛い。

ところが、きつとそのうち壊れてしまう。
だから。

「……さよなら」

私を、君から解放してくれ。君も、私から解放してあげるから。

昴君。

女の子のからだに触れるのだから、そのうち、やなぎん以外も好きになれるかもしれないよ。でもそれはきつと、私じゃないね。

あなたにとって、私はきつと、罪悪感から義務のように大切にしなければいけない女の子の子のはずだから。そんなのは、おかしいからおかしくなっちゃうから。

さようならと、言おう。

「おはよう」

「……おはよう。あんた、顔色悪いわよ」

大丈夫なの？と、眉間に皺を寄せながら言うあかりに、私は問題ない、と首を振った。

月曜日の朝に開口一番友から言われたせりふに、少し苦笑いを浮かべてしまう。

教室はまだ人もまばらな時間。相変わらず私もあかりも登校時間が早い。

「ちょっと熱を出して週末寝込んだのだけれどね。すっかり完治したよ。たくさん寝たし」

「そう。あら、風邪なんて珍しい」

苦笑しつつ、風邪と言うか知恵熱だろうけれどもね、と心の中で呟く。あんまりにも慣れない事を考えたもんだから、脳が許容量を超えてしまったのだろう。

「ねえ、あかり」

「なによ」

「……いや、ごめん、なんでもない」

「？ 言いかけてやめるなんて気持ち悪いわね」

やなぎんのこと、なにか印象は変わったか、と訊こうと思ったけれど、やめた。なんとなく、自分がずるい気がしてしまって。

訊いたあと、どうするつもりなんだろうか、私は。ひょっとしたら、昴君が失恋するかもしれない事態になったら、とか期待しているのだろうか。

そうになったら、私は、弱ってる綺麗な昴君をなくさめて、どうするのだろうか。

手籠めにでもする気か。いや、私は女だ。更に言えばどちらかというと私のがされたほうだ。そんな、その、ものすごく無理やりとかではなかったけれど、強引なものにはかわりはなくて、でもなんというか手馴れた感があつてなんか昴君てひよつとすると遊び人なのだろうかと疑わなくもない、じゃなくて。

とにかく。そういう行為はよくない。

なるべくならば、自分に誇れる恋がしたい。

思っただけで恥ずかしい。なんだこれは、まさしく青い春という言葉ではないか。というかうまいこと作るな、昔のひとは。

よく言ったもんだ、青春だとか思春期だとか。春というのは、そういうた不可思議な、なおかつ形容しがたい若い葛藤を端的に表すにはなんとも適した言葉である。

「あら、ちー。出入り口の所に佐藤君いるわよ」

ぼんやりとどうでもいいことなのか重要な事なのかよくわからな
いがとにかく考え込んでいると、あかりの口からとんでもない言葉
が聞こえてくる。

気付けば私は、勢い良く席を立っていた。

「！ ちょっと私ご不浄」

「は？ 今時ご不浄って」

ぼかん、とするあかりを残し、私はちらと昴君が後方の出入り口
に立っているのを確認すれば、前の扉から走って教室を飛び出した。
廊下も、全速力である。

途中、叱責するような声が聞こえて、おそらく廊下を走るな、と
いう言葉だったと思うが、そんな場合ではない。私は、とにかく今、
昴君から物理的に離れなくてはいけないのだ。

「……つておい」

気付けば辿り着いたのは、四階にある女子トイレ。我々二年の教室は二階なのに、一体全体どこをどう走ってきたのやら。

いや、そもそもそういう問題ではない。重要なのは、昨日、さよならすると決めておきながら、話をせねばならない張本人から逃げてしまったという事実である。

しかもあんなにわかりやすく避けるとは。どういう了見なのだ。今から教室に戻って、釈明しなければあらぬ誤解を抱かれる。誤解。

でも、私が昴君から離れたがっているのは事実といえは事実で。いやでもこんなことをすれば昴君は疑問に思うに決まっている。優しい彼を困らす真似は、できればしたくない。

「……も、戻るか」

心に決めて、恐る恐る来た道を戻る。

ああ、なんだろうな。なんでこうなんだろう。肝心な所で、根性を見せられないだなんて。こんなに情けない女だったなんて、ちょっと自分にがっかりだ。

落ち込みつとばとばと教室まで戻ると、クラスには昴君とやなぎんがあかりを囲んで仲良く談笑していた。

「……やなぎん、昴君、おはよう」

力無くあいさつをすれば、ふたりが微笑んであいさつを返してくれる。しかしやなぎんは元気いっぱい、昴君は静かに微笑みつつ、であるが。

何人かのクラスメイトが彼らを囲っているが、その中のひとりが勢い込んで私に声をかけてきた。あまりのことに一瞬仰け反る。

「野田さんと横田さん、どうしてふたりと仲良いのかと思ったら！お兄さんとお姉さんが結婚するんだね！びっくり！」

「え、ああ、そうなんだ。その繋がりで、昴君ともなにかと話すようになって」

「そうだったんだねー。私達、てっきり横田さんと高柳君が付き合っていたのかと思った」

その言葉に、違います、と低い声であかりが囁く。不機嫌なのを感じ取ったのか、クラスメイト達は、ご結婚おめでとう、とどうでもいい祝辞を残しつつそそくさと席を離れた。

「……本当、君たちには感謝しないとね」

「別にあなたの為に私の兄も、高柳君のお姉さんも結婚するんじゃないのよ」

「そんなの当然じゃないか」

苛立ちをそのままに話すあかりと、それをやんわりとかわして微笑む昴君。うーむ、さしずめ虎と龍とでも言ったところか。

「そうだ、千絵子さん、体調大丈夫？」

「えっ、野田っち具合悪いの？」

「いや、週末に寝てすっかりよくなったから。ご心配ありがとう」

あはは、と笑う私に、昴君はよかった、と微笑む。やなぎんも、元気なのはなによりだよ！と彼らしい豪快さで笑った。

「あの、昴君」

「ん？」

「今日、お弁当作れなかったんだ、ごめん」

「ああ、そんなこと。全然気にしてないよ。購買で済ませるし」
「うん……」

少し視線をさまよわせる私に何か気付いたのか、昴君は一言出ようか、と告げると、席を立つ。私も慌てて後に続いた。

ざわつき始めたものの、かえって喧騒があるぶん会話は聞こえにくいだろう。それでも警戒心からか、私は声を低くして秘密の話をするかのように昴君に囁いた。

「しばらく、家に来るのを控えてほしいんだ」
「え？」

目を丸くする昴君に、私は慌てて首を振る。

「いや！変な意味じゃなくて。父と母もこれから少し帰りが早くなるんだ。お父さんはちよつと厳しい人だから、まず私から話をして一呼吸置いたほうが無難だし……それに、最近ちよつと家事がおろそかになってて。だから、働いてる両親が快適に生活できるように、私もいつも以上に家の中を綺麗に保てたらと思って」

「……そっか。そうだね、ごめん。いつも僕があがりこんでるから、掃除とかもきちんと出来てないよね」

「あ、いや！迷惑だったわけでは」

「うん、わかってる。でも、謝らせて」

「……うん」

「それと、少し寂しいけど、わかった。しばらく我慢するね」

「ごめん、ね」

「もう、なんで千絵子さんが謝るの」

いやだって。

離れたいのは確かだけど、こんな風に言い訳みたいなのは、本当半分、

嘘半分みたいなこと言って。

勝手に口をついてでる言葉に私は内心、狼狽しっぱなしで。

けれど、どこかで酷く安堵している自分にも、気付いていた。

ごめんね、昂君。

第13話

お弁当も、父親にきちんと話して承諾をもらうまでは堂々と作れないし、忙しいから無理だと思うと告げた。昴君は、苦しい私の話にどこか納得いかなそうな顔もしていたけれど、優しく微笑んでわかった、と言ってくれる。

今日は帰りも別々で、いよいよ私は彼から物理的に離れる手段を取っているみたいだ。

みたい、というのは、口から飛び出た言葉の数々に、誰よりも驚いていたのが私自身だったからなのだ。頭の中で彼から離れよう、と思って実行したわけではない。それなのにこんなこと言ってしまったのは、きつと私が彼に別れを告げたくないけれど、一緒にいるのは辛いというわがままな感情を抱いたからに違いなかった。

そんな、少し破綻してる私の言い訳にも、昴君は優しくうなずくだけで。

まあ、そうだよな。

昴君にとつての私の存在なんて、そんなちつぽけなもんなのだよな。あ、ちつと落ち込んできた。このままゆるゆると距離を置いたら、私たちは関係ない他人になっちゃうのかな。

きつと、今の私はものすごく卑怯だ。自然消滅を狙うなんて、いちばん傷付かない遠まわしなやり方。でも、昴君が最後まで優しい人だったとしたら、この方法はおそらくうまくいくんだろ。

不自然にならない程度に、徐々に、離れていけば。

きつとそれで、私たちはさよならになる。

「ただいまーつと」

誰もいない家の明かりを付けて、誰もいないはずの空間にあいさつをする。

普段は、慣れてしまっているから感じない寂しさも、今日はなにやら趣が違う。

「……面倒なもんだな」

苦笑して呟く。

なんだかなあ。恋をするって、好きなひとができるって、本当に色々面倒なもんだ。

せめて、少しでも嘘にならないように、最近さぼってた各部屋の掃除を徹底的にやろう。あ、でも一気にやると途端に暇になって、また妙な考えに傾きそうだしなあ。うん、小分けしてやろう。とりあえず今日は、リビング全体の掃除をやる事に決めた。

「今日はなんにするか……お父さんも帰ってくるしなあ」

出張から帰ってくるというも和食というか、あっさりしたものを欲しがる傾向にあるからな。今日はそういったメニューにするか。ふむ。

あれこれと頭の中でメニューを浮かべていれば、部屋に無機質な電子音が鳴り響く。

驚いて持っていたハンデモップを床に落としてしまったではないか。ふいうちのように考え事しているときに鳴るとはなんと非常識な。

ぶつぶつと完全にやつあたり気味に愚痴をこぼしつつ、私はダイニングテーブルに置いてあった携帯電話を手取る。電話だ。着信を知らせる画面が、発信者の名前を表示している。私は思わず固まった。

昴君だ。

どうしよう、いや、出るべきなのだろう。電話に出なくなるのは不自然だ。彼が気にしてしまう。

そうだ、あくまでも自然に距離を保たなければいけないのだから、露骨に避けてはおかしいことになるではないか。

7回ほど鳴ったベルの音にどぎまぎしながら、私はなんとか受話ボタンを押した。耳に電話を押し当てるのに、なぜこんなに緊張せねばならないのか。

「も、もしもし」

『千絵子さん？ごめんね、今忙しかった？』

昴君の声が耳元から響いて、私の心臓が不規則に揺れる。

前はなんにも感じなかったことも、恋というやつので、一喜一憂してしまうらしい。まったく、本当に面倒くさい。

私は内心ため息を吐きつつも、いいや、と昴君の質問に返事をした。

『あの、今日の話してくれたことなんだけど。放課後しばらく会えないのは仕方ないと思うんだけど、土日はどうかと思うって』

昴君の言葉に、またも心臓がおかしいくらいに跳ねた。

ああもう。彼は私の感情を揺さぶる天才だな。

それってどういう意味なんですか、訊いてもいいですか、理由を。なんでそんなに会いたがるの？昴君、何を考えているんだい。私とあなたは仮の恋人同士だろう。

君は、確かに仮とか考えたくないなんて言っただけでもさ。でも気持ちはそうじゃないか。好きだからいつしよにいるんじゃないのだから。友達だから？ただの友達と、そんな頻繁に会ってどうするんだ。学校であれこれと話をすればそれで済むじゃないか。

「……あの、ごめん。土日もちよつと、あまり頻繁に会うのはきついんだ。この前体調を崩しちゃったのは、言い方は悪いけれど休日

も出かけたりしたからだと思う。家事が忙しいあいだは、家で休んでいたいから。申し訳ないんだけど」

『……そう』

「その、迷惑なわけでも、嫌だったわけでもないんだ。昴君と過ごした休日はなんというか、とても楽しかったし」

慌てて言い募れば、わかってるよ、なんて昴君はくすくすと笑う。ああ、なんか耳がすごいくすぐつたい。

どんな顔して、今、彼は笑ってるのだろう。きっと、私の大好きな綺麗な顔なんだろうな。

ってだから。いかんよ、これじゃあ。いつまでも昴君を好きな気持ちを抱えたままでは、苦いものはいつまでも私の中に居座り続けるじゃないか。

楽になりたいのだろう、野田千絵子。ならば頑張りたまえ。

『そっか、わかった。じゃあ、また会えるようになったらすぐ教えてね？』

「ん、わかった。電話わざわざありがとう」

『とんでもない。僕が声を聴きたかったただけだもの』

ぬあ。

だからなんでそんな殺し文句を言うのだろうね、この男は。罪作りなやつめ！昴君め！君はあれか、スケを思うさまコマす性分なのかい。

無難に別れのあいさつを告げて、電話を切る。

大量に出たため息は、一体どんな成分が含まれていたのか。わざわざ考えずともわかることだった。

「あんたたち、落ち着いたのか冷めたのか、どっちなの」
「は！？」

頼杖を付いて世間話をする目の前のあかりに、私はすつとんきょうな声をあげた。

まだ教室内に誰もいないとはいえ、そんな通常の大きさで発している言葉なのだろうか、それは。

くそう、相変わらず鋭いな。傍から見たってわりと自然だと思っていたのだが。

「落ち着いたんじゃないのかね」

「ふうん？にしたって、一緒に帰るくらいはしてもいいんじゃないの？放課後に遊ばなくなたって」

「それは、そうかもしれないけれども。どうせ方向は反対なんだから、駅まで一緒に行くだけなのだよ？ならあまり意味ないじゃないか。15分程なのだし」

「あんたは良くても、むこうはどうなのかしらね」

あかりの言葉に少し首を傾げる。

別段、昴君は困っていないのではなからうか。だって、学校で会えば会話をするし、避けたりもしていないし。放課後は、まあ、なんとなく、並んで歩いたりしたくはないので、ちよつと足早に帰ったりもしているけれども。

でも、昴君も特に気にしてはいないようだし。何も言ってこないから、いいんじゃないだろうか。

我ながら、この作戦はうまくいきそうだ。徐々に前のような、少し遠い関係になりつつあるし、やなぎんは相変わらずあかりを訪ねてはくるけれども、お昼だって四人揃って食べていればそんなに彼を意識しなくて済む。

やなぎんと楽しそうにする昴君を直視するのは少し辛いけど、綺麗に表情を変化させる彼を見ていると、なんだか段々と潔くあきらめる決心もついてくる。

やなぎんは、あかりに夢中のようにだし、それはそれで、昴君にはせつないかもしれないけれど、私が存在した意味を、見出してほしい欲もあつたから、昴君の想いが成就ではなく、今の私のように良い形であきらめる決心ができたなら、と思っていた。

私の存在、っていうのは、女の子とこの先お付き合いをしてくれたらな、という意味だ。

昴君と私の始まりの理由は、昴君が女性に対する苦手意識を払拭すること、まあ一応今もそれは続いているわけだが私の中ではもう終わりを告げているわけで一応過去形で語っておく、だったわけだが、つまりは、私が彼の中の女性全般の意識を変えられたきっかけだったのならば、嬉しいじゃないか。

少しでも、私を君の心の隅に置いてくれ。そうして、この先、女性を好きになったとき、私との日々を思い出してくれたらいい。

それで、たったそれっぽっちのことで、私はとてもとても嬉しいな、と思う。

叶わなくていいから。隣にいなくていいから。

忘れてしまってもいいから。時折、都度思い出してくれたら、嬉しいなって。

こんなことを思う私は、案外、女っぽい部分があつたのだな、なんて感心する。いや、自分でそれを言っている時点でどうかとは思ふのだが。

まあ、いいのだ。

恋をしたことで、私はひとつ、成長できたんじゃないか。自己完結気味なのがなんともいだけないが、案外、弱くなってしまうのも恋なのだと知ったから。

「次はまあまあ頑張ろう……」

「何を？」

視界に入った綺麗な顔に驚いて、椅子から転げ落ちそうになるか

と思った。実際は、多少仰け反ったくらいだったのだけでも。まさか、ずっと頭の中で想いを巡らせていた相手が目の前に現れるとは。

前の席に座るあかりも、ずいぶん早いよね、なんて目を丸くしている。

「千絵子さん、横田さん、おはよう」

につこりと微笑んで昴君が発したあいさつを、私達もそれぞれ返す。それが終わると、何を考えているのか。

昴君が、座っている私の身体を立たせるように左腕を引っ張った。多少強引に腕を掴まれて、私はわけがわからず狼狽する。

「？ 昴君」

「ちよつと。部室に行こう、いいかな？」

「う、うん」

それならば、と鞆を掴んで、私は昴君にひかれて歩き出す。表情をうかがえば、怒っている様子はない。それとも、上手に隠してしまっているのだろうか。わからなくて、私は無言で彼に従うだけだった。

部室に入れば、当然だが密室で2人きり。簡単に是と頷いてしまったが、本当によかったのだろうか。今更後悔してももう遅いのだけれど。

ああ、せめてココアを買っておけばよかった。ポケットにチョコが飴なかったらうか。

そわそわと私が身体をまさぐっていると、昴君がどうしたの、と首を傾げる。私は慌ててなんでもない、と答えて、うながされるまま昴君と並んでソファに腰を下ろした。

「あの、どうしたの？」

「……もうすぐ、二週間になるよ」

え？なにが？

質問しようと口を開きかけて、やめた。昴君の顔が、先程とは打って変わって不機嫌に歪められていたからだ。

しまった。怒ってたのか。でも、何にたいしてなのかは今の私にはまだわからない。

「今日が木曜日。もうすぐ、千絵子さんの申し出を聞き入れて二週間になる」

「あ、ああ、そのこと。それがなにか？」

「なにか、って。僕たち、もう二週間も恋人らしいことしてないんだよ？」

いつもよりも多少低い声で話されると、なんだか艶っぽくてときどきするな。とか、呑気に考えてる場合じゃないんだよね。

でも私は、昴君がなんでそんなに不満顔なのがちっともわからないんだ。

「別に、学校ではたくさん話しているし、お昼ごはんだっていっしょに食べてるじゃないか」

「そういうことじゃない！僕は、もっと千絵子さんといっしょにいる時間がほしいんだよ！」

「なぜ？」

私の質問に、心底苛立ったように昴君が眼光を鋭くさせれば、乱暴な仕草で私を彼のほうへと寄せるように引っ張れば、私はバランスを崩して上半身を昴君にあずけるように倒れこんだ。

ちよっと、この、膝立ちになった状態、不安定なのだけでも。

昂君の膝と膝の間に私の左足があつて、右足はソファに乗つてゐる状態だ。見上げる昂君の顔は、なんだか怪しく光つてゐる。

「……千絵子は、平気なんだ」

「え、なに……！」

なんとか密着しないように踏ん張つたのに、昂君が背中を思い切り押してきたから、私はぺた、と膝を曲げてしまった。正座しかかつてゐたみたいな態勢は、昂君の太股がクッションになつて完全には折り曲げられてない状態になつた。しかし、先程よりも恥ずかしいことになつてゐる。

「やつ！」

唇を塞がれて、私を苛むような昂君の接吻に、久しぶりというのもあるのか、気持ちを認識してからはじめての行為だからなのか、多分色々要素はあつたんだろうけど、とにかく。

私は、前よりももっと反応を示してしまつたのだ。

「前よりもなんだか反応が良いみたい？」

昂君の言葉に、私はかつと熱が灯つたかのように顔を赤らめる。

耳元で囁かれて、そのまま耳全体をなぞられ、食まれる。背筋がぞくぞくするのを感じつつ、私が仰け反れば、昂君は離れる私の身体を抱きこむように、不安定だった体勢を変えようと膝立ちになつてゐた私の背中を引き寄せ、倒れこませればそのまま彼の上に座り込む形を取らされる。その間も、耳やうなじを触る動きは止まらない。

なにをされてゐるのかよくわからずに、されるがままになつてゐた。

「僕は、寂しかったよ、触れられない間」

「す、ばるく」

「そんな風に、潤んだ瞳で僕を見るくせに」

心はくれないの。

囁かれていた、その言葉に、私は反応を示せなかった。この時、自分の意識がどこにあるかも分からない状態だったからだ。でももし、このとき、私がきちんと彼の言葉を認識していたら、何か違ったのだろうか。あとから考えたって、それはただの後悔にしかないけれど。

「ねえ、千絵子。今度は、いつ会える？学校外でも会いたいって、わがままかな？そんなことないよね？恋人なんだから」

「そ、れは……」

「僕の事、嫌いになった？」

「！ そんなことあるわけ」

「じゃあ」

「あつ……す、昴君！」

耳を撫でられながら、昴君がうなじへと唇を寄せる。その行為にぞくぞくと背中が粟立って、あられもない声を上げそうになる。

「ねえ、二週間前に言ったことは、そもそも本当のことなんだよね？」

「あつ！」

「答えないと、これ以上のことをしちゃうよ？」

「！？」

言葉に、反応を示してしまった身体が、怖い。

自分で自分が、なくなってしまういそうで、怖い。
いやだ、やめて。

必死になって、昴君の言葉に答えようと頭を動かす。

「嘘じゃな…っ！」

昴君の愛撫から逃れようと必死に身体を擦って、答える。涙があふれてきて、もう彼の顔が良く見えない。

大好きな、綺麗な顔が。

「それじゃあ、いつになったらまた会えるようになるの？」

「そ、れは、な、んで？」

「どういう意味？」

私がかたにも受け答えできないとわかったからか、昴君の動きが止まった。私は呼吸を整える暇もなく、なんとかまた行為が再開されるより早く答えようと口を開いた。

「昴君と、私は、恋人かもしれないけど、恋人じゃない。好きって気持ちがない。なのに、どうして、会いたいとか、寂しいとか、そんなこと、言うの？」

「……つまりそれって、千絵子さんは僕と会いたくないってこと」

「そうじゃなくて、私は昴君がどういうつもりなのかわからないだけ！好きなんでしょう？やなぎんのこと。それに、これだけ私に触れるようになっただし、私はもう必要ない！」

「！ 本物の恋人になろうって言わなかった」

「そんなの、無理。わかってるんでしょう？昴君にだって」

「……は？」

「……もう、いいじゃないか」

眉間に皺を寄せたまま、半ば固まったかのように動きを止めた彼を見て、私はだるい身体をなんとか叱咤して身なりを整える。

決して早くもなく、むしろのろのろとした動きだったけれど、それでも昴君が待ったをかけることはなかった。ただ、呆然としている。

「やっぱり、こんなの駄目だったんだ」

「！ 千絵子」

「やめよう。もう、昴君は女の子を克服した。これから先、好きになるのが異性でも、同性でも、私は応援する。だから、友達でいいじゃないか」

「とも、だち？」

「……それじゃあ、私は行くから。ちよつと、保健室に行つて、寝てくる。昴君、申し訳ないけれど、あかりに適当に言っておいておくれ」

「千絵子、ちよつと待って」

近付こうとする昴君を、私は無言で腕を前にあげて制す。

昴君は、少し傷付いたように瞳を揺らした。

「頼む。後生だから、ここを踏み越えて、私に君を軽蔑させないでくれ」

目を丸くして息を呑む彼に、私は苦笑してうなずいた。

「恋人気分というのも、なかなか貴重な体験だった。ありがとう」

動かない昴君が少し心配だったけれど、私はそのまま部室をあとにする。

さよならは、結局言葉にできなかった。往生際が案外悪いな、私

も。

苦笑しつつ、私はふらつく足取りで一階を目指した。保健室ではなく、帰宅してしまおう。そう心の中で考えながら。

第14話

好きだと自覚してから苦しみしか待っていないというのも、少し寂しい。

はじめから、終わりがわかる始まりだったから、仕方ないのだけれど。

「おかえり、千絵ちゃん」

「……お父さん」

微笑んで、リビングのソファに腰かける父が、扉を開けた私に視線をやる。そうか、出張から帰ってくる日であった。本来ならば、先週の月曜日に母と揃って帰ってくるはずだったのだが。まあ、母は嘘であつたけれど、父は日数が延びてしまっただけなので、意図的なものではない。事実が発覚してからの母の落ち込みようはすごかった。いつまでも、両親は仲が良い。案外、一緒に過ごす時間が少ない方が恋人気分でいられるものなのだろうか。

色々と思い出して苦笑していると、新聞を読んでいた父が首を傾げている。私は、無言で首を振った。

「ただいま。父よ、出張中はきちんと寝てご飯を食べましたか」

「ちは、いつも同じ質問するなあ。少し不健康な生活だったけれど、無茶はしてないから大丈夫です」

「そうか。今夜は父の食べたいものを作ろうではないか」

私の言葉に、ついに読んでいた新聞をたたんでテーブルに置いた父は、先程の私と同じような笑みを浮かべて仕様がな、といった風情で頬杖を付く。

「体調が悪かったんじゃない、自主休校かい？」

やっと飛び出した父親らしい一言に私は微笑めば、父はため息を吐く。

ぽん、と隣の席へ座れと促すようにソファを叩いた父の手を見て、やがてそれに従った。

「もちろん、のっぴきならない理由があったから早退したのだよ」

「おやおや、それは穏やかじゃないね」

頭を優しく撫でる父の手の平が温かい。私は、不覚にもその感触に泣きたくなってしまうた。弱っている時に優しくされると、簡単にこころが揺さぶられてしまうものなのだ。

「……お父さん」

呟くように呼んだ私の声に、父はやわらかい声で返事をする。母があわてふためくたび、この父はいつも正しいほうへと導いていく。私はそれを見るたび、この男のような人間になれたらどんなに素敵だろう、と思うのだ。

「私、ちゃんと恋がしたかったな」

呟いた言葉は、何も考えずに口をついて出たもの。父親がそれにびっくり、と反応を示していたが、私は気付かずにはんやりと正面を向いていた。

「失恋するにしても、せめて、好きになっているあいだは、相手の気持ちかわからない状態にふわふわしていたかったなあ」

「……わかっていても、止められなかったんだね」

父の言葉に、私は無言でうなずいた。父が、微笑む。

「月並みな言葉だけれど、人を好きになるのは素敵なことだよ。今は、たくさん泣いて、たくさん休みなさい。だから今日は、もうおやすみ」

「でも、せつかなのだし買い物をして父の好物をたくさん」

「今日くらい、ただの失恋した女の子でいいじゃないか。お家を切り盛りするしつかり娘の千絵子さんは、本当はただの女子高生なんだから」

「別に、私は特別に頑張っているわけじゃないよ？」

「そうだね。でも、お父さんもお母さんも、日々、君に感謝の念は絶えないし、たまには何もせずにぼんやりする日があってもいいとお父さんは思うんだよ。それとも、何かしていたほうが気が楽しい？」

何かしていたほうが、か。

正直、今の状態で何かを始めれば、それにのめり込んですごく疲弊してしまう気がする。やっている間はいいかもしれないけれど、やることがすべて終わったあと、疲れた身体に暗澹たる気持ちを感じ込め、私はどうなってしまうのだろうか。

なんだかぞつとしてしまい、私は身震いして首を振った。父が、くす、と空気を揺らした。

「じゃあ、おやすみ。少し休んで、ちーの目が覚めたら、いっしょにごはんを食べようね」

「……ありがとう。おやすみなさい」

立ち上がって、リビングの扉を閉める。普段は温厚な父の顔がこのときどんな様相を呈していたのか、どれだけ低い声でその言葉を

呟いたのか、とか、私にはわからなかったけれど。

「……俺と奈緒子の宝物を泣かせた馬の骨は、どこのクソガキだろうね」

ただ、その言葉が放たれたのは、どうやら事実のようだった。後々、その脅威を思い知るのであるが、それはまあ、もう少し先のお話だ。

リビングを出て部屋に入り、私は手の平におさまる青い音楽プレイヤーを握って、ヘッドホンを装着した。かちやかちやと手元をいじって、小さなおもちゃ箱におさまる音楽がすべて順番に流れるように、しかしその順番は不規則になるように設定する。

予期せぬ音が流れると、少しのわくわくと、それからしばらくして安心を感じる。

何が流れるかははじめわからないけれど、元々はそれをここに放り込んだ自分がいるのだから当然のように知っている音なのだとわかるから。

自分の好きという気持ちも、こんな風ならばよかったな。

最初は、わからないところに戸惑った。人を好きになるのがどういうことなのか、よくわからなくて、これがそうなのかな、ちがうのかな、と柄にもなくどきどきした。けれどもそれが過ぎると、それまでの時間で築き上げた相手の色々な面を再確認して、ああそうか、そうなんだ、ときちんと自覚することができた。後は、流れる音楽に心地よさを感じるように、私も、彼といて心地よい空気につとふわふわと漂っていたかった。

けれど。

思い知った。

昴君は、私を好きではないのだ。私が、彼を好きであるように、昴君も私を好きで、だからこそ恋人同士になったのだとしたら、ど

んなによかったろう、幸せだったろう。

昂君にとつて、私は、すこしでも特別だったかい？すこしでも君の中に、私はいただろうか。

気が付けば流れる涙を、しかし無理に止めようとは思わなかった。泣いていいよ、と、父が言ってくれたから。

たくさん泣いて、また出直そう。

昂君といっしょにいるのはしばらく辛いかもしれないけれど、きちんと友達に戻るように、努力しよう。

協力すると言ったのも、勝手に好きになったのも、すべて自分の責任だから。

せめて、優しい彼が私によって傷つくようなことはありませんように。

「……優しい、か」

はて。

ここで少しの疑問が頭をもたげる。

ヘッドホンをひっぺがし、私はプレイヤーの停止ボタンを押し、ベッドにそのまま投げ出すと、身体を起き上がらせて階下へと勢い良くおりていく。おっと、足を踏み外しそうになった。

リビング扉を力任せに開くと、父が驚きに目を見開いてかたまる。私は無言で冷蔵庫まで辿り着くと、同様の勢いでそれを開いた。

む、牛乳がない！

「……父よ、私はちよつと出てくる」

「え、千絵子」

「いつてくる！」

ばたばたと慌しくマフラーを適当に巻いて外へ出る。財布はもった。戸惑う父の声も無視して出てきてしまった、父よ、すまん。

とにかく糖分摂取しようと家を飛び出してきたけれど、どうしようかな。

せっかくだし、どこかお店にでも入ろうか。思案して、しかしあまりそういう気分にもなれない。ふらふらと歩いて、気付けば駅前近くの公園まで来ていた。

大きくも小さくもないそこは、いつか昴君と訪れた公園と少し似ている。遊具もないわけではないけれどそれほどあるわけでもなく、なんの変哲もない普通の公園。なんの因果か、時刻もちょうどあのときのように夕日がぽっかりと浮かぶ頃になっていた。

ため息を吐き、マフラーをしつかりと巻きつけた私は、自動販売機まで歩いてホットココアを購入した。派手に音が鳴って、駅まではもう少しあるから割と静かな環境のここは、余計にその音が大きく聴こえた。

騒音を出している気分になって小さくなりつつも、かしかしとひつかいて飲み口を開きながらベンチへ腰掛ける。

糖分を脳に届けると、気のせいでもなんでもとにかく活発に動いている気分になって、私は思考をめまぐるしく回転させはじめた。

「……やっぱり、ただの優しい人じゃないよね」

そもそも、けっこう酷い男じゃないの？ 昴君で。

あらやだ、今更気付いちやった、この子！ ではなくて。

少し混乱しているのか、興奮しているのか。とにかく落ち着いて今までの出来事を整理する。

「そもそもー、私を好きでもないくせに恋人にしてー、数々のセクハラ行為をしてー、最初は限定でお付き合いみたいなこと言ってたくせにやっぱり関係続けようって……もしかして女の身体に目覚めたんじゃないのか？」

むづ。

眉間に皺を寄せて考えてみても、それがなんだかいちばんしくりくる。もしかしくなくても、私ってば途中から身体目当てみたいにされていたんじゃないのか。

そうだよ！

なんとなく、やなぎんの言葉と今までの昴君の手馴れた感じと端々の言動から察するに、彼は案外乱れた生活とやらを送っていたにちがいない。

女性と交際したことはなくとも、それなりに経験はあるのかもしれないし、男とはそれこそ大変な経験をしているのかもしれない。そう考えると、つまり後腐れない関係がベストで、しかしそうするには年上を相手にするしかない。

昴君は、同じ年の、しかも女の子に興味を抱いている所があったんじゃないだろうか。だからこそ、あんな提案をしてそれを飲み込むお人よしを探していた。

まんまとみつかった私は、ずるずると昴君とあんなことやこんなことをし……いやいや。

さすがにそこまで悪い男だと考えるのはこころが痛む。仮にも好きになった人なのだから。

やなぎんへの想いは、本当だとしても。女の子への興味も、やはり本当だったのかもしれない。だからこそ、私みたいに絶対に彼を好きになる可能性のない相手をみつけて、普通のデートみたいなことをしてみたかったのかもしれない。

「……ひよつとしたら、やなぎんと遊んだらこんな感じなのかな、とか、そんなこと思われていたんだったりして」

口に出して笑って、あまりにも大きい可能性にかなり憂鬱になった。そうか、私は、擬似恋愛の都合良い相手だったというわけか。その過程で、少しでも私に情をうつしてくれたら、可能性もあった

のかな。

なんて。私も往生際が悪い。

「でも、そうか」

なんだか、そこまで考えて、多少すつきりした。今度会ったときには、ちよつとした意地悪でもしてみようか、なんて気にはなるくらい。

そうだよ。昴君は優しくかったかもしれないけれど、私を大切にしてくれていたわけではないんだ。そもそも、あれだけ好きに扱われて、優しいもないよな。そこに気付かないってちよつと盲目すぎたんじゃないのか、私。

思考が纏まった頃には、すっかり陽が傾いていた。

「言つたでしょう。千絵子はいませんよ」

「でも、今日、具合が悪くて早退したって」

「さあ、知らないな」

家路に着いた私は、もやもやとすつきりという両極端のこころを抱えながら、しかし部屋を飛び出す前よりは格段に精神が楽になったと感じていた。

その角を曲がれば家が見えてくる、というところで、聞き慣れた声が耳に届く。思わず足を止めた私は、そつと顔だけ出して様子をうかがった。

視認したそれに間違いがなければ、あれは。

昴君だ。昴君がなぜ家を訪ねてきたのだろう。十中八九、私に用事なのだろうけれど、門から出てきた父は、隙のない笑顔で腕を組みつつ昴君をみつめている。会話から察するに、家の前で押し問答をしているようだ。

ここで私は首を傾げる。だって、父が昴君を家にあげない理由が

わからないのだ。きっと昴君は、お見舞いに来た友人です、とか、そういうことを言ったに違いない。だったら、ありがとう、と言って家にあげるのが本来のはずだ。

私は、このままの位置でしばらく様子を見守ることにした。

「千絵子さんが、会いたくないと言ったんですか？」

「君は、千絵子に門前払いをくらう心当たりでもあるのかい？」

父よ、その返しはどうかと思うが。ああ、昴君が珍しくむっとしている。

「そんなことはありません」

「そう？ だったら私の言葉を疑う理由がないのじゃないかな？ お友達なら、携帯電話の番号くらい知っているんでしょう？ 連絡したらどうかな？」

「メールを試みたんですけど、返信がないんです。中で待たせてもらえませんか？」

「申し訳ないけど、私も少ししたら出かけなければいけないからね。今日の所は、お引取り願えるかな？」

「……つまた来ます」

唇を噛んで、やっとあきらめたのか昴君がこちらへと歩いてくる。歩いてくる？

まずい、このままではみつかってしまうではないか。

あたりをみまわして、向かいの家の駐車スペースに目をつければ、私は素早く奥へと隠れた。息を殺して、昴君が通り過ぎるのを待つ。彼のうしろ姿が見えなくなるのを確認して、私は家へと向かった。玄関に入ろうとしていた父の背中へ声をかける。

「ただいま」

「！ おかえり。ひょっとしてどこかに隠れていたの」

目を丸くした父は、次には優しく微笑む。私は、そんな父の目をじっとみつめた。

「……父よ、ありがとう」

「お礼を言われるようなことはしていないよ」

寒いからお入り、という言葉に、私はうなずく。
昂君。

どうして、去り際のあなたの表情は、哀しそうだったのだろう。まるで、何かの苦しみに耐えるみたいに。

私の言葉は、昂君のところにどう届いたのだろう。
考えても、もちろん私にはわからなかった。

第15話

次の日が金曜日というのもあり、休みたい、という気持ちは少なからずあった。けれども、露骨にさけたところで、いずれ顔を合わせる事実が変わらない。むしろ、色々と考えをまとめた結論は、変に逃げるべきではない、だった。

よく言うではないか。逃げる者を追いたくなる、と。それが昴君に当てはまるのかはわからないが、昨日から一転、私は自身の幸せを優先しようと決めてしまった。

開き直るの早いね、と自分に語りかけてしまったが、だって色々考えて冷静になってみたらそう思うじゃない、さんざんいかがわしいことをされたのだから。ではなくて。

まあ、つまり。

いちばん無難なのは、「良いお友達でいましょう」ということなのだ。そうすれば、変に距離が開くことはない。恋人としか出来ない行為をしない限り、彼の隣に立つのは、少し辛いかもしれなくとも、いつか心穏やかに過ごせる時来よう。

私は、多少晴れやかな心持ちで、家をあとにした。いつもよりも登校時間が遅いのは、朝つかまりなくなかったというのは否定しない。だってさすがに、もう拉致されるのはかんべんなのだ。あれでけっこう押しが強い昴君は、怒ると怖い。昨日の父との一件もあるから、苛立っているかもしれないし。

なんだかんだ、理由を付けては彼と会う猶予を延ばしているのだと、私自身気付かないではなかった。けれどそれくらいは許してほしい。

色々考えて、気付いて、悶々と燻る想いはあれど、私は失恋仕立ての女なのだ。失恋相手に会うのは、どんなに図太い人間だって、辛さはともなうものである。相手が、私を嫌いなわけではないのならばなおさらのこと。

たとえば。

昂君から、再度お付き合いをしたいと言われてしまったら、私は彼を今度こそ軽蔑するだろう。だから、笑ってほしい。これからは改めて、友人としてよろしく、と。そうすれば私は、辛い気持ちをしばらく引きずってしまっても、晴れやかに失恋することができるのだから。

好きになったからといって、勝手に理想を押し付けるのは、間違っている。本来の彼がどういった人間なのかも、きつと私は不足が過ぎるほど把握できていないのだろう。しかし、彼にこれまで触れた優しさが、すべて欲望に因るものであつたとしたならばと考えると、新しく芽生えた私の中のなにかが蹂躪されてしまった気分になる。

すごく、身勝手なのはわかりきっている。けれども、もう、がっかりしたくないんだ。昂君を綺麗だと感じた私を、私に否定させないでほしかった。

まあ、全部結局は憶測で、実際問題、昂君が本当に女性の身体に興味が沸いたのかはわからない。どういう意図で私の身体に触れたのかも、いまだわからないのだし。さすがに、最初に話してくれた女慣れをするためというのは、どうにも無理がある気はする。だって、平気そうに触っていたし。

それとも、私は女性に値しない存在だったのだろうか。ペットというか。なんというか。それはそれで少し傷付くな。

まあ、あれこれ考えても仕方がない。とにかく、彼が友達を受け入れてくれたのなら、私も過去をうだうだ言うのはやめてしまおう。そう決めた。

思考をあちこちにとばしつつ教室へ訪れた時は、遅刻の瀬戸際という時間で、どれだけゆっくり歩いてきたのだろう、と多少自分に呆れたのだった。

「野田っち、だいじょうぶなの？」

「やほー、と言ってこちらに手を振るやなぎんに、私も手を振り返す。教室に入っただけで女子の注目を浴びるとは、相変わらず目立つ二人組だ。」

「おかげさまで。昴君、父から聞いたよ、お見舞いに来てくれたたつて？」

私が振り返って微笑むと、昴君は多少戸惑いを見せつつも微笑んだ。どうやら、私が普通に接しているのが意外なようだ。ちよつとにんまりしそうになる。私ってあばずれじゃなくて悪女なのかもしれない。うつむ、なんとも官能的な響きである。決して官能的な成分は含まれておりませぬが。

しかし、昼休みではなく間の休憩時間に来るとは意外だ。すぐ終わってしまうのにな、10分なんて。

「……お昼ごはん、いつしよに食べられる？」

「うん？もちろん。最近はそれが日課じゃないか」

訊ねる昴君に首を傾げて、なぜそんなことを問うのか、といった風情で言う。完全に面食らったのか、昴君はそう、よかった、と呟いた。

去り際、昴君がなにかの痛みを堪えるような顔をしていたのが少し気になったけれど、声はかけずにそのままわかれた。

「……ふうん」

「？ どうした」

「どうした、は私じゃないでしょ。ま、せいぜい頑張ることね」

「ありがとう」

「あんたじゃないわよ」

にやり、と男前な笑いかたをしたあかりが発したその意味が、私はまるで理解出来なかった。じゃあ誰が頑張るのやら。

というか、何を頑張るのやら？

「あかり、ちよつと良く女子が集う場所に行ってくる」

「……はいはいトイレね、じゃあ私は先に図書室で席取っておくわ」
「かたじけない」

四時間目が終わり、あかりは特に昴君たちを待つことなく、まあ彼女らしいが、いつも通り図書室へと向かった。寒いとんだかトイレが近い。女性は特に色々冷やしちゃいけない。女子高生が言うのもなんだけれども。

そうなんだよな。私は特別に足を出したいわけでもないのだけれど、こうしないと悪目立ちしてしまうのだよな。

よく、物語なんかで見かけるんだけど、目立たぬように優等生でいるように、とやたら校則に忠実な服装をする主人公がいる。けれども現実あれをやったら、目立って仕方ない。私立ならばまだ厳しい校則もあるだろうからちよつと真面目な子扱いでそれこそ済むかもしれないけれど、ここみたいな公立高校でそれやってしまったら、生徒どころか教師からも妙な視線を寄せられるのは必至である。

というわけで、没個性でいる為には結局、一般的な女子高生を連想する格好をしなければならぬのだよね。だからこういう姿に落ち着くのも。

これは、私の中で情性なのだ。いうなれば、家でのジャージといつしよ。楽だからこの格好なのだ。もしもこだわりのあつて、確固たる意思を持っているならばそれに従った服装もしていたのだろうけどな。あいにく私は特別目立ちたいわけでもなく、特別こうだった格好が好きやら嫌いやらもないので、まあ、平凡がいちばんと

この足を強制的に出す丈のスカートを履いているわけなのだがね。
と、そんなくたらないことをたらたらと頭の中でこぼしつつ、私はトイレへと向かうわけなのだけれども。ううん、廊下はなんとも冷える。

「昂ー」

「なんだよ」

トイレへの入り口である扉を開こうと手をかけた瞬間、廊下を歩く声が聞こえる。昂、という言葉に反応して思わず身体の動きを止めてしまった。

廊下側とは向かい合って水道が位置しているから、そこで手を洗っているふりをして少し屈めば、おそらく私の姿は見えない。このまま、盗み聞きすることも可能だ。

少しの葛藤があつたものの、卑怯な自分が顔を出した。

「野田つちと、なんかあつたでしょ」

「なにかつて、なにかな」

「言葉遊びして誤魔化すのーしー。ひよつとしてフラれた？」

不機嫌な昂君の声と、笑い声混じりに響くやなぎんの声。廊下を歩いているのはふたりだけだが、教室内にはたくさんの生徒がいる。あの2人の会話つて、なんとなく聞かれてしまいそうな気がするのだけれど、今の内容は大丈夫なのだろうか、と少しはらはらした。

やなぎんの質問の後に数秒の空白があり、やがて鈍い音が響いた。これは、ひよつとしなくとも昂君がやなぎんに暴力行為をしたのだろうか。あまり想像できない姿だ。いや、見えてないけれどもね。

「元々、始まってなかったんだよな」

ため息混じりの言葉に、私はどきりとする。同時に、胸が軋んだ。そうだ。私たちは、そもそも始まってすらいなかった。しかし当然ながら、昴君の発言にやなぎんは納得できずに、疑問を口にする。

「は？……だつてオツケーもらつたから付き合つてたんでしょ？」

「……あれは、詐欺みたいなもん」

「はあ！？」

「だから、片想いから進展なんてしてないんだよ」

え。

ちよつとお待ちなさい。今なんと？

「おい、詳しい経緯ちゃんと教えてよ」

「まー、お前も巻き込んだみたいなものだし……そうだな、後で話すよ」

ふたりの足音と、話す声が遠ざかる。私は、何のためにここに来たのかも忘れて、その場に棒立ちになった。まるで根が生えたかのように動けない。

今の会話の意味は、一体、どういうことなのだろう。

ちよつと、と、非難がましい声が耳に届いて、私はやっと手洗い場から身体を動かした。すみません、と小さく不機嫌な女生徒に謝罪する。

用も足さないまま、ふらふらとトイレの出入り口から廊下に数歩移動して、私は間抜けな顔で壁に背中をあずけた。

片想いつて。

昴君、そう言っていたよね。

「知ってたの……？」

私が、彼を、好きだということを、知った上で、私と、付き合っていたの？

いつから？ひよっとして、私が自覚する前から？それとも。ああもう。そんなことどうでもいい。

私は、恥ずかしかった。なぜなのかわからないけれど、恥ずかしくて、顔を真っ赤に染め上げながら、ぼんやりと涙が滲んでくる。悲しくて、恥ずかしくて、でも悔しくて、私は唇を噛んだ。

からかっていたのか？だから、私にあんな行為を？弄ぶように、あざ笑っていたの？私が信じた彼の優しさは、すべてがまやかしかけなかったのだろうか。

ひどい。

ちがう。

でも、それでも。

勝手に期待して、勝手に失望して。ばかみたいだと、わかっているよ。でもさ。

どうして、現実をそう突きつけるのさ。せめて、優しい君の幻想を信じていたかったのに。少しでも、やなぎんを好きだと苦しんでいる昴君の誠実さは、本当だと、信じたかったのに。ひよっとして、苦しんでさえいなかったの？おもちゃを探していただけだったの？わからない。ぜんぶわからないよ、昴君。

「ちーちゃん？」

目の前が暗くなって、しまいには座り込みそうになった私に、知った声が降りてきた。反応した私は、ゆるゆると顔をあげる。

「……まー、くん？」

涙が滲んできているからか、視界がぼやけてみえないけれど、確

かにそこに立っているのは、まーくんだ。

高木正浩は、私の従兄弟である。母親の兄の息子が、まーくんたかぎまさひろだ。中学に上がってから交流がなくなっていたけれど、同じ高校に入学したとき、改めて私たちは言葉を交わすようになった。時折、家にも遊びに来る。

彼は、父と似ている。というか、おじさんも父も同じように性格が穏やかだからだろう。血筋といえるかもしれない。あと、女性には優しくするように、というのが父とおじさんの教育方針であるらしかった。

でも、おじさん。彼は、罪作りの男に成長しようとしています。私のことを好きなのもかもしれないと期待する女子が彼の周りには多すぎるのだよな。と、そんなことに思いを馳せてどうする。今はものすごく関係ない。

でも、驚いたことに思考はそんな彼のプロフィールを長々と紹介していたくせに、私の涙は止まらなかった。むしろ、身内に会った気安さからか、必至で食い止めようとしていた涙があふれてきてしまったのだ。

「ちーちゃん、大丈夫？ね、歩ける？」

「だい、じよぶ。まーくん、ごめん」

「……具合悪い？どこか痛い？」

首を傾げながら私を覗き込むその姿が、ひどく優しく、父を思い起こしてしまって、よりいっそう甘えるような心が芽生えてしまう。いけないとわかっているのに、ついには嗚咽までもれはじめてしまった。これじゃあ、まーくんが私を泣かせているみたいな図になってしまう。

私は、ここから立ち去つてと言おうとしたけれど、それより先に、彼が行動に出た。

ふわり、と。

私の身体が地面から浮いた。

「とりあえず、保健室行こう？無理に涙は止めなくていいから。恥ずかしかったら、俺に顔を隠してていいよ」

「まーくん……ごめ」

横抱きにされた状態で、近くなった彼の顔をみつめながら涙を流せば、まーくんが困ったように笑った。

「こんなちーちゃんほつとけるわけないんだから、謝らなくていいの」

すっかりつかまってね、というまーくんに、私はうなずいた。

最初はそのままの状態だったけれど、恥ずかしさが増して、結局少し移動したら私はまーくんの服に顔を埋めてしまった。周囲からの視線はきつとすごいことになっているに違いない。

まーくんは、昴君や、やなぎんのようにすぐ目立つ人ではないけれど、熱心に好きだと言う女の子はいつも一定の数いて、高校に入学してからそういう人々に従兄弟だと認知してもらうまでが大変だった。

今回、こんな目立つ行動をしてしまって、まーくんにそれこそ迷惑をかけなければいんだけれど。

ぐるぐると色々と考えていたら、まーくんに声をかけられる。

「ちーちゃん、携帯電話は持ってる？あかりちゃんとお昼ごはん取るつもりだったよね？鞆の中なら先に保健室へ運んだあと、俺が鞆を持って来ようか？」

顔を上げると、教室の前だった。トイレからまだそのくらいの距離しか歩いていなかったのか。

私は大丈夫、と声をかける。

「というか、少し落ち着いたから、下ろしてくれていいよ、ごめんね、まーくん。鞆、今取ってくる。……あの、ついでにちょっと甘えてもよいかな」

少し、混乱しているから第三者の意見を訊いてみたくなって、私はまーくんへと視線をやる。微笑んで、もちろん、と言ってくれる彼は、今から包容力たっぷりだ。きっとまーくんの彼女は幸せなのだろうな。

「千絵子！」

まーくんの腕の中から出て、私がきちんと自分の足で立った瞬間だった。廊下中に響くのではないかというくらい大きな声で名前を呼ばれた。

前を向けば、そこにいたのは、昴君だ。なぜかものすごい形相でこちらを睨んでいる。

「……まーくん、鞆を取ってくる」

「わかった。でも、彼はいいの？」

「今は、いい」

「そっか……うん、わかった」

昴君の存在を無視して教室に入った私を、彼は追いかけようとした。しかし、私が鞆を取って振り向いた時には、昴君がまーくんに待ったをかけられていた。

につこりと微笑んで、まーくんが昴君にゆっくりと声をかける。

「そんなに恐い顔をしたら、逃げられちゃうよ」

「！ ごめんね、ちょっと今余裕がないんだ」
「そうだね、そうみたい」

どちらかというと同系統の柔らかい顔、物腰のふたりが並ぶと、
眼福だといえなくもない。

しかし今はそんなことどうだっていいのだ。

「まーくん、お待たせ。 اینجا」

「うん」

「千絵子さん、僕らとお昼を食べるんじゃないの？」

昴君の言葉に、私はなるべく無表情にならないように頑張って微笑んだ。

「ごめん、ちょっと彼と話したいことあるんだ。 あかりにも伝えておいて、まーくんといっしょだって言えばわかるから」

「……まーくん？」

眉間に皺を寄せて繰り返す昴君に、呼ばれた本人のまーくんがにっこりと微笑む。 その表情が気に入らないのか、昴君はますます不機嫌そうな顔をした。

私は、まーくんの手を取って、昴君にじゃあね、と声をかける。

「ちーちゃん、本当にどこも具合悪くないの？」

「大丈夫だとも。 私にお昼を抜かせと言うつもりなのかい？」

「いや、そんなことはないけど」

笑い合う私たちのうしろ姿を、昴君がずっと睨んでいる。

振り返って見たわけでは決してないけれど、間違っていない気がした。

第16話

「ちーちゃんって、佐藤君と付き合ってるの？」

腰を落ち着かせたのは、写真部の部室。ここは鍵が四六時中解放されているのだが、いいのだろうか。部員であるまーくんは、大丈夫だよ、と柔らかに微笑んでいた。

文芸同好会よりは幾分か広いものの、ここもそこまでの規模ではない。部員数がぎりぎり部として存続できる人数であるから、扱いはそこまで変わらないのである。

そしてパイプ椅子に向かい合って座り、長机に弁当を広げたところで、冒頭の質問を投げかけられたわけであるが。

私は一瞬思考がかたまり、全身に緊張が走った。

強張った全体をほぐしたのは、校庭から響く喧騒だった。

我が同好会にあてがわれた部屋と決定的に違うのはこれ、窓があることだ。四階であるため不便といえばそうだが、閉塞感と比べればこちらのほうがやはり良いと感じる。豆粒ほどの生徒をながめ、真冬だというのにサッカーやらバスケットやらをする彼らをみつめ、元気だな、と呑気に呟いた。

それから。

私は横に向けていた顔を真正面へと戻す。少し真剣な顔をしているまーくんと、目が合った。

「……付き合ってたないよ」

「ふうん？でもそういう雰囲気だったじゃない？」

「？時にまーくんはわからないことを言う」

「わからないのはちーちゃんだよ」

くすくすと笑うまーくんに、私はますます首を傾げると、次に彼

はため息を吐く。それは、誰に向けたものなのか。この場合、やはり私なのだろうか。私の何に呆れたのだ、まーくんは。いいかい、と言って、まーくんは自身の瞳を指し示した。私はその仕草につられて、彼の瞳に何かの答えが隠されているのかと思っ
てじつとその奥を探ろうとする。

「佐藤君の、俺たちをみつめる目。どんな風だったか、覚えている？」

まーくんの言葉は予想外で、しかし答えの知りたい私は、素直に先程の昴君を反芻してみる。思い出した次の瞬間、怖くなってぶるり、と身震いした。

私の反応だけでじゅうぶんだったのか、目の前のまーくんが微笑んで頷いた。

「わかったでしょう？完全にあの瞳は俺をほってその男とどこへ行くつもりなんだ、っていう目だったじゃない」

「……だって、でも、昴君とはもう、恋人でもなんでもないのに」「もう、ってことは、やっぱり付き合っていたんだ？」

「うーん……付き合っていたと、いうか」

私は、悩んだけど、まーくに話す事にした。ただ、体の関係の部分はさすがに省いて。女性というものがどういった生き物なのか。それを知りたくて、時間を共有しているのだと、そんな風に説明する。

最後まで話終わって、昼食も食べ終えた頃、まーくんは微笑んでいた。

笑みが強すぎて、少し怖い。

「……馬鹿なことを」

「え？」

何を言ったのかよく聞こえずに、訊ねると、まーくんはなんでもないよ、と首を振る。

「ちーちゃんは、佐藤君が好きなんだね」

「……うん。だから、傍で見ているのが辛くて、さらに不毛だと思つて、終わりにしたんだ」

「賢明だね。流されなかったのはえらい」

手を伸ばして私の頭を撫でるまーくんに、私は複雑な表情で返した。

ほめられるようなことをした覚えはまるでない。結局、最後まで彼の面倒を見きれずに投げ出したのは私だし、最初から彼を受け入れなければこんな捻じ曲がった関係は出来上がらなかったはずだ。しかしまーくんは、もっともらしく、彼がそんなややこしい提案をしなければ良かった話だ、と指摘する。

確かに、昴君はややこしいかもしれない。ややこしいし、案外素直ではなくて、私は彼の本音が、いつも薄皮一枚のところ止められてしまっている気がした。きつと、いちばん肝心な部分は、いつもはぐらかして答えてくれなかった。だからこそ、彼の真実を知りたいのにわからなくて、でもわかったらと思うと怖くて、私はあきらめてしまったのだ。

「ちーちゃんは、この機会に彼を客観的にみつめる必要があるんじゃないかな」

「客観的に……みつめる？」

「ほら、たとえば。なぜ佐藤君は、俺とちーちゃんを睨んでたんだと思う？」

「……お昼をいっしょにとるはずだったのに約束を反故にしたから

？」

私の言葉に、まるでナンセンス、といわんばかりにまーくんが首を振る。彼の背景からはやれやれ、という文字が見えそうなくらいわかりやすい身振りである。

いや。

自分でもこの答えはないよなあ、って思っただけでもね？だって他になにがあるのだろうか。

もっと予想外な何かなのだろうか。

「……まーくんが好みのタイプだったのかな」

「……いや、うん、いいけど。彼はそんな浮気性なの？」

呆れを通り越して戸惑いすら見せているまーくん。いや、わかってるってば、これもないよね。

それでも一応、まーくんの言葉に答える。

「わからないけど、やなぎんの話では軽いお付き合いを幾度もしているようだ。昴君自身、いっしょに過ごすことには慣れているみたいだったし」

「軽薄な男だと、ちーちゃんと思うの？」

私は、無言で首を振る。

そもそも、そんな風に移り気であるならば、昴君が時折見せるあのせつなさそうな、何かに耐えるような表情は、見せないと思う。きっと、傷付いているから、あの綺麗な顔を歪ませるのだ。

私は、わかる。

恋を知って、今、わかったのだ。あの意味が。

昴君には、大切な存在がある。そして、叶わない想いを少なからず抱いている。私はそれが、やなぎんに対するものだろうと思っ

いるから、だからこそ、辛い。

叶わないのだと、私もまた、痛感してしまうから。
またひとつ、整理してみると彼の中を知れた。そうか、あの顔は、
そついう意味で、間違っていない。きっと。

「わからないのは、私なんだよ」

「？　ちーちゃん」

呟いた言葉に、まーくんは首を傾げる。

「私の存在って、昴君にとってどれほどの大きさなんだろうって、
ずっと考えてるけれど、わからない」

「……それは、むずかしい問答だね」

「きつと、そんなに小さいものではないと、思っただ。希望的観測
でもあるかもしれないけれどさ。でも、彼にとって、私は逃げ道な
のかもしれないから」

「逃げ道？」

「昴君、言ってた。やなぎんは異性としてしか恋愛できない男であるか
ら、万に一つの可能性もないって。だから、疲れたって。忘れさせ
てほしいって」

頬杖を付いて、無意識に外の景色を眺める。

冬の空は、空気が澄んでいて、とても綺麗だ。

気付く。

私はまだ、昴君以外のものを綺麗だと思えるのだと。こうやって、
私のなかの気持ちは、少しずつ消化されていくのだろうか。いつか、
特別じゃない、綺麗という言葉を、彼にむかって放てるのだろうか。
私がぼんやりと眺めている窓の外を、まーくんも同じように見や
る。ふたりでしばらく青空と流れる雲をみて、やがてどちらからも
もなく立ち上がった。

「まーくん、ありがとうね」

「俺は何もしてないよ」

「ううん、色々助けてもらった。うれしかったよ」

「ふふ。ちーちゃん、近付きすぎたら、色々見えなかもしれないけれど、ちよつと離れたら、きつとわかるよ」

「ああ……さっきの、話の続き」

客観的に、というやつだよな。それが冷静にできればいいのだけれども。

むう、と眉間に皺を寄せれば、まーくんは声をあげて笑いつつ、私の頭を撫でてる。

まーくんの手はあたたかくて、心地よい。けれど、ときどきしない。

人のところというのは、不思議なものだ、と、改めて感じた瞬間であった。

自動販売機でココアを買いなくなり、教室へとむかうまーくんとわかれた。

昼休みもあと10分ほどで予鈴が鳴ってしまうから、急がなくては。

少し早足で階段を下りようと足を踏み出した時、一瞬だがたちくらみのようなものが起こり、身体が僅かながら傾いだ。

「? どうしたんだろ……」

ひよつとすると風邪を引いたか、はたまた知恵熱でも出たのだろうか。考えたら、ここ最近ずっと考え事ばかりしている。普段あまり使わない脳みそを思いのほか酷使していたのかもしれない、私はそんな自分に苦笑してしまう。

今度は少し慎重に、一階の自動販売機まで歩く。階段を踏み外したら、それこそ洒落にならない。平坦な道になったところで財布の中身をちらりと覗き見しながら、小銭がちょうどあることを確認すれば、私は俯いていた顔を上げた。

目的地はすぐ目の前。あと数歩進めば、糖分が摂取できる。

だというのに、私の足はこれ以上進んではならない、と強制的にその動きを止めた。脳が、本体へと危険信号を送ったのだ。

「……ココアでも買いに来た？」

につこりと微笑む昴君は、男性だというのに実に艶やかな表情を作ってみせる。あまりに整いすぎたその美しさに反応したのか、私の背中に一筋の電流が走った。

その身震いは、決して恐怖からではなかったが、どうやら昴君は状況的に私が竦んでいると判断したらしい。まあ、間違っではないだろう。だって、私は無意識下で彼にこれ以上近付くのは危険だと思ったのだから。

昴君は、くつ、と今までにない皮肉じみた表情で笑うと、ゆっくりとこちらに向かってくる。

あ。

だめだ、なんでかわからないけれど、怖いや。

たら、と額から滑り落ちた汗に、私はやっぱり怖がってるんじゃないか、と脳内で自分に言ってみる。いやしかしだね、これはつい数秒前の昴君の腹に一物あるかのような笑顔をみたからじゃないのかね、いやいやしかし元々どこか怖がっていたからこそ歩みを止めたのじゃないやいや今はそんなことどうでも。

そう、考えている場合じゃなかった。

がし、とつかまれた私の左手首。昴君の右手が、食い込んでぴりりと痛みが走った。それに反応して顔を歪めると、昴君がますます笑みを深くした。

「もっともらしいことを言って。本当の事を隠すだなんて、ずいぶんじゃないか」

いつもより数段低い声音ではなれた言葉。その意味がわからずに、私は困った顔で彼をみつめる。昴君は、苛立ったように舌打ちしてみせた。

こんなに露骨な彼を、はじめてみる。一体、どうしてここまで怒っているのだろうか。

「まーくん、だっけ？幼なじみなんだってね」

幼なじみ？まあ、昔から仲良くしている人間だという意味では間違っていないけれど。私は、まあ、と小さく返答する。

「彼のこと、好きになったんでしょう？僕と付き合ってて、自分の本当の気持ちにでも気付いた？だとしたら、僕はとんだピエロだね」

さつきから何を言ってるんだろう、この男は。

確かに、まーくんは私にとって大切な存在である。しかし、従兄弟というのは、案外、近すぎる距離であると、あくまでも私達個人の意見であるが、そう感じているところがあるし、周りもそれで納得してくれる事が多いから、やはり多かれ少なかれ、そんな風に育つ関係に該当するのではなからうか。

私とまーくんは、割と幼い頃からそういった対象としてお互いを排除している傾向にある。

そもそも、兄妹のように近く育って、父と似た雰囲気を持つ彼を、どうして私が恋愛対象として見れるのだろう。お風呂に入ったこともあるし、高校生になってから並んで寝た記憶だってある。もちろん、何も事件は起きていない。

昂君は、そういった背景をまったく知らないのだろうか。あかりから、どういった風にまーくんの話を聞いたのかはわからないが、さすがにありえない誤解である。

早々に否定したほうがよいだろう。まーくんにも色々と迷惑がかかる。

「あのね、昂君。まーくんとは」

「うるさい」

「！ え」

「そんな風に他の男を呼ぶな！」

激昂したように叫ぶ彼に驚いてかたまれば、次には柔らかいなが触れた。

唇の感触だと気付くまでに、それほど時間はかからなかった。複雑であるが、昂君によって馴らされた体は、それを十二分に覚えていたのだ。

「ん……っふ」

苦しくて少し開いた唇の隙間を、奪うように昂君が埋める。無遠慮に割り込んだ舌は、最後にした接吻のときよりも熱かった。

やがて響く水音に、理性が崩壊しそうになる。やめて、と。身体を押して否定の意思を伝えても、正直な本能は彼を求めているのだから、まるで説得力がない。

なかなかきちんとした抵抗ができずに、昂君の舌に、唇に、翻弄される。

「……淫乱」

「！」

「他に、好きな男がいるくせに、俺で反応してる」

浅い呼吸を繰り返し、涙を眦に溜め、彼をみつめれば、実に冷ややかにこちらを見下ろしていた。

瞬間、私のところは凍りつく。

今、まちがいでなければ、昴君に軽蔑されたのだ。私は、女として、彼に、侮辱された。

事実が突き刺さると同時に、冷たい彼の手が私の頬に触れる。

たまらず身震いすれば、ほら、と昴君は小さく笑いつつ、耳元で囁いた。

「キスだけで、そんな反応するくせに。まーくんにも同じような顔をするの?」

「や、おねが、やあつ!」

「大声を上げると、誰か来るかもよ?見られてもいいの?」

酷い言葉の数々に、私は大粒の涙をこぼす。

どうして、昴君。そんな、酷いことばかり、言うの。

これ以上、私を決るような事を言わないで。どうしてなの、何がそんなにあなたの怒りに触れたの。

わからなくて、涙を溜めた目で彼を見れば、ぞっとするくらい冷やかな顔で私を見下ろしていた。綺麗なその顔を、今は視界に留めることすら望まない。

だんだんとぼんやりしてきた頭の芯を意識しながらも、口角を歪に曲げた彼の顔を認識すれば、私はまた悲しくなった。

「ねえ。教えてあげようか?まーくんに、千絵子は首が弱いんですよって」

「ひど……い」

悲鳴に近い嬌声をあげながら、なんとか呟いた一言。それに反応

した昴君は、一瞬動きを止めた。

「……どこにも、行かないで」

「え……？」

昴君の言葉に、私は逸らしていた視線を向ければ、真っ直ぐに彼の瞳をみつめる。

涙こそ流していなかったけれど、はつきりとわかった。

今、彼は泣いているのだと。

「はなれていつちゃ、嫌だ。最初から、卑怯だってわかってた。間違ってるってわかってた！」

「昴君……？」

「でも、しょうがないじゃないか。どうしたって手に入れたかったんだよ、千絵子を！」

何を、言っで、るの？

昴君。

昴君、昴君、昴君。

おねがい、あなたの思ってることを、全部聞かせて。

なんだっていいんだ、どんな些細なことだってかまわないから。君の、隠していたほんとうを、教えてよ。

「千絵子……やだ、別れるなんて、言わないで」

「え……？」

お願い、どこにもいかないから。逃げたりなんてしないから。

「千絵子、好きだ。俺以外のところへ行くなんて、許さない。いかせない」

「昴君……？」

泣かないで。そんな苦しそうな顔をしないで。させているのは、私なの？ねえ、昴君。

なぐさめたくて。泣く必要なんてないんだよ、と伝えたくて。手を伸ばしたいのに。

「……千絵子さん」

あなたにとって、私は、どんな存在なの？

「……………好きなんだ」

きつく抱きしめられても、夢の中をたゆたう私には、そのぬくもりをはつきりと感じるができない。

不自然に荒くなった私の呼吸に気付いたのか、先程まで冷静さを失っていた昴君が、驚愕に目を見開いた。

「千絵子！？」

焦ったような声に名前を呼ばれて、朦朧とする意識の中、大丈夫だよ、とだけでも伝えたくて、私は微笑んでみせる。

何度も名前を呼ばれながら、昴君にとって私がどんな存在なのか頑張って考えてみたけれど、やっぱりわからなかった。

ねえ、心配してくれるの？

もしそうだしたら、ちょっと嬉しいんだけどなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1799z/>

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

2012年1月5日21時48分発行